
ナキモノ

nylon;

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナキモノ

【Zコード】

Z9390M

【作者名】

那葵

【あらすじ】

卵巣庵というがらくたばかりを置いた不思議な店の主人那葵を中心とした物語。主人公の心が、卵巣庵の世界でどのように変化していくかが物語の核心となる。

主人公の心が、卵巣庵の世界でどのように変化していくかが物語の核心となる。主人公の心が、卵巣庵の世界でどのように変化していくかが物語の核心となる。

主人公の心が、卵巣庵の世界でどのように変化していくかが物語の核心となる。主人公の心が、卵巣庵の世界でどのように変化していくかが物語の核心となる。

現実と非現実。有と無。絶望とフェティズムによる逆転する理想世

界。

冷たかつた異質の物体が、初めて体の一部になつて、もう随分経つた。

受け入れる事に躊躇はなかつた。全てを跳ね返す銀色の光沢は酷く魅力的で、それに抗う事等出来る筈もなかつたのだ。
どこか懐かしくもあり、未知でもあり、正しく自分自身の求めているものだと無意識のうちに自覚した。

万物の真実が垣間見えた。

だから自ら選んで欲した。

インプラントされていくその痛みにさえ酔つた。確実に身体へ埋め込まれて行くのを痛みによつて感じ、安堵したのだ。埋め込まれた部分から、徐々に自分と同一化されて行く。妙に透明感を持つた赤黒い血液に侵食されても尚、輝きを失わずに自分自身になつた。
全てが綺麗に埋め込まれ、すっかり定着してしまつと、それは左胸の上で温もりを持つ。波打つ脈動すらも自分の物にし、まるで始めから身体の一部であつたかのような錯覚を起こさせる。
肌の上からその金属版の微かな出っ張りをなぞるとそれだけで救われる心地がした。

何に救われたかつたのか

救い等を求めていいるつもりはなかつた。それはある意味救いではあつたのかも知れぬが、希望が無い救いだつたのである。明確な绝望が欲しかつた。

異物を取り込んだ時、やつと望んでいたものを手に入れられた事を実感した。

絶望を埋め込まれて、絶望を知り、絶望に安堵したのだ。安楽の場所が確かにあると知つた。

自分自身を異質へと変えて、永遠の苦しみを得る。苦しみは安らぎだ。

それはただ表面上だけの錯覚なのかも知れぬ、と分かつて。だがそれでも良かつたのだ。何も変わらないよりはよっぽどいい。あのままでは生きている状態も死んでいる状態も変わりがなかつたのだ。いつそ全てなかつたことにして消されてしまった方が良かつた。

例え死んだとしても、存在した事実は曲げようもなかつたし、死んでも骸は残り、存在を無意味に主張するからだ。

それが無性に嫌だつた。だから生きることが嫌でも死ぬことは出来なかつた。そして異形に憧れた。

異形 つまり人外である。

人間の閑知しない世界の住人になりたかつた。勿論そんな世界を信じていたわけではなかつたがそれでもどこかが望む気持ちが確かにあつた。

そしてその気持ちが正に勝利したかの如く、人外への道を見つけたのだ。それが世間一般にとつての在るべき人外の姿かどうかは知らぬ。だがそんな価値観などどうでもいいのだ。要は自分自身にとつてそれがそうであるのかどうかが重要な因子となる。

無数に埋め込まれた硬い温もり。そして悪戯のように散りばめられた消えない傷跡。全てが愛おしく、失われていた自分自身がそれら一つ一つによつて甦つて行くようだつた。

そして幾つ目かの異物、幾つ目かの傷を受け入れた時にやつと人では無い者になる資格を得たのだと分かつた。欠けていたピースは後一つで全て揃う。

最後のピースは理解と共に訪れた。
それは万物の真実そのものだつた。

主に会つたのだ。

一目で惹かれた。主の姿を見ただけで、そうとは気付かずに散り散りになつていた世界が一瞬のうちに集積していく。

主は完璧だつた。陳腐な言葉で言えばそれは正しく 神。果てる時まで永遠に仕えなければならない絶対的な存在。何故この存在

を今まで知らなかつたのか不思議に思つ。否、知らなかつたのではなく忘れていたのだ。

そしてその存在を忘れ去つてゐる間も無意識に仕えていた。愚かしくも人間と言う狭い檻の中に迷い込んでしまつても尚、主の意図は全て届いていたのだ。

主の傍らには一人、恭しい様子で控えている者がいる。それは闇の中から無限にも広がると思われる重厚な声で語りかけてきた。

「改めて紹介させて頂きます。私は名も無き主の僕。しかし僕は私だけでは御座いません故、便宜上この姿の間はレビと名乗つております。そしてこちらは我が主。主には名前等必要ありません。主と言つものはこのお方以外に御座いませんし、本来ならば主、という表現も必要等ないのです」

この声は幾度も自分に施術を施してきた男のものだ。姿も違えば声も違う。だけどすぐに理解した。これが本質なのだ。

「貴方様ももう十分こちら側の住人としての資格を得たようで御座いますし、主からのたつてのご希望でも御座いましたので本日ご紹介させて頂く事に相成りました。本日は誠に良い闇が満ちておりますからね」

にんまりと笑みを湛える姿は不気味だつた。

牙が覗く赤黒い唇に黄土色の肌、ゴルゴンのメドウサを思わせるうねうねとした蛇のような髪の毛、爬虫類のような黄色の光を帯びた眼は右目だけで、左目はぴつたりと縫い合わされている。細長い身体には鈍い銀色の角が背中から肋骨のように張り出しているし、ぶよぶよとした鶏冠のような物が腰の辺りから垂れ下がつていて、手は鍵爪のようで丸ごと頭蓋を包んでしまえる程大きい。その姿は正に異形と言つて良いだろつ。

だが、その姿はとても懐かしいものだと思った。姿とは裏腹にきつちりとした詰襟の礼服を纏つてゐるのも、芝居がかつた慇懃な態度も、全てが心地良く感じられた。

レビは最後に大仰な身振りで身体を折ると、滑るように奥に引

き、殆ど闇に埋もれてしまった。主の輪郭が一層際立つ。

主はゆっくりと微笑んだ。

「はじめまして」

響いた声音は透明だった。透明故に圧倒的な支配力を備えていた。それは、身体に埋め込まれた金属を震わせてそのまま体内に溶けて行く。

そしてその姿はレヴィとは全く異なる異形だ。銀糸の髪に銀色の瞳、殆ど白と言つても差し支えない程の肌の色　　主は余りにも美しかった。

そしてそれ故に人ならざる者なのだ。

幾ら優れた詩人でも到底その姿を的確に言い表すこと等出来ないだろう。どんなに腕の良い人形師であろうともこの美しさを再現することは不可能だと思われた。それどころか全く違う形であつても、主に匹敵する美等造り出せはしないし、存在すらしないだろう。

主は全人類にとって共通の美だった。そして全ての者に同じ感覚を抱かせるのだ。

つまりは存在を疑われるもの。

異形である。

美しい異形はただ微笑んでいる。何を求める訳でもなく、ただ微笑んでいる。

「Jの異形は紛れもなく「J」の主であった。

空は苦々しい程の晴天だつた。

今年の夏は猛暑であつたが意外に暑さは長引くこともなく、九月も半ばになると途端に肌寒さを齎した。だから晴天と言つてもそれ程日差しがきつい訳でもないし、世間で言う所の気持ちの良い秋晴れという感じの空模様である。

だが今の長坂義文には苦々しい以外の何物でもない。元々日差しには弱い性質だったし、今の心中を天気に準えるなら曇天であるからだ。気紛れにぽつぽつと小雨を落とすようなすつきりしない曇天である。これが大雨だつたら実際の天気を気に掛ける余裕は無かつただろうが、曖昧な曇天故にどうにもその落差が気に障つた。こう感じてしまつるのは自分自身の精神状態に起因しているというのに、何もかもこの晴天に原因があるような気がしてしまつ。ハッ当たりだ。自分でもそう分かっているが、かといってこの胸のむかつきが消える訳でもない。

何故こんなにさくくれ立つた心境に陥つているかといふと理由は明確である。今日職を失つたからだ。いや、正確に言えば自分自身の意思で辞職することを決めたのだが、その辞職の理由を引きずつてゐるという訳である。

辞めるという強硬手段まで取つたのだから、理由などこの際過ぎ去つたこととして割り切れば良いと頭では分かつてゐる。だが、そつ簡単に気持ちが切り替わるかと言つたらそういう訳にはいかない。生憎楽天主義者でもないし、どちらかと言えば過ぎ去つたことで思い悩んでしまう性質なのである。

こればかりはどうしようもない。

昔からの癖なのである。それを良い方向に活かせれば良いと思うのだが、今までこの癖のお陰で良い方向に事が運んだ試しなく、義文にとつては悪癖以外の何物でもない。

辞めてきた仕事は元々肌に合わなかつた。毎日単調な作業をこなすだけの役所の事務勤め。何の刺激もなければ仕事に対する意義も持つことが出来なかつた。

仕事とはそういうものなのだと言われてしまえばそれまでなのか、も知れないが、それで納得出来ない自分が確かに存在しているのに、目を瞑ることは出来なかつた。

就職難と言われるこの時代に、安定した職を持てるだけでも恵まれていると言えるかもしない。だがそれは他者と比較した場合の話である。社会生活を嘗むに当つてその比較は重要だつたとしても、そんな比較をして満足する人生に何の意味があるのだろう。

今回辞める直接の原因となつたのは些細なことである。上司が気に食わなかつたからだ。

勿論気に食わないと言つても仕事をする上では苦手な種類の人間とも折り合いをつけて接しなければならないし、単に人の好き嫌いで辞めた訳ではない。謂れのない文句を付けられたことが気に食わなかつた。

上司側が予め伝えておかなければならぬ事項を伝え忘れていたという否があつたにも拘らず、その責任を押し付けられ、挙句そのまま義文を責めたのだ。

義文は通常通り業務をこなしていただけだし、客観的に見ても全く否はないだろう。理不尽な振る舞いに眉を顰める同僚も決して少なくはなかつた。

過去にも似たようなことが何度かあつたが、いつものように納得出来ないながらも何とかやり過ごすという事がこの時はどうしても出来なかつた。今までの我慢が積もりに積もり、許容量を超えて一気に溢れ出てしまつたからなのかもしれない。結局そのままの勢いで辞職を申し出たと言う訳だつた。

辞めた事を全く後悔していないと言えば嘘になる。やはり自立て生活していくなければならない立場だし、金銭面の心配もある。だが、それよりもまず辞めた事が逃げた事のような気がして悔しい

のだ。

義文は周りに思われている以上に責任感が強い。課せられた義務はこなさないと気が済まない性質なのだ。例えそれが辛い事であろうとも、一度その枠に入ってしまえば筋は通す。でなければそれに異議を唱えることも出来ないし、明確な主張も出来ないと思つていいからだ。

しかし、それはあくまで理性的な考え方であり、感情を制御できない場合もある。つまり今回はその感情を制御出来なかつたことになり、それへの自己嫌悪に襲われているのだった。

この春就職したばかりだから義文が突然辞めたとしても大した痛手にはならないはずだが、それでも迷惑は掛かるだろうし非常識でもある。

せめて一ヶ月後に辞職するとかにすれば良かつたのかもしない。後からそんなことを何度も考えたが、感情的になつてゐる時はそこまで頭が回るはずも無かつた。

自然と深い溜息が零れ落ちる。

だが、今更幾ら考へても仕方がない。もう過ぎたこと 早く気持ちを切り替えて新しい仕事を探さなければならなだり。

まだ一向に気分は晴れなかつたが、それでも街中をぶらぶら歩いていると幾分頭の中の整理は付いていた。相变らず晴天の空模様に腹を立てながらも、周りの景色を見る余裕も生まれている。

広くなつた視界で見る景色には古めかしい商店や家々が並んでいた。見慣れぬ道だ。

裏路地の細い道では車の通りも人通りも殆どない。無意識にこの道を選んで歩いていたのが納得出来る。人目を気にする必要もなく幾分気楽な気持ちで歩くことが出来るからだ。

ちょっと角を曲がつて真つ直ぐ行けば毎日のように通つていた大通りがあり会社もあるが、元々出歩くのが余り好きではない義文は近くにこんな通りがあることを今まで知らなかつた。距離としては僅かな差だと思うのだが、雰囲気はまるで別の国、時代ではないか

とこうくらいがらりと変わつてゐる。

むくむくと湧き出る好奇心のまま、連なる店先に視線を投じる。何を扱つているのか義文には良く分からない店ばかりだった。古びた本が沢山積まれているのを見て古本屋と分かつくらいで、他は雑貨だか骨董品だかを扱つてゐるような、明確な名称を付け難い店等がぽつぽつと並んでゐるのである。また、客らしき姿は殆ど見当たらぬし、客は居なくとも店主は必ず居るはずなのだが人の気配と言うもの 자체が希薄だ。寂れていると言うのが良く合つた通りである。ここが都心であるというのが一瞬何かの間違いなのではないかと思つてしまつ程だ。

義文はこんな雰囲氣を感じられる場所というのを実際に体験したのは始めてだつたが、良いものだなと思つた。眺めて歩いているとそれなりに楽しかつたし、なんだか昔にタイムスリップしたような氣分になる。新鮮でどこか懐かしいような不思議な感覚になつた。

初めは何となく眺めていゝつもりだったのだが、いつの間にか随分熱中して見ていた様である。ついさっきまで胸の内を支配していたもやもやした気持ちも雲散霧消していた。それに気付くと可笑しくなつて知らず微笑が漏れる。

こんな風に笑つたのは初めてだつた。

僅かに軽くなつた足取りで暫くそうして歩いて行くと『卵蔓庵』^{らんづるあん}と掲げられた店があつた。随分立派な古めかしい木目の浮いた看板である。

店 자체も看板同様随分古いようだ。くすんだ色合いの木造建築は重厚な迫力を醸し出している様にも思えたが、全体的に小ぶりであるし、何故か飄々とした印象の方が強い。建物が飄々としていると言つるのは可笑しな表現だと思つたが、事実その言葉が一番しつくり来る気がした。

同じように古い店は他にも並んでいたが、義文は妙にこの店が気になつた。開店の札が掛かっているにも関わらず中の様子が伺えないと、店の正体が全く分からなかつたからだ。それ故に飄々とし印

象を持つたというのもあるのかもしれない。

ここまで見てきた店にも何の店なのか一見分からない場合があるが、何かしら扱う物の名前が書いてあり、無くとも外から見える位置に品物が並んでいた。そういう配慮がこの店には一切無いのである。

屋号を掲げているのだし、開店の札も掛かっている、紛れもなく店であることに疑う余地はないと思われたが、全く商売をする気がないと思われる程に自己主張がなかつた。閑古鳥が鳴いてもおかしくない程人通りもない場所での商売だと言うのにこれでは誰も客など来ないのではないかと思う。

でも、だからこそ気になつてこの店に入る客も居るのだろうか、そう思いながら義文自身も気になつて恐る恐る店のドアに手を掛けている。

扉は微かに軋んだだけですんなりと開いた。幾らなんでも鍵まで掛け忘れて店を放つておくことはないだらうし、誤つて開店の札を掲げていた訳ではないと思うが、中は驚く程に薄暗い。

それとも何かのつひきならない事情があつて店を放り出したのかまさか、とは思うが実際のところそう思った方が今の状況にはぴつたり当てはまるような気もした。人影すら見えない。

だが兎に角事情は分からぬが店が開いていると言うことは事実だ。もし何かの間違いでも、言い訳は充分立つ。少しだけ見てみようと思い店内に足を踏み入れた。別に疚しい気持ちは無かつたが、気持ち音を立てないように注意を払つてしまつのは仕方ないだろう。さて、入つてみると店の中は實に可笑しな配置だった。天井まである棚が入り口だけを除いて四面にびつしり置かれており、壁際に沿つてぐるりと品物が並べられているのだ。

何か呪いにでも使うような人形、瓶やら箱、中に何が入つているのかは良く分からぬが、実験で使うような無機質な感じの物から色取り取りの原色で彩られた物まで様々である。下のほうにはやけに大きい壺とか置物だとかも並べられており、雑然とした印象で

ある。

床面積は割りとあると言つのに何故壁際にだけ品物が押しやられて並べられているのか 天井には棚にある物と似たり寄つたりの品が無作為に下げられたりしているものの、中央はやけに伽藍としていて何ともバランスが悪く、またその配置によつて奇妙な雰囲気はますます高められている。

一通り店の様子を入り口で眺めてから、開けつ放しになつっていたドアを閉めた。僅かに自然光で見えていた世界が急速に薄暗い世界へ馴染んで行く。それでもぼんやりとした橙色の照明が点つていおり、慣れてしまえば視覚的に不便さは感じない。

仄かな明かりの中、今度は間近で品々を眺めていく。だが、説明書きも何もない品々の中で義文に分かつたのは何かで見たドリームキヤツチヤーという悪夢を避けると言われるお守りくらいの物だつた。確かアメリカンインディアンに伝わる物だつたか と言うことは民芸品等を扱う店なのかもしぬれない。そう考えるとどこか不気味な様相を呈していった周りの品にも幾分親近感が沸いた。

品物の数は多いがただ眺めるだけなら全て見るにもそれ程時間はかかるない。それでも十分程度は経つていたのではないだろうか。その間聞こえてきたのは自分の足音だけで、物音一つしなかつた。やはり誰も居ないのだろうか、そう思うと何故かとても残念な気持ちがした。そして根拠なく何処かに居るのではないかという気もした。

だが、元々人が居るようには見えなかつたのだし、壁際に品物が並べられているのだからこの店の中に入人が居たらすぐに分かるはずである。もしこの店の中に居るのだとしたら、それこそ品物の中に埋まつていなければ見当たらないと言つことはない。

そこまで考えて会計する場所も見当たらない事に初めて気付き、益々疑問は膨らんだ。これでは客が困るのではないだろうか。

勿論義文は買い物をしたくてこの店に入ったわけではないのだし、余計な心配と言われればそれまでなのだが、誰だつてそう思つだろ

う。

そして無性にこの店のことが知りたくなってきた。若しかしたらそのうちひょっこり店主が現れるかも知れない。こんな店を経営している人物とは一体如何なる御仁なのか そんな期待を胸に暫く待つてみようと決意した。どうせ帰つても直ぐに仕事探しなど出来るわけもないのだ。

ただ、義文は民芸品には興味もない。一度眺めればもう満足である。一旦待つとは決めたものの床に座り込む訳にも行かぬし、暇を潰せる様な物も持ち合わせていない。さて、如何した物かと思ったが元より普通店の中では品物を見ているより他はないとも思い直して一つ一つなるべく時間を掛けて見ていく。

初めは義務的にやっていたのだが、何時の間にか夢中になつて見ていたらしい。ざっと見た時には分からなかつた部分まで見えてきて面白いと感じingになつていていたのだ。

それらは実に凝つた造りの物ばかりで、同じように見える物でも僅かに個体差があり、大衆向けに作られた大量生産の模造品でないことが分かつた。もしそうだとしても中々に年代を感じさせる品も多く、その中に固有の歴史が詰まつていてる気がする。

そんな風にしてコレクターの心理をも理解し始めた頃、不意に床の下からそれを叩く音と振動が伝わってきた。余りにも唐突だったため危うく手に持つていた小瓶を取り落としそうになる。中には薄黄色と思われる色合いの液体が入つていて、落とすとしまつたら確実に割れ、中身は回収不可能な状態になつてしまつだろう。もしかしたら何か危ない薬品の類では、との考えが頭を過ぎり、正に心臓が口から飛び出てしまわんばかりに慌てた。

幸い小瓶は手から滑る落ちることもなく、義文の手から棚に戻されたのだが、一体床下からの音の正体は何なのだろうと、次は違う意味で肝を冷やした。

床を暫くじつと凝視してみたが同じ事は起こらなかつたし別段変わつたところもない。暗いせいが殆ど黒に見える床は相当古い板が

はめ込まれているらしく歩く度に軋んだ音を立てたが、幾ら古くても人が叩いたような物音を立てる床など聞いたことがなかつた。義文はその場にしゃがみこみ、更に床を観察してみると一部分はめ込まれたようになつてゐる事に気付いた。埋め込み式の取手まで付いてゐる。

つまりは床下に倉庫か何かがあるといふことだ。

丁度義文はその上に立つていたらしく、若しかしたら中に店主が居て、開ける事が出来ずに居たのではないかと思い至つた。そうでなければあの音は説明が付かない。

義文は店に入つてからどれくらい経つたのか良く分からなかつたが、結構な時間品物を見ていた気がする。その間全く下から物音がしなかつたし、まさか床下に誰か居るなどと想像だにしていなかつたから若干訝しじだが、自分が蓋をしていたのだという責任も感じ、取手を引っ張り出してそつと開けてみた。

それは意外に重く、厚さは五センチ程もある。びつちり嵌つたそれを漸く開き切ると慎重に中を覗いて見た。そこはほんのりと明るかつたが、店の中より暗い。更に予想よりも深いようで成人男性が真つ直ぐに立てるくらいの深さはあるものと思われた。梯子も掛けられてゐるし、やはりこの中に入り居るのだ。

降りてみると奥の方からひょっこりと人が現れた。物音も立てずに現れたので一寸吃驚したが、漸く店の人間に出会えたという喜びにすぐさまとつて変わる。

「えつと、お客さん？滅多にお客なんて来ないから吃驚しちゃつたよ」

店主と思われるその人物は想像を裏切つて随分若かつた。まだ二十代であることは間違いないだろう。それに随分と綺麗な顔立ちをしている。

真つ黒な髪に真つ黒な髪の毛。目鼻立ちははつきりしているが西洋人のように特別彫が深いわけでもないし、流暢な日本語を話しているから日本人のはずだ。だがどこか日本人離れしている風貌だと

も思つた。だからと言つて他のアジア圏の人種のよつなかと問わ
れればそういう訳でもない。

これが国籍を超えた美貌と言つのだろうか、そんな事をぼんやり
と考えてしまつ。

「あの、この店の店主の方ですか？」

「うん、そうだよ」

若しかしたら従業員か何かのかも知れぬと思い確認してみたが、
店主で間違いないようだ。確かにこのような小さな店で従業員を雇
う余裕等はないだろうし、滅多に客も来ないのであつたらその必要
もないだろうが、義文は勝手に偏屈な変わり者の老人を想像してい
たのだ。真つ白な髪をもじやもじやと生やしてトルコ帽でも被つて
いたら正にこの店の店主にぴったりである。

それが實際は真逆と言つてもいい印象の店主だった訳なのだ。そ
の言葉に、期待を裏切られた、拍子抜けした、と思うのは自然かも
知れぬが何故か戸惑つた。

「あの開店の札が掛かっていたのでお邪魔したのですが あの・
・ここは何の店なのですか？」

黙つているのも決まりが悪く、咄嗟に思い付いたことを口に出し
たのだが、店主は相変らず穴倉の中から義文を見上げている格好だ
し、義文は義文でそれを見下ろしながら尋ねており、なんだか間抜
けな図である。尋ねてから、本当は何故床下に居たのかという事に
関して、まず聞くべきだったのではないかと思い、一人で狼狽した。
最も今の質問だつて気になつていたことではあるのだし、順番を
誤つただけなのではあるが。

「ああ、まあ趣味でやつているような店で、言つなれば僕の宝箱み
たいな店かな」

義文の不自然な様子も、特に店主には気にならなかつたらしい。
子供のような笑顔で答えてくれる。それを見て若干義文も落ち着き
を取り戻した。

そして宝箱と言わるとそんな感じだと納得する。

義文には、これら民芸品のよつな物が、特定の地域から集められたのではなく、様々な地域から、様々な文化を集積した品物のように見えたからだ。つまりそれを集める基準は店主の趣味であり、特定のジャンル分け出来る物では無く、民芸品には見えたがそれである必要も無く、店主の気に入れば何でも良かつたのだろ？。

「はあ　でもあそこに並んでいるのは売り物ですよね？宝物を売つてしまつてもいいのですか？」

扱っている物は理解したが、店が宝箱なれば品物は宝、ということになる。それは単なる比喩であつたのかも知れないが、自らの宝を売つてしまつというのはなんだか変な気がした。

「いや、あれは売り物ではないよ。値段とかも書いてないでしょ？」

だからあれは売り物じゃない。店の装飾品だね」

「えっ？ では何を売つているのですか？」

店の雰囲気自体店らしくなく、確かに値段もなかつたが唯一商品と思しき品は壁一面に並んでいる民芸品らしき物だけである。あれが商品ではないとすれば一体何を扱つているのか、義文には全く訳が分からなかつた。

「売つている物は無いよ。けど一応商売をしていると言えばしている。扱つているのが目に見える物ではなくて目に見えない物、つてことかな。だから売つていると言われると語弊がある氣がするなあ。言葉にすれば情報　いや、仲介屋つてところなのかな」

まあどっちでもいいのだけど、と最後は如何にも適当な結びだつた。面倒になつたのかもしない。

「仲介屋ですか　私が余り物を知らないだけなのでしょうが、仲介すると言えば不動産屋くらいしか思い浮かばないです。かと言つてここはそういう訳でもないでしようし　」

好奇心と遠慮が混ざつて義文の問いはなんとも歯切れの悪いものになつた。若しかしたら気軽に立ち入つて良い店ではなかつたのかも知れないと思つたのだ。

「まあ多少複雑なだけで不動産屋とそう大差はないさ。それより君

！今暇だつたら一寸下に下りてきて手伝つてくれないか？どうにも

一人じゃ大変でねえ」

突然の依頼に義文は一瞬氣圧され、阿呆のよつにはい？と聞き返した。

義文は興味本位で店を覗いただけではあるが一応訪問者とういう意味では客である。客に仕事を手伝えという店等聞いた事が無い。親しい間柄等では在り得ないことでもないだろうが、ほんのさつき知り合つたばかりだ。この反応も当然だろう。

「はい？じゃなくてはい、か、いいえ、で答えてよ。ああ、上だつたら心配しなくて良いよ。どうせ誰も来ないだらうし、来たとしてもすぐに行くから」

店主の中ではほぼ九割方義文は手伝い要員として決定されてしまつたらしい。店の心配など全くしていなかつたのだが、この場合ただ義文は流されるしかないような気がしてはあ、とだけ答えた。

元々義文にはすること等無かつたわけだが、それでも普通なら断つていいだろう。こういう傍若無人　唯我独尊とでも言つのだろうか、この手の人物は苦手なはずだつた。道理に適つていないというかそんな気がして出来るなら係わり合いにないたくないタイプなのである。

だがこの青年に関してはそういう態度が似つかわしい気がして、流されるのも仕方がないと思つてしまつたのだ。

「それははい、つてことなのかい？どうもはつきりしないけど…まあいいか。そう言えば名前は？僕は那葵なき」

『ナキ』とは義文には聞き慣れない名でどう書くのかも良く分からなかつたし、苗字なのが名前なのかすらはつきりしなかつた。

「私は長坂義文という者です。会社は先程辞めたのでもう関係なくなつてしまつたのですが」

義文は一寸迷つてから名刺も差し出し自己紹介する。名刺を出したことで遠まわしに相手の名前に關してもう少し情報が欲しいと主張したつもりだった。今は最早関係の無くなつた会社名等も入つて

いるが、残った名刺は処分するだけで、正式な挨拶でもないのだけに構わないだろうと思つた。

「義文ね。兎に角愚図愚図しないで早く降りてきて」

那葵は特に自分の名前を説明することもしなければ、名刺とか会社を辞めたとか、そういう事もどうでも良いらしい。名刺にはちらりと一瞥をくれただけで受け取ろうとはしなかつた。義文が一寸迷つてゐる間、待つてゐるのに痺れを切らしてしまつたのかもしだい。

義文はその様子を見ても別段落ち込むことも無く、寧ろやつぱり、と思つたくらいで急かされるまま、若干戸惑いはあつたものの闇の中へ降りて行く。

なんとなくこういう態度を取られることが分かつてゐた。

義文は既に大分前から会社を辞めた理由など如何でも良くなつてゐた。そして那葵と出会つていよいよ本当に如何でも良くなつた。出会つて数分であり、意識こそしていなかつたが改めて考へるとそんな気がした。

だが、本の僅かに残る蟠り^{わだかま}はあり、それを完全に吹き飛ばすため、わざわざ名刺も差し出したのだろう。この名刺を使うのも今日で最後だと会社を辞めた事實を再度認識する為、そして会社を辞めたという事實を第三者に知らせることができた。

更にその第三者は那葵のような人物であるということが重要だつたのではないかと思う。ただ、那葵のような人物とは?と問われても上手く答えることは出来ないだろう。

己の卑小さを知り妄執を落とす。

これは簡単な様で難しい。少なくとも義文にとつてはそつであつた。

だが、那葵という人物を得てそれはいとも簡単に叶つてしまつた。一種の思い込みなのかも知れないが、那葵にはそれが出来ると無意識に感じ取つてしまつたのではないだろうか。

那葵はそれだけの存在感、搖ぎ無い個という物を持つてゐる気が

した。

義文は別段人を見る目が優れている訳ではないし、こんな風に思
い込むこと等今まで無かつたが、那葵はどうやら例外なのかもしれ
ない。

奈落へ降りるまでの数秒ですっかり義文の迷いは吹っ切れていた
のである。

本庄百合恵は所謂引つ込み思案な性格である。

特に幼い頃の人見知りは酷いものだった。二十歳になつた今でも人見知りはあるものの、何故あれ程に人見知りしたものか不思議に思う程だ。

過去の人見知りと今の人見知りとではその理由も違う気がして益々不思議に思うのかもしれない。

最早幼い頃の記憶など曖昧で、実際にどのように考えていたのかも推測でしかないが、当時の自分には初めて会う人間が人間と認識されず、怖かつたが故の人見知りだつたように思うのだ。自分とその周りのほんの僅かな人達しか同じ人間とは認識されていなかつたのだろう。つまり初対面の相手は宇宙人や何かと同じだった、とう訳である。

だが、色々な人と出会う機会が多くなり、人間というカテゴリーの意味を理解していくに従い、代わつて今度は自分と他者という線引きが出来る。人間の価値観の多様性を知つたのだ。

これはそのまま今の人見知りの原因であり、価値観はある程度経験によつて予測することが出来ても全く同じという事がないからである。

百合恵はどちらかと言うと人の感情の機微に鈍感な方で、表情や仕草等では中々読み取る事が出来ない。そして鈍感な癖にそういうことを気にしてしまう性質なのである。言つてしまえば気を遣うタイプという奴だ。

そして初めて会う人間に對してはなんら免疫もないから戸惑つてしまつ。如何接したら良いのか と。

如何してここまで氣を遣つてしまつのか 理由は大体解つてい
る。だが、それを直すことは出来なかつた。別段社会生活において不都合が発生する、と言つたレベルの問題でも無いから矯正する必

要性も無いのである。

偶に小さなきっかけが元でそれを深刻に悩む事もあったが、大体は一時的なもので、これが自分なのだから仕方が無い　と諦めてしまつのが常であった。

それに、気を遣つてしまつ理由の中には譲れない部分も含まれている。

まず、保身の為だ。ただこれだけを言ひと語弊を招くことになる。勿論自分の身の可愛さというのもあるのだろう。自分が傷つくのが怖いから、自分を悪く思われたくないから、と言う意識が含まれているのは自覚しており、否定はしない。こういつ部分は自分でも嫌いで直したいと思っている。

だが、或いはそれに含まれてしまいそうではあるのだが、百合絵が明確に分けて考えている理由が存在している。

それは円滑な人間関係を築きたいという理由だ。言葉にしてしまうと益々紛うこと無き保身の為ではないか、という感じがするがそうではない。要はそれが自分を中心としての人間関係ではなくて、百合絵の周りを一つとした人間関係を指しているという所が重要なのだ。百合絵はその人間関係を円滑にするが為の潤滑油のような役割を演じなければならないと思っていたのである。

百合絵は諍いが起きるのを好まなかつた。人同士が対立するのも嫌だつた。偏見、差別等が生じることも酷く悲しいと思う事だつた。つまりこういう事態を極力避けたかつたのである。自分の為でもあるが、結果的に皆が良い方向にいけるのだと信じているのだ。

かと言つて百合絵自身も感情はあるから、如何しても人間的に許せない部分はあるし、偏見も無いと言つたら嘘になる。だけどそれは百合絵の中で自分自身の嫌いな部分でもあり、そういうのを取り払う努力はしてきたつもりだった。相手を理解しようと努めてきた。

そして何時の間にか大抵のことではそういう価値観もあると理解し、積極的ではないにしろ気に入らない事柄でも或いは仕方が無いのだとと思うようになつていた。

これが良いのか悪いのか、はつきり言つて百合絵には解らない。その為にきっと百合絵と言う個が埋没してしまった印象も抱いていたからだ。

明瞭な意見といつものを持てなくなつていた。いつも考えればいつ思つし、ああ考えればああ思つ　といつ具合なのである。

勿論似たような事は誰にでもあることだと思つ。

例えば靴一つ買おうと思つても、デザインで言えばこちら、履き易さで言えばこちら、というような場合だ。だがこういう場合、別にどちらを選んだとしても結局は自分自身にしか影響が出ない。

百合絵が判断出来ないのは、その判断に置いて少なからず他人に影響が及んでしまう場合の事だ。それが例え大多数の中の一意見としてしか見られない場合だとしても同じだつた。全く余計な物を取り扱つて自分の本心を探つてみても答えは出てくれなかつた。

だから当たり障りの無い答えを出すか、それが出来ぬ場合、どちらかを籤引きで決定するような選択を取る事になる。様々な価値観を許容し過ぎたせいなのかもしれない。

最も全部が全部と言つことではなく、自分自身の考え方といつものが無い訳ではなかつたのだが、それは物凄く狭い範囲であるように思われるのだ。悪く言つてしまえばそれ以外は如何でも良い事、となつてしまふのかもしれない。百合絵は時偶、自分では気付かないもののこれが自分の本質なのだろうかと考えることもあつた。だが、やつぱりそれだけで説明がつくとは思えない。

百合絵が何故このような性質になつてしまつたかのと、いつと、勿論生まれ持つた本質と言うのもないわけではないだろうが、その家庭環境に置いて、という所が大きい気がしていた。

かといって百合絵の家庭は別段変わつたところも無く、極々平凡な範疇から脱していける訳でもないだろう。生活水準も至つて標準的だつたと思うし、別段家族仲が悪かつた訳でもない。

ただ　何となくぎこちなかつた。

家族構成は共働きの両親に百合絵、そして四つ下の妹と五歳離れ

た弟という五人家族。

誕生日やクリスマス、お正月にお盆等、そういう行事は家族皆揃っていたし、両親が共働きということで回数こそ少なかつたかもしれないが、家族で遠出した思い出も残っている。

友達の中には鍵つ子等も珍しくなかつたし、両親の離婚で片親の子も居たし、実際にその子達がどう感じていたかは別にして、世間一般がそういう家庭環境で育つた子供を指して評価したところの、愛情に恵まれずに育つた 　 という訳ではない。

実の子供を虐待するといった話がさして珍しくも感じられなくなってきた世の中である。そういう見方をすれば自分は恵まれていたのだろう。寧ろとても愛されて育つたと思う。

祖父母にとつては初孫に当つていたし、両親にとつては第一子つまりはそれだけ生まれた時の可愛がられようと言つたら半端なものではなかつたようだ。末っ子は甘やかされて育つ等と言つが、長子に対する思い入れもかなり強いのではないかと思う。勿論妹、弟も同じように愛されて育つた事に変わりは無いのだが、初めて孫、子供が生まれた瞬間と言つのは紛れも無く強烈な印象として残るのではないだろうか。

加えて百合絵はそこそこ頭も良かつたし、将来医者か弁護士に、とよく言われ期待されていた。結局百合絵にはその気は無かつたし、成長するにつれてそのような期待を掛けられることも無くなつたのだが、一時期は少しプレッシャーを感じていた時期があつたのも確かだ。

両親にしてみれば期待はしているものの、やはり幸せになつてくれるのが一番であつて、期待通りに進んでくれなくとも構わないと思つていたようだが、その当時はそんな事情などよく解りもしなかつた。

姉弟の中で自分一人離れていることもあり、長女としての責任も人一倍感じていたように思つ。

それは中学に上がつてから益々顕著になり、今まで分からなかつ

た大人の事情という部分も理解し始めていた。家族を客観的に見ると、いう事も出来るようになつた。

そして、一見幸せそうな家庭はいつの間にか百合絵には歪んで見えるようになつていたんだある。

父と母のぎくしゃくとした雰囲気が分かるようになつたのだ。それまでも両親の会話が余り無い事に気付いていなかつた訳ではない。ただ、仕事が忙しいのだろう、父は無口な性質なのだろう、そう思つて納得出来ていた。実際そういう部分もあるのかもしかつたが、当時の百合絵にもはつきりそれだけではないのだと感じ取ることが出来るようになつていた。

表面的には何も変わらない生活。基本的に一人とも優しかつたし、百合絵にとって掛け替えの無い両親であることに変わりは無い。でも一度それに気付いてしまうともう以前と同じではいられなかつた。恐らく両親のどちらが悪いと言うことでもなく、ただ相性が悪かつたのだろうと思う。何故結婚したのかと思つたりもした。だが恐らく最初は些細な綻びがあつただけで問題なかつたのだ。時間が経つにつれその綻びが修正不可能なまでに解れてしまつていったのだろう。

更に父は目に見えて孤立していくようになつていつた。

母は子供の事を一番に考えおり、それが行動でも分かつた。だが、父は無口で仕事の為に家を空けることも多かつたから、妹弟は断然母親に懐く形となる。だからこれは当たり前の事と言えた。

父は確かに家族の一員ではあつたがどこか異質になつてしまつたのだ。

母も妹弟もそんな父に対しても歩み寄ろうとはしなかつた。母はしていたのかも知れないが、いつの間にかきっと諦めてしまつていた。姉弟達はずつと幼かつたしそんな事を求めるのは無理な相談で、求めたところで酷な話である。

だから百合絵はたつた独りでその家族の内の均衡を保とうと足搔くことになつた。百合絵も父の考へていることは良く分からなかつ

たが、父が居るにも関わらず、まるで父が居ないかの如くに過ぐされていく生活が無性に悲しかつたのだ。

もし両親が離婚したいと思っているのなら百合絵はそれでも良かった。両親の人生である。子供を育てるという責任は全うしなければならないとは思うが、離婚してそれが出来なくなるわけではない。だが、離婚するでもなく何とも煮え切らない状況で、恰も自然消滅を待っているかの如くにその生活が続けられているのは我慢がならなかつた。

これでは何も変わらない。悪くなる一方の緩慢な自殺だとすら思った。

百合絵は問題を先送りしているその様子に腹も立つていたのかもしれない。離婚するならする、しないならしないですつきりとさせたかったのだ。姉弟にとつてもこの状態は良くないだろ、う、と。

かと言つて百合絵が離婚を勧めるというのは可笑しな話だし、百合絵が決断できる事ではない。実は母にそれとなく言つたことはあつたのだが、当面離婚を現実的に考へることは無さそうだった。

だとしたら取るべき道は一つ。

家族との間を取り持つ役割を担う事　それが百合絵の足搔いた方法だ。

家中の中では如何に気を遣つてゐる素振りを見せずにそれを行えるのかという事に苦心していた。家族の役に立とうとする一方、大袈裟な程陽気に振舞つたり、我慢を言つてみたり、そういう道化師のような役割も演じる。殆ど全てに計算が入つていていた事は百合絵自身が一番理解している。今考へると相当嫌な子供だとも思つ。だが、努力の甲斐あつてか、それ以上家族がぎくしゃくするような事態にはならなかつた。

今百合絵は家族とは離れて暮らしており、家族の関係性が普段どうなつてゐるのかは良く分からぬ。ただ、帰省した際には相変らず昔と同じ態度で接するのが癖になつてしまつてゐる。一人で居る時間が長くなつた分こうした態度は酷く疲れるものに感じられ、よ

く続けていた。すると、私が事ながらに感心してしまうほどだ。

実家に帰るのが嫌な訳ではない、寧ろ家族と会えるのは嬉しい。だが数日も居れば独り暮らしの手狭なアパートが恋しくなってしまうのは慣れのせいばかりではないはずだ。

人は誰でもいくつかの仮面を使い分けて社会生活を送っているものだろう。それが一番得策であるからだ。例え相手の態度が仮面を被つたものだと解っていても、それに満足してしまってすることも少なくない。正直であれば、つまり本質を包み隠さず見せる事が必ずしも良いという訳ではないのだ。寧ろ良くない場合の方が断然多いだろう。

そう頭では分かっている。だが、百合絵はそんな生活、そんな世間に疲弊していた。

仮面を被り過ぎたせいか、自分の本質が解らなくなってしまっている。正直であろうと努めても何故か偽善のような気がしてしまう。所謂疑心暗鬼の状態に陥っていた。

自分が良く分からなかつたし、自分が解らないから余計に他人の事も解らなくなつた。仮面を使いたくてもどの仮面を使って良いのか解らない。昔使っていた仮面を引っ張り出しても、本当にこの仮面でいいのだろうか、と疑惑に陥る。

最近の百合恵はずつとこんな調子で、元々引っ込み思案だったにも関わらず、更に輪を掛けてしまつた。殆ど人と関わる事、会話する事も避けていたといった有様で、何とか大学には出てきているものの、それ以外は殆ど引き籠もつて居るようなものだった。

一人は落ち着いた。一人の時は自然に本来の自分に戻っているような気がした。人前に居る時と、一人の時の差はなんなのかそれは分からなかつたが、そんな事は如何でも良い事だ。考えて、解つたつもりになつても結局人前でそれは生かせなかつたし、本来の自分だと思える時間が確かに居ると思える事実が大事だった。

そんな調子で、暫く誰とも連絡を取らなかつたのだが、ふと一人

の友人から連絡が入った。約一年ぶりである。食事でもしないか、
という誘いだつた。

元来特に用が無ければ連絡等はしなかつたし、遊びに誘われたとしても大体はいつかと先延ばしするか断つてしまっていたが、その友人には無性に会いたくなつてしまつた。だからすぐ不了解の旨を伝えると日取りを決めたのだった。

再会したのはそれから一週間後の土曜日。

友人の名は室井真美という。百合絵とは中学時代に同じクラスで、きつかけは忘れてしまったが、随分仲良くしていた。高校に進学してからは別々になってしまったが、ずっと親交が続いている唯一の友人、所謂親友と言う奴であつた。

真美は高校卒業後 専門学校に入学する際に
いたから百合絵と同じである。

だが、百合絵は学校こそ都内にあるものの住んでいるのは埼玉だったし、真美も学校は都内だつたが神奈川に住んでいたから余り頻繁に会う事はなかつた。それに中々専門学校というのは忙しいらしい。種類にも寄るのかも知れなかつたが、真美は服飾の勉強をしていて、課題も山のようだと百合絵は聞いていた。

茶店に入る。

「相変わらず髪を伸ばしているんだね。随分長くなつた」

髪切つたんだね。私は短いのが似合わないから一寸羨ましいな」

百合絵は物心付く頃からずっとロングヘアだった。反対に真美は中学時代からショートヘアでまことに髪型もえていた。今はアブリコットの色合いに染めた髪の毛を揃えていて、小作りで色白な顔に良く似合っていた。

「切っちゃうのは勿体無いよ。パー、マとかかけてみたら？折角長いんだからこりいろ遊べばいいのに。私はすぐ飽きちゃって伸ばせな

いんだよねえ。一寸伸ばしたいなとも思つてゐるんだけど、長いと大変そうだし、時間も掛かるからなかなかねえ」

真美は外見からも解る様に中身もさばさばとしていて、百合絵は自分とは正反対のタイプの真美に憧れにも似た感情を抱いていた。聰明でお洒落だつたし、アーモンド形の薄茶の瞳が印象的な美人だつた。少し気分屋のきらいはあるが、そこが猫のようだと感じさせる辺り、真美の魅力の一つとも言えるだろう。

そこに注文した飲み物が運ばれてくる。

ケーキも美味しそうだと二人で話したが、昼を食べたばかりだったので、真美はアイスコーヒー、百合絵はアイスティーだけ頼んだ。
「そういえば、前に私が貸したCD覚えてる? G a l l e y つていうバンドのなんだけど」

真美はストローを挿してアイスコーヒーを一口飲んだ。鮮やかなブルーで彩られた爪につい目がいく。

「確かヴォーカルがイギリス人 だったよね?」

百合絵は余り音楽に関して造詣が深い訳でもなかつたし、流行の曲等も良く知らないが、そのバンドの曲はやけに印象的でよく覚えている。プログレとかいうジャンルらしい。

勿論百合絵はそう言われてもぴんと来ない。一貫してダークな雰囲気で重低音が心地良いサウンドだつたと思う。激しい楽曲も多かつたが、バラードも美しく、ヴォーカルの聲音はどの楽曲にもしつくりと合っていた。出せる音域も広く、いろいろと声の調子も変わら一体どんな出し方をしているのだろうと不思議にも思ったのも記憶している。

「そうそう。まあ実際は国籍不明で、他のメンバーは日本人だけど、ハーフとかでもないみたいだし 外見から見ると確かにイギリス辺りの青年貴族っていう印象受けるよね。英語の発音も とは言つても私は英語なんて殆ど喋れないけど、完璧だし」

真美はそこでもう一口アイスコーヒーを啜つた。百合絵もそれに倣う。

百合絵が以前見たアーティスト写真では確かにヴォーカルを除く四人は日本人に見えた。ヴォーカルの名前は 確かレオンだ。彼は栗色の巻き毛で深い青の瞳の大層な美男子だった。

その写真は曲と同じくダークな雰囲気で撮影されていたが、彼が柔軟で優しい雰囲気の顔立ちであることが分かり、それが正しく貴族的な優美さに見え、百合絵は貴族イコールイギリス、と勝手に思い込んでいたのかもしれない。

「まあ私もそこまで詳しくないんだけどさ。兎に角そのバンドが今度ライブやるから一緒にどうかなって思つて。CD返してくれた時結構良かつた、みたいな事言つてたし、私も一度ライブ行きたかったよね。でも最近はすつと海外で活動してたらしくし、日本でライブっていうのかなり久しぶりみたい」

真美は時折思い出す仕草で視線を上に向けたりしながらも、本当に楽しみにしているといった感じの口調である。

百合絵もその話を聴いているうちにだんだんとライブに行つてみたいと思うようになつていて。一人だつたらそこまで思わなかつただろうが、元々気になつていたバンドだつたし、どのようなライブなのか興味が沸いた。とは言つてもライブに行つた経験等なかつたから行つたところで比較出来る訳ではなかつたのだが。

「行つてみたいかも。いつやるの？」

「えっと 都内では十月四日、五日だね。十八時開場、十九時開演。実はもうチケット取つてあるんだ。両日取れたんだけどどっちも行く？」

真美は手帳を開いて日程を確認しながら、もう行く気満々といった様子である。

百合絵も手帳を取り出すと予定を確認した。予定らしい予定など何も無かつたのだが、講義で遅くなる場合もある。幸いどちらも問題ないようだ。日にちを見るともう来週の話しだある。

「差し支えないんなら両方行こうかな」

「じゃあ決まりね。良かった。本当はね、チケット取つてくれた友

達が居て、その子と一緒に行くつもりだつたんだけど急に家の用事で帰省しないといけなくなつたらしくてさ。それが解つたのが昨日。今日偶々百合絵と会うことになつてたでしょ？だから丁度良いつて言つたら失礼だけど、若しかしたら大丈夫かなつて思つて聞いてみたわけ

真美は心底良かつたといった様子で天を仰いでいる。なんだかそんな様子を見ているだけで百合絵も嬉しくなつてくる。

「別に気にしないで。私もこんな機会でもなかつたら行けかなかつたと思う」

百合絵は本心からそう言つた。最近家に籠つてばかりだつたし、気分転換にも実際丁度良い機会だつたと思つたのだ。

その友達に行く相手決まつたつてメールしておくね と言つて真美は手早く携帯を操作した。殆どメール等しない百合絵とは違つて慣れた仕草である。便利な世の中になつたな 等と若者らしからぬ事を考えながら手持ち無沙汰にアイスティーを啜つた。

それから昔話やら近況報告やら他愛無い事をたっぷり一時間は喋つただろうか。喫茶店を出ても特に目的は無かつたが、一人で当てもなくウインンドウショッピング等をしていると、あつと言つ間に時間が過ぎ、軽めの夕食を取るとそれぞれ岐路に着いた。

百合絵は帰りの電車の中、久しぶりに外出らしい外出をし、土曜の混雑の中を歩きまわつて居た為か二十時前だと言うのに酷く眼ぐてぼんやりしていた。危うく電車を乗り越しそうになりながらも何とか最寄で下車する。

最寄駅の周りは民家が並び、まだそれ程遅い時間でもなかつたが人通りはまばらであつた。

星空の良く見える晴れた夜空を見上げながら今日一日を振り返る。疲れはしたが、出掛けた本当に良かつたと思つた。実は出掛ける直前、些か億劫に感じ始めていたのだから余計にである。歩いていると眠さも吹き飛び、すつきりした気分になつてきた。
なんだか無性にライブが待ち遠強い気持ちになる。

山に囲まれた長閑の風景^{のじか}。周りには煙が広がり民家がぽつぽつと点在している。

都内ではあるものの、都心のような賑わいは一切感じられない。昼間は仕事や学校で殆どが出張っているから特に人気が無くなる。だが、嘉山臣広^{かやまおみひろ}には関係の無いことだった。わざわざ都心に出掛ける用等無かつたし、それどころか外に出る事も稀なのである。

家中で全ては事足りていたのだ。

仕事はしがない絵描きである。仕事とは言つても絵だけで生計を立てるのは無理だったから趣味と言つた方が正しいのかもしない。それでも只管に絵を描き続けている。

食扶ちは祖父の残してくれた財産で十分事足りていたし、絵を描く以外には何もする気が起きないのでした。絵を描く事でさえもそれ以外は遣りたくないから遣っているだけであつて、絵で有名になるような事等に興味はない。

両親は存命中であつたが、息子の無気力な生活に口を挟む事はしなかつた。

両親とは離れて暮らしており、単に息子の状況を把握していないという見方も出来るかも知れぬが、そうではない。

父親は小さいながらも会社を経営していて、臣広には兄が居たから跡取りとしては別段必要なかつたのかも知れぬが、それでなくても尚更自分の子供であれば全うな道に進んで欲しいと願うだらう。だがそれはしなかつた。

これには理由がある。

臣広は高校時代に不慮の事故で、右目を失明してしまつたからだ。

事故の当日、臣広は両親、兄と一緒に食事に行く約束があり、待ち合わせをしていた。兄は両親と一緒に来る事になつっていたので臣

広は一人本屋で時間を潰し、時間の一寸前にその場所で待っていた。

すると、まるで見計らつたかのように頭上から派手な音がした。

条件反射で見上げると、窓硝子の破片と一緒に男が落ちてきたのだ。ほぼ真上であったから氣付いた時には遅かった。幸い男の下敷きになる事は無かつたが大小の硝子片からは逃げる事も出来ず、結果右目に入った細かな硝子で片目の視力を失う事になったのだ。

それ以外は奇跡的に外傷も殆ど無く、左目は無事だった。落ちてきた男は打ち所が悪かつたのか即死だったと聞く。

男が落ちてきた原因は良く分からぬといふことだが、分かつたところで視力が戻る訳でもないし、当時はショックが大きくてそこまで頭が回らなかつた。

それに現在の臣広にも如何でも良い事である。過ぎた事は仕方がない、そう思つていた。

だが、臣広の両親はこの件で酷く責任を感じてしまつたらしい。

両親に全く否は無いのだが、自分達が時間よりも早く着いていれば、また待ち合わせ等しなければこんな事にはならなかつた、と思つてしまふ気持ちは理解出来る。臣広は視力を失つたと言う事実と、目の前で男が一人血塗れで死んだという事実で混乱していたし、一時期は本当に精神を患つてゐるような状態だったから尚更だ。

ただ、今の臣広の記憶に、血塗れの男はまるで幻想でもあつたかのように切り取られた一瞬の虚像としか残つていない。男が落ちてきた時の場面も同じだ。

臣広は目を遣っていた訳だし、ショックの為かすぐに意識を手放していたから、状況を考えればそうなるのも当然なのかもしれない。だが、その一瞬がやけに鮮やかな印象を伴つて何度も記憶の中で再生され続けた。

また、男が落ちた後の場面と血塗れで横たわる場面は全く切り離されたもののように思えた。落ちてきている姿は夕暮れの虹彩を浴びた硝子の破片に包まれてきらきらと輝いており、とても美しく、血塗れの死体の生々しさとは結びつかないのである。

それは意識を回復した時も同じで、真逆のビジョンがそれぞれが大きな衝撃となつて臣広を襲つた。

始めは叫んで取り乱し、漸く落ち着いてくると、口が利けなくなり、やがて全てに無感動になつた。すぐに退院は叶つたもの、右目の包帯は取れず、空ろな心で自室に籠つていたのを覚えている。

それから　臣広自身に時間の感覚等なかつたのだが　一三週間は同じ状態が続いて、漸く包帯が取れることになった。

その時事故から初めて右目を開けたのだ。本当は開けたくは無かつた。診察を受ける時は開けていた訳だがそれは儀礼的なもので、ただ診察を受けると言う目的で無理矢理開けられたようなものである。失明はしてしまつたが、それ以外はすっかり元通りになると、いう意味で開くのは抵抗があつたのだ。怖かったのである。

ただ、意識的に片目を瞑つたまま生活出来る訳もなく、頑なに拒む事も出来ない。目を開けることの恐怖を悟られたくもなかつた。だから有りつ丈の神経を集中させてゆつくりと目を開けたのだ。それこそ目を開ければ死ぬかもしれない、とそれ位の気持ちだつたら、手にはびつしりと冷や汗をかいていた。

しかし、いざ目を開けてしまえばまるで拍子抜けしたような気持ちになつたものだ。

なんて事は無い、ただ視界が些か広くなつただけで、包帯をしていた頃と何も変わらなかつた。

それだけだ。

両目を失つた訳ではないのだ。世界は大して変わらない。一寸した違和感があるだけでそれも最初のうちだけだつた。

だが、例え事故の衝撃が薄れても、それを切掛けに臣広の何かは確実に変わつてしまつていた。話せるようになつても無口で表情が乏しくなつた。恐怖は胡散霧散してしまつて、それと同時に全ての感情、感覚も朧になつてしまつた。

時折、何も映さない右目に事故の様相がありありと浮かぶように

なつた。左目で現実を見て、右目で非現実を見ているような感覚である。

やがてそれは混じり合つた世界を明確な形で表現したかったからなのかも知れぬ。だが、絵が描きたくなるから描く、それだけの理由であつて、実際の所その意味は後付でしかない。

元々絵を描くのは割りと好きな事だったが、それ程執着していた訳でもないし、描き方は美術の授業で学習した程度で技法も何も無かつた。油彩、水彩、パステル、インク等その時々の気分で変思つたままに描くだけである。

絵をぼんやりと眺めているのも好きだつたが、画家の名前なども詳しくない。

絵を描いている時は無心になつてゐるか、何か取り留めの無い事を色々考へてゐるかどちらかだつた。

臣広が繰り返し考へたテーマの中には何故眼球があるのに見えないのだろうというものがあつた。

医学的に説明すればそれは明々白々な事なのだろうが、臣広はそれを知つていて了で不思議に思つた。右目は物を見る機能は失つてゐるもの、動きもあるし、白く濁つてはいたが特別に見た目が変わつたわけでもない。瞼に指を這わせてその動きを追つてみたりもした。こうこうと眼球が動いている。一つの生き物であるかのように感じた。

中学生の頃だつたか、牛の目の解剖に関する逸話を教師が話してくれた事を思い出す。確かメスを入れると中から透明などひつとした物　つまり硝子体が出てくると聞いた。

実際に臣広が解剖をする事は無かつたが、その話を聞いて無性にその様子を眺めたくなつた記憶が残つてゐる。どんな風に出てくる

のだろう、と思つた。それに如何して透明などうとした物が身体の中にあるのか不思議だった。

生き物、この場合哺乳類を念頭に思い浮かべたのだが、これらの中身は總じて血とか肉だとかそういう生々しくてでろでろとした物で出来ているという印象しかなかつたからだ。

当時は深く考えずただ見たいと思っていたが、今はそれが身体の中で一番美しい部分ではないかという想いから見てみたくなつた。

臣広の中では、本能的に嫌悪感を覚える、そういう種類の物しか身体の中には存在していないはずだつた。しかし、硝子体という物の正体を知り、それは気付かぬうちに深い影響を与え、臣広の世界観を一遍させてしまつていったようだつた。

既に本来の機能を失つてしまつた右目を抉り取つて解剖してみると妄想を何度も頭の中で繰り返した。実際するつもりは無かつたが、それでも無性にそうしてしまつくなる時があつた。

また、あの事故の日の強烈な一場面についてもあれこれ考える事も多い。

時間と言つものを見隔てて改めて考えてみると、それまでに氣付きもしなかつた面からそれを見始めていることに氣付いた。

なんにしてもあれは人生で言つところのターニングポイントに変わりは無い訳だが、だからこそ、だろうか、その事件に関しての考察は深くなり、様々な啓示を与えてくれた。

そしてはつきりした事があつた。

あの時、落ちて死んだ彼は、行き着くところ臣広にとつて一つの物質でしかなかつた。人間でもましてや生き物でもなかつた。

あれは無だ　臣広はそう思つてゐる。

臣広にとつての彼には生と死が一瞬間ずつしかなかつたのだ。生まれて死んだ。切り離された記憶の一場面で全てが語り飛ぶされた。虚無から出でて虚無に没して　臣広が偶然目にした場面は、虚無が僅かに形を成した瞬間だつたのだと思つた。

虚無が通つた彼の中身はきっと全て没わってしまったのだ。

臣広はそう思うと無性に羨ましく思う時があった。

そしてこういう場合、段々と気分が良くなつて行き、意味も無い鼻歌を歌いながら臣広の思考は諾々と流されていく。何を描いているのか自覚しないまま勝手に筆は進み、いつの間にか何時間もトリップしている。

「臣広さん、夕食のお支度が出来ましたよ」

トリップした状態では時間の感覚も分からぬ。放つておけば生理現象すら感じなくなるし、丸一日そのまま居続けることも可能だろう。

だがそれを辛うじて人間的な生活のうちに留めてくれている存在が一人。この日もいつの間にか魂が抜けたようになつていた臣広を優しい声音で引き戻してくれた。

「ああ、妙さんか。もうすっかり夕焼けだねえ」

臣広が妙さんと呼ぶ六十歳過ぎの小柄な女性だ。本名は篠村妙子しのむらたえこと言つて、臣広は子供の頃から見知つてゐる。謂わば住み込みの家政婦だった。

臣広は幼い頃、殆どをこの妙子に育てられたようなもので、第二の母だと思つてゐる。妙子は臣広が一人暮らしをする際に半ば無理矢理にくつついてきたのだ。

だが、両親は臣広の一人暮らしには不安を抱いていたから、妙子が一緒に行くと言つた事で驚きはしたようだが結局はかなり安心した様子で送り出してくれたし、臣広自身は妙子が付いてくる事に依存は無かつた。

妙子の前では幾分、臣広の口数も表情も豊かになる。一時期徹底的に人を避けていた時も妙子だけは例外だった。それだけ妙子の事は信頼しているからだ。

妙子のお陰で今臣広は人間で在り続けて居られると思つてゐる。つまり、世捨て人のような生活を送つてゐる臣広も決定的な人間嫌いにはなつていないと云ふことだ。妙子のお陰で人間も悪くないと思えてゐるし、根本的に屈折しなかつた一因であると思われた。

実家を出てから二年が経ち、臣広も歳を重ねた分、霧散していた自分の性質が丸く落ち着いて行くのを感じている。

「大分日が落ちるのも早くなつた気がしますね。山も色づき始めたようですし、偶には外出なさつたらどうです？先程西方さんからお電話も御座いましたし、顔を見せに行くのも宜しいのではないですか」

取り次ごうと致しましたらただ思い立つて電話しただけで様子を聴きたかつただけだ、と仰られてすぐに電話を切つてしまわれたんですけどね」と付け加える。

「そうだねえ、最近籠つてばかりだから一寸行つて来ようかな」西方と言つるのは殆ど唯一臣広と親交がある知人である。今は友人と言つても差し支えないだろ？。名は那葵と言つて、大層変わり者だった。

容姿も変わつていてと言えば変わつていてのだが、それはなかなか見られないような美しい容貌と言つ意味で変わつていてるのであって、臣広が変わり者と思う所以ではない。若しかしたらその影響も無きにしも非ずかとも思うが兎に角中身が変わつていて。

基本は温厚でいつも微笑んでいるような印象を受ける。だが、時々突拍子もない事を言い出し、何処と無く逆らえない雰囲気もある。

大方の人間は多分、自分を中心いて世界が回つていて　ではないが、極めて主觀的な立場で自分の立場を見ているから、物語で言うところの主人公は自分自身という感覺で世間と対峙していると思う。臣広自身は殆ど自分と向き合つような毎日なのだからそういう傾向は余計に顯著であるだろう。

それが那葵の前だと自分は一出演者としか思えなくなるのだ。全ては那葵を中心に進行している、そんな錯覚に囚われてしまう。

威圧感がある訳でもないのだが、那葵は強力な重力を持つてゐるのだと思われてならない。その癖まるで空氣のようでもある。何事にも無関心にそこに存在している、確かにあるのに目に見えない

そんな存在だ。別に幽霊ではないのだから透けていい訳でもないし、はつきり目に見えるのだが臣広はそう思つ。

下に降りて妙子と二人の夕食を採つてから那葵に電話を掛けてみた。まだ七時半だったから恐らくは店に居るだろつ。

店と言つのは卵蔓庵という那葵が趣味で遣つてているような良く分からぬものである。

臣広にはがらくたにしか見えない物が沢山並べられており、何でもそのがらくたは売り物ではなく、ただ飾つてゐるだけなのだそうだ。物を売る事を生業にしている訳ではないと言つ。仲介屋とか言つていたような気がするが、實際その仕事を見たことはないし、臣広等には想像も出来なかつた。

第一客の来ないような辺鄙な場所で遣つていて商売になるのかとも思つが、実家は相当な金持ちとの事だつたから道楽でいいのだろう。

恐らくこの店だけの存在だけでも那葵の変わり者だと言つ所以は全て説明が付いてしまう。

電話を掛けたものはなかなか出る氣配が無く、諦めて切らうとしたところで戸惑つような聲音の男が出た。那葵ではない。

間違つたかと一瞬思つたが、男は出る時、確かに卵蔓庵と店の名前を口にしていたし、間違ひではないようだ。卵蔓庵で那葵以外の人物を見たことは無かつたが、若しかしたら従業員か何かのかも知れぬと思い、取次ぎを頼む。

暫く待つていると、又もや先程の男が出て、一層戸惑つた様子の聲音で那葵さんは今手が離せないようで 明日来るよう伝えてくれとの事です、と言つ。身勝手な話だと思い、恐縮しているのだろつ。

だが、臣広は那葵の性質は理解していたから、別段何とも思わない。寧ろ電話口の男が哀れに思えた。多分まだ那葵に慣れていないのではないか。

了解した旨だけ伝えるとそのまま電話を切つた。顔を出そうと思

つていたのだし、用がある訳でもないから断る理由は無い。

那葵との付き合いは家を出た辺りの事からなので、今の家に住んでいる時間とほぼ同じである。切掛けは展覧会に出品した絵を那葵が気に入り買ってくれた事だった。

臣広の絵は当時 今もではあるが 評判が良くなかつた。きちんと勉強しているような画家から比べれば断然稚拙であつたし、抽象的なそのそれは理解され難かつたらしい。

絵画、特に抽象画等という物はどんなものでも理解されるまでに時間を要する物なのかもしれぬが、臣広の描くそれは少なくともその展覧会を見た多分大多数の人々の肌に合わなかつたのだろうとも思う。

だが、那葵は如何した事かやけに氣に入ってくれて、それ以降の作品も殆どが那葵に引き取られている。

那葵に言わせると臣広の描く絵には僕の世界が映つてゐる、との事だつたのだが良く分からぬ。臣広は言葉に出来ない頭の中のぼんやりしたものを探き出しているだけであり、描き出してもそれは言葉で説明出来る代物ではなかつた。那葵の世界と言われてもぴんと来ない。

勿論臣広は那葵ではないし、那葵になれるはずも無く、あくまで客觀的な位置から考察知るしかない訳で、那葵の世界と言われても、ああそなうなんだ、位にしか思えないのは仕方が無い事だ。

どこかしら那葵と共有している部分があるのだろうとは思うが、深くは考へない。考へても分からぬし、それで良いのだと思つからだ。

ふとこの前完成した絵を持つていこうかと思つた。那葵にもまだ話していなかつたから丁度良い土産になるかと思つたのだ。

本当は手元に置いておこうかと思つていたが、やっぱり那葵が持つてくれた方が良い様な気がした。

白い背景に黒く角張つた渦が幾重にも散りばめられている油彩画だ。意味は臣広自身も良く分からぬ。

ただこれを見ていると那葵を思い出す。別に那葵を想いながら描いた訳ではないし、幼い頃から今迄、偶に夢の中に現れる映像だつた。夢から覚めると霧散霧消してしまつから、それをそのまま描いたつもりでもなんだか少し違う気もするのだが。

臣広は忘れないようにと早速絵を包んで車に積んだ。殆ど外出しないのだから車は余り運転しない。それで無くとも片田での運転はかなり気を張つてしまつから、普段は電車を使うことが多いのだ。しかし、辺鄙な土地では車は必需品となる。普段は主に妙子が田用品の買い物で大いに活用しているから、たまに臣広が使っても不調を起こすような事はなく、その点は安心だ。

こんな事からもつくづく妙子のお陰で生活が成り立つているのだ
と臣広は思つ。

翌朝、臣広は何時もより早めに起床すると身支度もきちんと整え、久しぶりに余所行きの服を着、姿見の前で己の姿を眺めてみる。家では絵描き等遣つているから下ろし立ての衣類を纏つてもすぐに汚れてしまつし、何時もよれよれの汚らしい格好で、髪も伸び放題だつた。その様子は風来坊のようなかなりむさ苦しい印象だと思う。しかし、身嗜みに気を遣えばそれなりに見栄えがするのである。むさ苦しい姿に慣れてしまつていたから尚更そう思うのかもしれない。優男風にすら見える。

真っ黒でウエーブがかつた猫つ毛は右田を隠す為半ば必要に迫られて伸ばしているのだが、どうもそれが一因らしい。最も殆ど自室に籠つてゐるから、ひょろ長く色白に見えてしまつるのは自業自得といつ奴で、髪のせいにしてしまつのは八割方現実逃避である。

臣広は外見に拘る性質ではないし、人に会つ時は礼儀として身嗜みに気を遣いはするが無頓着な方だ。だが、やつぱり男として生まれたからには筋骨隆々とまではいかなくとも逞しい屈強な身体に憧れもした。

所謂無い物強請りという奴なのだろうと思い、溜息一つ付くかし

てそれ以上は考えないというのが臣広の常である。

那葵の店へは特に時間は決まってなかつたし、何時に訪れても構わないだろうと思っていたが、十一時頃迄には到着する計算で家を出た。態々都心部まで行くのだから他の用事も済ませて来ようという腹積もりである。

道中渋滞等もなく、余裕を持って出てきた臣広は十時半には店に着いた。

合い変わらずそこ等一体は閑散としている。

卵蔓庵の営業時間は実のところ臣広にも良く分かつていない。ただ、大低何時でも開いている、という印象を抱いていた。単に常識外れな時間には出向かないからそういう思つてているだけかも知れぬ。

しかし、この日も案の定卵蔓庵には開店の札が掛かっていた。若しかしたら不在の時ですらこの札はこのままなのではないか、そんな気さえした。

「御免下さい」

薄暗い店内も相変わらずで、外が明るい分暫くは目が慣れない。

「あっ、いらっしゃいませ」

昨日電話口で聞いたのと同じと思われる声が聞こえる。店の奥の方でシルエットだけが確認出来た。今日はそれ程戸惑つた様子は無い。

「私は昨日電話した嘉山と言います。西方さんはいらっしゃいますか?」

外からの光を遮ると、ぼんやりしていた店の様子が明瞭になってくる。声の主は壁一面にあるがらくたを拭いていたらしく、作業の手を止めてこちらに向いた。

まだ二十代前半と思われる凜とした一重瞼の青年だった。この店の雰囲気でこう言つ表現は似合わないかも知れぬが、短く刈り揃えた髪の毛にぴんと伸びた背筋等から爽やかな印象を受ける。

若干穏やか 悪く言つてしまえば気の弱そうな感じもあるような気がするが、それは昨日の電話での応対の事があつたからそう感

じただけかも知れない。

「ああ、昨日の方ですね。昨日は伝言とは言え、無理を言つてしまつたようで申し訳なかつたです。那葵さんは一寸出でくると言つて先程出て行きましたけど、すぐ戻るとの事でしたので」

最後の方は又もや困つた様子で語尾がはつきりしなかつた。申し訳なさそうな顔をして臣広を伺つている。

臣広はその様子に好感を抱いた。

それに特に用がある訳でもないし、待つのは構わない。半ばこういう事態も見越していたのだ。

青年は壁に開いた微かな隙間から折りたたみ式の椅子を二脚取り出すと手際よく広げ、お掛け下さいと言う。更にそこから又もや折りたたみ式のテーブルを取り出し、臣広の前に置く。そして暫くお待ち下さいと言つて今度は床下に消え、五分程度で戻ってきた。どうやらお茶の支度をしてくれたらしい。紅茶の入ったポットとカップを盆に乗せて持つている。

臣広はもうこの店の変な造りも見慣れているのだが、何時見ても変だと思う。地下にも行った事があるが、普通に住居として機能するような設備があるのだ。おまけに地下への入り口は裏手の部屋にあるらしく、この部屋からは地下を通るか、一度外に出て裏口からしか入れないのだと言つ。また一階もあるとのことだったがそれは裏の部屋からのみ行けるらしい。

使い勝手が良いとはとても思えないが、見物するだけなら面白くもある。

どうぞ、と差し出された紅茶を一口飲むと肩から力が抜けた。臣広は久しづびりの運転にやはり相当緊張していたらしい。

「君は…えっと、こここの従業員ですか？私は数年前からここを知っているのだけど、那葵以外の人間を見たことが無かつたから一寸吃驚してしまつてね」

青年は忘れていた、と言つように慌てて姓名を長坂義文と名乗つた。

「私は従業員ではないと思うんですけど…どうなんでしょう。実は昨日この店に偶々立ち寄つてみたら、成り行きでなんやかんやと手伝いをする事になつて 今日も流されるように手伝いに来ている、といった感じなんです。普通こんな事で従業員とは言えないと思いまますけど、那葵さんはそういうつもりで扱つてているような気がします」

今日も私に店を任せ出て行つてしまつたくらいですからね、と苦笑する。それでも特に嫌がつている様子は無く、臣広は義文なりに今の立場を楽しんでいるような印象を受けた。

「はあ、可笑しな話ですね。でも那葵らしいと言えば那葵らしい。ところでお仕事 いえ、学生さんでしょうか？那葵は少し思い込みが激しいと言つか、強引なところがあるから無理をして来て貰つてているのでは？」

臣広は笑いながらも一応気を遣つてみた。楽しんでいるように見えて、無理をして来て貰つている可能性もある。妙子以外の人間とは滅多に接触がないから人の感情の機微には鈍感な方だと自覚しているのだ。

だが、昨日は兎も角、今日は何か他に用事があれば幾らでも反故出来る約束だらう。それでも来たという事は時間があつたという事だろうが、そこまでする義理は無い。だから何か訳があるのかと気になつた、と言うのも正直なところだつた。

「私は今年の春に大学を卒業して社会人として働いていたのですが、今は無職です。でも幸いすぐすぐに職を見つけなければ生活が立ち行かない、ということも無いですし、すぐに新しい職へ、という気分にもなれなかつたのですから要するに暇だつたのです。なんだか変わつたお店でしょ？だから好奇心も手伝つてまあ暫くは流されてみようかな、と思つた訳です」

気分転換には丁度いいですよ、と義文は少し照れたように微笑んだ。心情がすぐ顔に出るタイプらしい。

義文は社会人一年目という初々しさも手伝つてか、随分若く見え

る。臣広はまだ二十五歳だし、年齢差で言えば普通に考えてほんの一歳程度である訳なのだが、学生でなくなつてからはもう七年経っている。その開きは思ったよりも大きいのかもしれない感じた。だが、立場は違えど義文の気持ちは良く分かる。

成る程ねえと惚けた様な声で答えて、少し冷めた紅茶を飲む。これくらいの温度が丁度良い。

「私は那葵とは三年程の付き合いになるのですけど、未だにこの店の正体が掴めていません。本人は仲介屋と言つだけで、ろくな説明はしてくれませんしね」

つられる様にしてカップに口をつける義文を見て、少し居た堪れない心境になつていてのかもしれないと思つた。

助け舟、と言う訳ではなかつたが、丁度そんな話しをし始めると、言い終わるか言い終わらないかの所でドアの軋む音と共に大量の光源が入つて來た。

結局場の空氣は修正されることはなく一気に弾け飛ぶことになる。一人でそちらに顔を向けると案の定那葵が居た。噂をすればなんとかや、かと臣広は心の中でなんとなく言つてみた。

「臣広久しぶり！相変らず不健康な顔だなあ」

那葵は臣広が居るのを分かつていたかのように言つて笑つてゐる。暗い室内でよく分かる訳は無いと思われたが、那葵が言うように確かに臣広は不健康な顔だつた。昔から何とも無いのに顔色が悪いと言われてきたからもうこれは体质なのだろう。今更それを指摘されても何とも思わない。

「久しぶり。それよりどこに行つっていたんだ？聞けば長坂さんは従業員ではないと言つじやないか。勝手に店を任せて出て行つたら迷惑だうに」

別に説教するつもりではなく、何時もの軽口の調子で言つ。臣広の声の調子は何となく間延びしているから、例え説教をしたところで効力は無いし、本人も説教等柄ではないと思つてゐる。

「あれ？僕は雇つたつもりだつたんだけど言つてなかつたかな？」

那葵は自分の分の椅子も出してくると座りながら首を傾げた。やはりもう義文を従業員と認識していたらしい。前半部分の質問は無視されているし、何ともい加減な返答である。だが、荷物等持つていないとこから見るに本当に一寸した用だったのだろう。

義文を見るとはあと言つて苦笑している。

「彼らなんでもぼけるのはまだ早いよ。長坂さんは偶々予定が開いていたから手伝ってくれてただけみたいだよ」

「ねえ？」と降つてみると相変わらず苦笑したまま曖昧に頷く程度だ。「でも会社辞めたって言つてたし、丁度良いかなって思つて。結構物が溜まっちゃつたから整理するのに人手も欲しいと思ってたし、話し相手も居ないから義文が居れば楽しいかなつて。あつ、ちゃんと自活出来る位の給料は出すから安心してね」

最後は義文の顔を覗き込むようにして念を押す。代わりに義文は一寸引いた。

正に那葵の独断であるが、多少は相手の立場も慮つていた様だ。そのせい、という訳ではないが、那葵の物言いに嫌な印象は抱かない。恐らく義文も自分と同じなのだろうと臣広は思った。

「私は構いませんよ。一寸まだ調子に付いて行けていませんが」

臣広はそんなに簡単に就職先を決めてしまつて良いものか、と思つたが、自分の口出しする事ではないと思い、黙つてその様子を眺めた。

「じゃあ、細かい所はまた追々つてことで…さて、臣広、折角來たんだし今日は昼食でも一緒に食べに行こう。特に用もないだろ？」「ああ。それと、今日はお土産がある」

一旦落ち着いたところで臣広は持参した絵の包みを手渡す。昨日この絵を渡すと決めてからはこれを目的に出向いたようなものだつた。

「新作かい？確かに今年の初めに一枚貰つて以来だね」

そう言いながら包みを手早く剥いていく。その所作は如何にも大雑把であるが、包みを破いたりはしないし、意外にも綺麗に開けて

しまつ。何時もながらこいついた器用さには感心する。

「絵描きさんですか？凄いですね」

横では義文が純粹な瞳をきらきらさせている。思わず臣広も微笑んで、殆ど趣味です、と答えた。謙遜ではなく事実だ。それに絵描き、と人に言わると何だがそれにカテゴリするのは一寸違う、とも思つてしまふのだ。

「これは なんだが何時もとは一寸違うね。凄く近い」
すっかり晒された絵を、那葵は人形のような顔でじっと見ている。
真剣な顔、に近いのかもしないが、空ろな表情にも見える。
何時もと違うと言わても描いた本人には良く分からなかつた。
それに近い、と言つのは如何いう意味なのだろう。

「余り御気に召さなかつたかな？でもこれは別に買い取つて欲しくて持つて来た訳ではないし、要らないのなら持つて帰るよ」
良く分からぬが、気に入らないのならば仕方が無い。那葵が持つている方が自然な気がして持つてきただけだ。

「いや、貰つておくよ。気に入らない訳じやない。少し意外だつた
とこうか そういう感じだ」

何時ものような柔らかな微笑になつた。

那葵がこの絵を見て何を感じたのかは相变らず良く分からぬ。
だけど今までだつて同じだつたのだ。臣広の絵についての感想と言
うものを、臣広はあるで理解していない。

那葵も臣広が如何してそういう絵を描いているのか知らないだろ
うし、臣広自身言葉で説明出来る代物じゃなかつたから話した事も
ない。そして、それで良いのだと思つてゐる。だからただ、そうか、
とだけ伝える。

「私なんかは芸術だとかそういうのはまるつきし分からぬ人間な
のでなんだか不思議な絵だなあというくらいの感想しか持てません。
でも、こういうのを描けるつてだけで尊敬してしまいますね。タイ
トルはなんて言つんですか？」

義文は那葵の後ろに回つて、腕を組み唸りながら絵を観察してい

た。なんだか難解な数学の問題とでも向き合っているような格好だ。「タイトルはありません。大抵私の絵にはタイトルと言つものが無いんです。そういう時には那葵が勝手に付けている。だから、私の絵に関して話していたとしても分からなかつたりするくらいです」義文はそういうのもあるんですね、と言つて芸術の世界は奥が深い等とまた唸り始めた。

「那葵、今回のタイトルは思いついたかい？」

普段こういう風に聞くことも無かつたのだが、この時は無性に氣になつてしまつた。タイトルは無い、とは言つたもののもしタイトルを付けるならば『那葵』と言つのが一番近い気がしていた。

「これは『裏』かな」

珍しいと思った。ほんの僅かだったのだが、那葵にして思案する風だつたからだ。それに那葵はどこから出てきたのだ、というタイトルを突拍子も無く付けるのが常だつた。意外にも普通といつか落ち着いたタイトルだつたので驚いた。

「私には那葵のセンスは推し量れないらしい」

今度は『裏』ねえと言いながら唸つている義文同様、一瞬間の内臣広もそのタイトルに関して考えてみたが結局抱く感想は無く、断ち切るようにおどけた聲音を出してみた。感覚的な事は分からうとしても結局余り意味を成さないからだ。

義文もその意見には賛成です、と言つて漸く唸るのは止めたらしい。

「ははっ、まあ感じ方なんてそれそれだ！さて、一寸早いが飯を食に行こうか。僕は朝ご飯を食べていらないからお腹が空いたよ」絵を下に置いて来るから君たちはここを片付けておいてね、と言つて一人地下に消えて行つた。全ては那葵の都合らしい。

義文もポットなどを片付けるために下に降りて行つたので、臣広は勝手知つたる他人の家とばかりに椅子とテーブルを元の位置に戻す。義文は自分が遣ると言つていたが、臣広が済ませてしまつた方が早い。

片付け終わつてぞつと店内を見渡す。

改めて一人店の中に立つていると異空間にでも迷い込んだような気がしてきた。非日常な世界の中に何時も居ると那葵のようになるのだろうか。それともこれはそもそも那葵そのもの、また日常であり、外の方が非日常なのだろうか。そんな取りとめも無い事を考えた。

そうしていると全ての時間が止まつたような氣もした。でも異空間ならそれも不思議は無い訳だ。

那葵と義文は五分と掛からずすぐに戻つてきた。その瞬間に異空間は見慣れた店に戻り、全部錯覚だったのだと理性的な自分に立ち戻る。

「さて今日は僕のお勧めの中華屋に行こう！小龍包が美味しいんだ」
那葵は随分はしゃいで、すたすたと店の外へ出て行く。後に臣広と義文が連なる。

那葵は店の鍵も閉めずに進んでいくが、義文は早速従業員としての責任を感じたらしく、おろおろしながら那葵に声を掛けた。勿論店の鍵を受け取る為だ。しかし、那葵は一向気にする様子も無く、そのまま良いと言つ。

そう言われても義文も困るのだろう、また暫くしどろもどろになつていたが、店主が良いと言つなら良こののだろうと諦めたらしく、店を気にしながらも後に続いた。

店の開店の札もそのままだつた。やつぱりここは何時でも開店中なのだな、と臣広は思う。なんだか不思議と安心した。

思えばこつやつて店から外食に出るのは初めてだつた。那葵と店の関係が、少しだけ臣広は理解出来た気がする。

心のもやもやが解消されたような気分になり、無性に食欲が沸いて來た。

ふと時間が気になり時計を見ると十一時半になるとこりだつた。百合絵のアパートがある最寄り駅ではこの時間だと会社帰りの人々が下車するくらいで、辺りは静まり返つてゐる。だが、ここにはサラリーマンやOLのような姿は殆ど無い。あるとしてもそれ違う位で、駅に向かつて歩いている群れはとても仕事帰りとは思えない井出達の若者ばかりだ。

百合絵は途中までその群れに流されるようにして歩いていたが、とうとう我慢出来なくなり、道端に反れてしゃがみ込む。

「大丈夫？」

真美の気遣う声が聞こえた。真美もそのまま隣にしゃがみ込む。百合絵よりは平氣そうだが、疲れた様子は同じである。

「大丈夫だよ、慣れないから一寸疲れちゃつただけ」

安心させる為にそう言つたが、暫くこの倦怠感は後を引く気がした。

今日はG a l l e ソのライブ、二日目の公演があつたのである。百合絵は昨日とさつきまで行っていたライブの様子を思い出す。

一言で言つならそれは百合絵を圧倒するものだつた。

彼らのライブは百合絵にとつては未知との遭遇と言つても良い。

大変な衝撃を受けた。

まず尋めき合つファン達。開演迄の時間でさえかなりの人口密度だつたのに、SEが始まると息も出来ぬ程に圧迫された。自由に動かせるのは辛うじて顔くらいで、腕でさえ無理をしなければ僅かに移動させる事すら難しかつた。

しかも、一日目は確保した場所も悪かつたらしい。会場の中程よりやや前方は曲中、ノリの波が最も大きく成る位置であつたらしく、宛ら氾濫した川に身を置いているような有様だつた。何とか転倒だけはしなかつたものの、かなり気を張つて漸く、といった感じだつ

た。

ライブというのはこんなにも激しいものなのか、と百合絵は想像すらしなかつた事態を体感し、まず驚いたのである。

また、果たしてそんな状態できちんと演奏を見れたのか、聴けたのか、と思われるかも知れぬが、そんなことはない。ステージ上で繰り広げられるそれに更なる衝撃を受ける事になつたからだ。若しかしたらそんな状態だつたからこそあれ程の衝撃を受けたのかも知れぬとも終わつてから思う。

暗い照明。シンプルなはずなのにバンドのサウンドやバックに映される映像で物々しく感じられる演出。そして全身を響かせるような重低音の効いた轟音。全てが一丸となつて百合絵の脳髄を揺さぶつた。

在り得ない。

百合絵はそう思った。CDを聴いて居た時から気に入っていたものの、ここまで己の内部に侵入してくる感覚は得られなかつたし、想像すらしなかつた。ライブも殆ど興味本位で見てみたいと思っただけだ。

それなのに　これは反則だ。

こんなに圧倒的な質量を持つて自分を侵食してくる存在は在つてはならない。だが、在つてはならないに在る。

ではこれは何だ。

在るとしたらそれは

創造主に他ならないのではないか。

神のような存在。否、正確に言うなら鬼神だと思った。百合絵は鬼神の正確な意味等知らないし、勿論由来も分からない。だが鬼と神という、一見すると全く異なつたものが融合したような印象のこの言葉がぴつたりだと思ったのだ。

SEが始まつた瞬間からもう鬼神が支配する世界に引き込まれていたのだろう。

それを理解したのは演奏が始まつてからだ。まず感覚として、次

にその感覚を言葉にして理解した。そして、その時にはもう逃げられなかつたのである。完全に百合絵は絡め取られてしまつていて。ずぶずぶと世界に沈殿していく。ただその世界を構成する一員となつた。

人に押されて苦しいとか、何とか倒れないように気を張るとか、そういう意識も確かに働いていたが、それは生理現象と同じようなものである。ライブだからと、少し時間を掛けて整えた髪がぐちゃぐちゃになるのも、汗で全身がぐつしょりするのも如何でも良かつた。

曲は大半が知らないものばかりだつたがそれも重要ではなかつた。兎に角百合絵はその世界観に引き込まれていたのである。

特に一曲目は百合絵をその世界観と同一化させてしまつたのだから強烈な印象を残した。それは百合絵がCDでも聴いていたバーラードだつた。暗くて重厚で悲痛なバラードである。

歌い手は正に異質な世界主人公と言わんばかりに「」の内面を曝け出し、表現していた。CDとは違つてその歌は完璧ではない。メロディーが消えていたり歌詞も変わつてしたり それでもそれはCDで聴くよりも遙かに、痛いくらいの感情が流れてくるものだつた。レオンは圧倒的な歌唱力も兼ね備えていると思う。だが、このバンドの場合、それを重要視していない、それに頼つていない。

何かを伝える為にはメロディーや歌詞、果ては歌唱力よりも重要な事があるのだとこの時百合絵は初めて知つた。

CDはあくまで商業目的もあるし、斑があつてはいけないものなのだろうが、ライブは違うのだ。幾ら完璧に演奏しても、生きた躍動が無ければきっとライブをする意味等ないのである。

感情は刻々と変化していくもの。決して同じ状態で留まる事はない。変化が無いように感じられてても、その実微妙に変質していくものだと思う。だから、同じライブは無く、あってもならないと思う。一度限りの、その時のリアルな感情を反映してこそそのものなのだ。

初日から延々一時間、人の波に揉まれ続けたライブだつたが、百

百合絵は何時までもその空間に留まつていったいと思つた。照明が付き、講演の終了を知らせるアナウンスが流れ、人が散り始めても惚けた状態のまま、ライブ中に感じていた世界の名残を必死に追つたほどである。

探し当てて声を掛けってきた真美にも曖昧な返事で答え、人の波に沿つて外に出た。そのうち寒さと倦怠感が徐々に分かるようになり、漸く現実世界が見えてくる。

汗まみれになつた衣服は絞れそうな程にぐつしょり濡れていたし、薄くしてきた化粧もすっかり落ちているようだつた。身体は節々が氣だるく、思うように動かない。動かそうとすると酷く重く感じられた。恐らく筋肉痛になるだろう、そう思つた。

真美も同じような有様だつたが、それでも百合絵等よりは余程慣れているらしく、いちいち百合絵を気遣つてくれた。ライブ直後の惚けた百合絵の様子も気にしていないようだつた。少し申し訳ない気持ちになる。

感想を聽かれたが、百合絵は凄い、としか言えなかつた。真美も興奮冷めやらぬ様子で、あれが良かつた、これが良かつたと、話しかけてくる。百合絵はともすると飛んでいきそうな意識を叱咤しながら真美の言葉に頷いていた。真美の言葉は共感出来る部分も多かつたが、百合絵の頭の中で感じた事とは差があるようにも思えてしまう。

一日田のライブは予想通り全身筋肉痛で、鉛のように重だるい体で臨むことになつたが、気分は一日田よりも高揚していた。

そしてその日のライブの幕が上がる。

昨日同様物凄い圧迫感だつた。位置としては一日田よりも少々前方の位置を確保する。ただ前に背が高い人がいて、首を伸ばさなければステージの様子は伺えなかつたが、それでも時折垣間見えるステージだけで百合絵には十分だつた。

SEが終わり、一曲目は激しいアップテンポの曲から始まる。昨日のライブでは三四曲目には演奏されたはずだ。百合絵は幾分冷静な

気持ちで見れるようになつてていたのかもしれない。

だが、二日田のライブの衝撃は一日田を遙かに上回るものだとも思つた。世界観が更に深くなり、その世界の深遠部まで埋没していく。

鬼神だ。そう感じたのも錯覚ではなかつたと確信する。そして、鬼神でもあり、大いなる振り篭の様もあると思った。鬼子母神、と言うのを聞いたことがあつたが、それから連想した、という訳ではない。無意識にそれを考えていた可能性はあるが、何故か懐かしく、心地良く感じてしまつたからである。

私はこれを知つてゐる、そう思つた。

メンバーは全員男性だし、普通なら母性というものは感じないのかもしれない。しかし、彼からの発する世界が例えるなら胎内であるかのように感じたのである。

事実これはきっと胎内なのだ。

自分がそう感じたのなら、これは自分にとつて胎内に他ならない。胎児だつた頃の記憶がそう感じてゐるのではなく、もっと原始的な記憶から喚起された感覚がそう感じてゐるのだと思つた。百合絵個人、では無く、生命としての最初の記憶だ。

百合絵はそう思い至つて身震いする。

人口密度は凄まじく、人々の蒸氣で天井の方は靄が掛かつた様になつっていた。水分と言う水分が全て搾り取られた様で、喉もひりつくようだし物凄く暑いが、背筋が冷えたのだ。恐怖、では無い、歓喜で、である。

「流石に昨日今日で疲れちゃつたね。私もここまで激しいと思つてなかつたから二日連続でも大丈夫だろ?とか思つてたんだけきつていね」

明日バイト大丈夫かなあ、と真美は上を向いてぼやいている。化粧もすっかり落ちてゐるし、髪も汗でぐつたりとしていたが十分綺麗な顔だった。

一日だけでも相當に体力を疲弊させたが、回復しきらない体での

一日目は更に堪えた様だ。余韻に浸っていたかつたが、体がついていかない。

私なんて真美より体力も無いし、慣れてないからもう結構限界、と弱音を吐くと真美は私も、と言つて笑つた。

「そういえば今日は音が昨日より良くなつてたね。まあ昨日のステージはこの会場での初日だったしPAさんも慣れたんだろうね」

PAと言つるのは確かに音響管理をしている人の事だ。百合絵が感じた差はそのせいもあつたのだろう。

「確かに音が大きくなつてた気がする。昨日よりも引き込まれる感じがしたもん。お客様の興奮も更にヒートアップしてゐつて感じで…もう死ぬかと思つた」

「確かにねえ。多分昨日来てた人も多いと思つんだけど、よく元気残つてるなあつて感心しちやうよ」

「だよね、と答えて一人で笑つた。一人とも満身創痍といった感じだつたが妙に心は清清しかつた。

真美は如何思つてゐるんだろう　百合絵はふと氣になつた。あのライブで百合絵が感じた様に真美も感じたのだろうか。それともあれは百合絵だけに見えた世界なのだろうか。気になつたが、結局その日の帰りも在り来たりな感想を語るだけで聞けなかつた。鬼神だとか胎内だとか上手く説明する術が無かつたし、言葉にしたらなんだか違うものになつてしまふ氣がしたからだ。

百合絵は他のライブというのを知らないし、若しかしたらこういう世界觀を持つてゐるバンドも珍しく無いのではないかと思つた。だが、比較出来るものが無いと不安　正しく今の自分がそれだと思い至りげんなりとした気分になる。

そもそも基準と言うのは曖昧模糊とした物だし、それこそ状況や個人の価値觀で変わつてしまつ。そんなものに知らず知らずに依存してゐる自分が嫌だつた。最も今の百合絵には自分の本質すら良く分からなくなつてゐるのだから、比較する対象を幾ら知つたところで自分の中では基準を定めることは出来ないのだろうとも思う。

だつたら 見たまま感じたままのみ考えるしかない。ライブ中に確信したようにあれは紛れも無い真実なのだ。少なくとも今迄あんなはつきりした気持ちを百合絵の中に与えてくれたものは無かつた。きっとあれは百合絵の本質が表層に引き出された瞬間でもあり、あの時の自分が本来の自分だつたのだのではないだろうか。

頭の中でロジックを組み立てて行く。百合絵は不安だつた。どんどん時間が経つて、ライブの時の感覚が薄れて行き、ただの錯覚となってしまう事が。論理立てて考えればそれは記憶の引き出しに分かりやすい情報として整理され、感覚が薄れても情報が補つてくれる。

ここのロジックを立てて行くことは百合絵の癖でもあつた。辛うじて自分を自分として留めて置くための蘇生装置である。

だけど多分、こんなことをしなくともあの衝撃も心地良さの記憶もずっと残つているだろうとも思つた。若しかしたらそれに取り憑かれてしまふのを恐れたからこそ、それを論理立てたのかもしれない。そうすれば理性的な自分が感情的な自分を抑えてくれるだろうからだ。

一日経つて、漸く身体に残つていた鈍重な痛みは無くなつたが、あの感覚だけは鮮明に残つっていた。そして知りたいと思つた。あのバンドの事をもっと知りたい、と。

だが一定の距離感を保つておきたい気持ちもあつた。百合絵は所詮彼らも人間なのだと分かつているからだ。崇高な印象を持つているのならそのままにしておきたい。

近づけばそれだけ色々な事が見えてくるだろうし、田を背けたくなるような部分も少なからずあるはずだ。長所があれば短所もあると言つのは仕方の無い事だろうし、それが在るからこそその個性もあるのだと思うが、それでも絶対的なものには憧れを抱く。百合絵にとつてはあのバンドこそがそうなのだ。否、あのバンドの世界観と言つた方がしっくりくるのかもしれない。

現代であればインターネット上で簡単様々な情報を手に入れるこ

とが出来る。G a l l e y と入力すればすぐに公式ホームページが見つかった。

ホームページはダークな趣で、全体的に黒く、若干見難い箇所もあつたが、バンドの雰囲気がそのままだ。百合絵は文字を読むのに苦労しながらも、雰囲気が損なわれていない事に安堵した。

プロフィールに軽く目を通し、バンドの経歴、コンセプトのようなものが記されている箇所を見つける。そこにはこう書かれていた。

G a l l e y とはそのままガレー船から取っている。

ガレー船は古代・中世にあつた大型の手漕ぎ船である。

多くは奴隸や罪人がその動力として用いられていた。

我らはこの奴隸や罪人と同じでただ命令に従順に主の手足となつてているだけである。

我らはただの手段でしかなく、ただそれにあらんとしている。その後も引き続き詳細が書かれていたが、全てはそこに要約されているらしかつた。

百合絵は主とは何なのか気になつた。ライブの時、全てが一つ一つの構成要素になってあの世界が形成されていたのは確かだつた。だが、主と言うのが居るとすればあのヴォーカル、レオン以外には考えられない。彼はあの時真実を語つていた。身体全てを使って余すところ無くそれを表現していたと思つ。

だが、表現 その言葉に行き着くとふと百合絵は違和感を覚えた。

表現していたのはレオンの内部だと無意識のうちに感じて、それで納得していたが、表現していたものが外部、それもバンドや、はたまた手の届くような所のものではなかつたのではないか。レオンやバンドというのは一つの媒体、インターフェースに過ぎなく、その大元となる形状を持たない何かが主なのではないのか。そう考えればなんだか全てが綺麗に収束されていくような感じがした。

私があんな風に感じたのはきっとその主の姿を垣間見たからんだ

百合絵は興奮気味にそう思つた。

論理立てて考えていたことがなんだか馬鹿らしくなる。そんな事をするまでも無く当然の心の動き、謂わば本能でそう感じたのであり、本能は最初からそうプログラミングされているのだから。

だがきっとそれに気付くか気付かないか、はたまた気付いてそれを錯覚としてしまうかは人によるのである。百合絵は運良くそれには気が付く事ができた。

本能、つまり己の本質である。

百合絵は何度も心の中でそれを繰り返し噛み締めた。そして搖ぎ無くなる迄続けた。

そうして百合絵は世間を軽蔑するようになつた。

個人として人々を見ていけばその中には尊敬出来る人物等もいたのだが、世間と言つ大きな枠で考へると全てが軽蔑の対象となつた。そして自分でさえも軽蔑した。世間の一部となつていることが耐え難かつた。

ここから抜け出す事は不可能である。それ故にやり場の無い焦燥感や苛立ちを如何したら良いのか戸惑つた。

全てが内面に渦巻く。そして益々世間が嫌になる。まるで悪循環と言つ他なかつた。

だが、一度それと氣付いてしまつては後戻り出来ない。気付かぬうちは不条理な現実もなんて事は無いのに、気付いた途端それは暴君のように不穏分子を排除しようと荒れ狂う。

百合絵はそう、暗黙のルールを敵に回してしまつた。

それでも表面上は普段と変わらぬ生活を送つていた。一寸前から殆ど引き籠もりのようだつたからそれがただ継続しているだけだ。詰まるところ折り合いをつけていくしかないのだと分かつてからそれ以外は如何しようもない。ユイスマンスの描くデ・ゼッサントのように山奥で隠遁するだけの財産など無いし、何か変えようと思つてもたかが知れている。

ただ唯一の現実逃避として小説を読み漁るようになった。Galleyの曲も全て聴いたが、やはりライブでなければあの感覚を味

わえる事は無かつたから始終聴いている訳ではない。

それに引き換え小説は始終読んでいた。食事さえ取らずに日長一日読んでいる時さえあつた。昔から本を読むのは好きであったが、月で言えば一二冊と言つたところで特別好きと言う程でもなかつたから、大きな差である。

そして今は特に力フ力を好んで読んでいた。描かれた不条理な世界に眉を顰めつつも何時の間か主人公と自分を同一化してしまつてゐるのである。自分自身を遙か頭上からもう一人の無感動な自分が見下ろしている感覺に囚わわれた。そして反発しつつもそれは己の認めたくない部分だということに気付いたのである。

これは自分で自分の傷を無神経に抉つていく作業と言えるのかもしれない。そう考へると荒療治に違ひなかつたが、そうすることでも百合絵は何とか現在の自分との折り合いを付ける事が出来ていたのだ。

活字に溺れ、思考に塗れて、外に発散する術も持たずに半月程が過ぎた。

久々に外の空氣を思い切り纏いたくなり、日も暮れてから散歩に出かけた。散歩と言つても近所の公園位しか思い浮かばず、街頭がぽつぽつと点る狭い道を通つて辿り着く。

小さな児童公園に、既に子供たちの姿は無く閑散としていた。公園内には街頭が申し訳程度に一本立つて居るが殆ど意味を成していない。隅々には闇が巣くつていた。

その闇に埋もれるように設置してあるベンチに腰を掛ける。

既に秋の気配も色濃くなつてきたこの時期は日が沈むと途端に寒さが増す。ベンチはひんやりとした湿り気のような冷氣を纏い、百合絵の身体の熱も奪われた。

闇の中から街頭の明かりに目を遣る。その明かりはやけに白々しく見え、遮るように掌を翳してみた。手の甲は真っ黒だつた。

両手を翳すと左手の方が歪だつた。中指の第一関節が左に肥大している。

暫く眺めた後、持つてきた本を一冊膝の上に置いてみた。暗くて読めないだうことは分かつていて、何となく持つてしまつたのだ。カフカの『城』の文庫本である。

これもまた未完で終わつてゐる作品なのだが、何となくそれがこの作品には正しいように思われた。未完であるから当たり前なのかも知れないが、何とも宙ぶらりんな状態で話は終わる。最初はそれに酷く反発心を覚えた。自分はこうならない、と。でも良く考えてみればそれが当然の事にも思えた。人生の最後などこんなものではないのだろうかと。

物語の終盤には何か劇的な出来事が起こるか、何らかの解決がなされる物だとと思うのだが、人生と言う物語にはそんな事等滅多に起ころる訳ではないだろう。第一自決でもしない限り死ぬ時等分からないのだから何か起こしたくても起こせないのが普通だ。

何か事故に合うとか殺されるとかしても、確かにそれは悲劇的で一種劇的ではあるかも知れぬが、本人にとつては何とも宙ぶらりんな状態の結末だ。本当に一瞬の出来事であつたのなら終わった事にすら気付かないで結末が与えられてしまう。

百合絵は生まれ変わりだと極楽浄土だとかは信じていなかつたが、結局死んでみなければ実際の所は分からないと思つてゐるからその時を半ば楽しみにして待つてゐる。そして百合絵は魂が完全に消滅してしまう結末をどこかで望んでもいた。すっぱり終わりになつた方がいい。また意識を持つて生まれ変わつたり、魂だけで彷徨うなんて考えて見れば気が遠くなりそうな話だと思うのだ。

だからこそ前世の記憶は忘れてゐるんだ、なんていう説も出来たのだと思つたのだが、それを採用するならばそれは同じ魂が永遠に輪廻している訳であり、忘れていたとしても、なんだか気持ちが悪いと思つた。自分も今そやつて存在してゐるのかと思うと嫌悪で鳥肌が立つ。その結末が真実だったら、目に見えぬ粒子の一片にまで恨みを抱きそうだ。

そこまで考へて延々と続きそうな堂々巡りを半ば強引に断ち切

る。気分を害するだけだと思つたがだ。

百合絵は何か考え方をする度に話がどんどん形而上学的な方向に逸れていってしまうのを自覚していた。時にはそれで己の卑小さを知り、一種諦めにも似た気持ちで現状の不満を受け入れられ、精神衛生の向上を図るにも効果的だ。だが、それによつて何の解決にもならないと酷く落ち込む場合もある。今日の場合は断然後者の様だつた。

何とはなしに天を仰ぐ。夜空ではゆっくりと雲が移動していた。天気が悪い、という訳ではないがやけに雲の多い夜だと思った。百合絵はこういう空が好きだ。満点の星空と言つのも良いが、雲が多い晴れた空といつのも何とも言えぬ安らぎを百合絵に与えてくれる。

ずっと眺めていると身体が一個の空洞になつてしまつたかのようない感じなのだ。雲と一緒に中身は全部没されてしまつたかの様な感覚。

元素だ、と思つた。元素に還元されてしまった氣になれる。思考を持たず、ただ世界の構成物質の一つ。流れるままにあり、意味等知らずにただ在る。そう考へると心が益々透明になつた。

百合絵の体は自然に固まつてそのまま固定される。瞬きや呼吸もゆっくりになつていくような気がした。

どれくらいそうしていただろうか。すつかり芯から身体は冷えてしまつっていた。いつの間にか寒さにやられて身体の活動能力が低下し、動けなくなつていただけなのかもしれない。

掌を擦り合わせる。片栗粉の感触がした。

なんだか百合絵は細胞の気持ちが分かつた様な気になつた。自分の中にもある細胞だ。常々百合絵は細胞を不思議だと思っていた。自分の身体の中で生まれて死んでいくのに全然痛くも痒くもない。それが不思議だった。皮膚も無理矢理剥がせば痛いが、自然に剥けていくのは何ともない。何故なのか百合絵には不思議で溜まらない。それは細胞の気持ちが分かつた様な気になつていて今も変わらな

かつたが、それでもまだ細胞は在るだけなんだと分かった。

きっと細胞は無感覚なんだ。プラスチックや硝子球と同じだ、と思った。

辺りは闇が濃くなっている。逆に百合絵の闇は綺麗に晴れていた。
きっとここに吸い込まれてしまつたんだううと思つてみる。そうしたら益々気分が良くなつて、文庫本を持つとベンチから腰を上げて岐路に着いた。

また闇を溜め込んだらここに来よう。百合絵はそう思つて心なし
か柔らかくなつた顔の筋肉で薄つすら笑みを形作る。懐かしい感覚
だつた。

そして無性にG a l l e yのライブに行きたくなつたのである。

強固な門に果てしなく続いているような白い塀。掛かっている表札も立派な物で『西方』と随分達筆な字で掛かれている。例えるなら映画で見る武家屋敷といった感じだった。

門は見た目通りの重厚な面持ちで左右に開き、石畳が屋敷の玄関まで続いている。左右に広がる庭園には白い小石が敷き詰められ、大小様々な石がぽつぽつと置かれていた。

松のような木が端の方に控えめに立っているが所謂これは石庭という奴なのだろう。義文はその独特の雰囲気からダリを連想した。何となく似ている。ダリのあの不可思議な世界に何処か通じている物を感じた。温度が感じられない、と言つたら良いのだろうか

そういうところが同じだと思った。

前を行く人物の背中に視線を転じる。

ラフな淡いグレーのカットソーに白い細身のスラックス、真っ黒な髪の毛をさらさらと揺らして歩く様子はなんとも軽快に見えた。

義文はこの人物　那葵もまたこの庭と同じだと思つた。ただ庭を見たからそう思ったのかもしれないが、簡単にどんな風景にも馴染んでしまう、否、その風景を侵食していると言つた方が正しいのだろうか　そんな風に思えた。

天上天下唯我独尊という言葉は正しくこの人物を表すに相応しい。そして那葵自身は毛程も意識していないのだろう。義文には全く捉えどころが無い人物であった。

とは言つものの那葵と知り合つてから一週間程しか経っていない。それがまるまる卯薑庵で働いている期間もあるから、ほぼ毎日顔を合わせている計算にはなるが、まだまだ知らない事の方が多いのは当たり前のかもしれない。

今日は那葵の自宅だという屋敷を訪れている。

殆ど那葵はあの卯薑庵の建物内で生活しているような感じだった

が、所謂セカンドハウス的な物だつたらしい。訪問の理由は卵蔓庵で働き始める切つ掛けとなつた事と同じだつた。つまり自宅にあるがらくた、基コレクションの整理の為、である。休日返上で借り出されたようなものだつたが、那葵の自宅はどうなつてゐるのか好奇心もあり承諾した。だが、例え断つても同じ事になつていただろう。屋敷内は外觀を裏切ることなく随分立派な造りだつた。時代がかつていてるが、古臭いという感じではなく、それが一個の威厳となつてこの建物は存在していた。

義文には今まで縁のない世界だつたから興味津々で辺りを見回してしまつ。まさかこれ程の屋敷に住んでいるとは思わなかつた。道樂で店をやつてゐる辺り、それなりの家柄の出なのだろうと想像はしてゐたが、それでも精々少し立派な一軒家といふくらいの自宅を想像してゐたのだ。義文の常識ではそれが限界である。そういうこんな立派な屋敷に住む人間と出会つ訳がないと思つていたからだ。

屋敷の中は清淨な空気が張つてゐるという感じで余計な物音は一切聞こえない。黒光りする廊下を微かに軋ませる足音が響くのみだ。那葵の話では常時十人程屋敷内には居るとの事だつたが、そんな気配は無い。それにこの屋敷に十人しか居ないと云うのは義文の感覚にすれば勿体無い、と言える。これくらいの広さがあれば旅館としても機能しそうだ。

「はい、ここだよ」

広いと言つてもそれ程入組んだ造りでは無い筈だが、那葵の部屋に辿り着くともう玄関がどちらの方向だか分からなくなつてゐた。あれこれ感心して眺め歩いていた為だつ。

襖を開くとそこには一面、卵蔓庵にあるのと同様の雑多な物達で埋め尽くされていた。辛うじて足の踏み場が作られてゐる、と言つた有様である。

中には絵画骨董品の類もあつたし、相當に高価な物ではないかと思われるような物も混じつてゐたが、足元に転がる首の壊れかけた

薄汚い人形やそういうがらくた類と同じ様な扱いをされていた。

「うはあ

」

心の中の何とも言えぬ虚脱感がつい口をついた。

「これ全部倉庫に移すんだ。軽く纏めて運んでくれれば良いよ」

那葵は柔らかい笑みで何でもないよう口にするが、全て片付けるのにどれ程の時間が掛かる事か 考えただけで気が遠くなりそうだった。

それでも手を付けなければ始まらない。わかりました、とだけ答えて入り口部分にしゃがみ込み、品物を物色し始めた。

那葵の方はすいすいとがらくたの間を滑るように進んで行き、奥にある窓を開けてその桟に腰を掛け、手の届く範囲のがらくたを取ると楽しそうに眺め始めた。何時もの事ではあるが、片付ける気があるのかどうか疑わしくなつてしまふ。

義文は黙々と作業を進め、二三時間程掛けて何とか三分の一程を一人で整理したのである。細々した物はダンボールに積め、大分運び出し易くなつた。那葵の方も適当に見ているだけの様で、何となく周囲は分別しているようである。

「那葵さん、帰つてらしたんですね」

ふと背後から声が掛かる。義文は開け放った障子に背を向けて居たから、反射的に振り向いた。

そこには落ち着いた物柔らかな声に相応しい、涼しげな顔の男が立つていた。着流しがまた様になつていて、普段から和服を着慣れしているのだと一目で分かる。

それにしても声を発するまでに気配が分からなかつた。

「ああ、こちらは 長坂さんですか？初めまして。私はこの家の当主と言つた所でしようか、西方政伸と申します。今日はわざわざお越し頂いたのに挨拶が遅れまして申し訳御座いません」

政伸は間抜けにもぽかんとただ見上げているだけの義文に、一瞬目を細め思い出すようにしてから酷く丁寧な調子で話しかけてきた。如何して名前を知つて居るのだろう、と一瞬訝しけんのは那葵は

人の事を話すとかそういう事をしないような気がしたからだ。だが、別段話しても可笑しくはない。

「あつ、いえ、私も挨拶もなく上がりこんでしまって・・・」

慌てて居住まいを正すとしどろもどろになりながらも中途半端な挨拶をした。顔が赤くなっているのが分かる。義文は今更ながら、本当であれば真っ先に自分の方からこの屋敷の主に挨拶に行かなければなかなかたのではないだろうかと思つたのだ。何となく那葵の調子に侵されて義文の常識が狂つていたのかもしれない。

何となく居心地が悪くなり那葵の方を見やると、相変わらずがらく

たを眺めているようで、義文の様子など全く気にした風もなかつた。

「那葵さん。そろそろ昼時ですしお食事でも如何ですか？」

再度言葉を掛けられると那葵はああ、そうだね、と言つて漸く顔を上げた。

ふと義文は疑問を感じた。政伸が当主であるのに那葵の方がまるで当主の様な態度であるからだ。勿論その態度は何時もの那葵と寸分変わるところも無く、そういう面から見れば至極当たり前ではあつたのだが、政伸は少なく見ても那葵よりは年上に見えたし、当主が敬語なのに対して那葵がそうではないという事は不思議にも思うだろう。親子程歳が離れている訳でもなく、政伸は落ち着いているから若干上に見えていたとしても精々三十代前半といったところだ。余り似ているとは思えなかつたが兄弟、と考えれば納得は出来る。

そこまで考えて那葵の年齢を知らない事にも気付く。義文の方が政伸より、年齢は近い気がするがそれすらよく分からない。特に気にする事も無いと思っていたが急に気になつた。

ただ、今この状況で聞くのは憚られ、取り合えず義文の中では歳の離れた兄弟という結論を出したことで落ち着いた。政伸の敬語もただの癖で、誰に対してもそうなのだらう。

政伸を筆頭に三人は連なつてがらくた部屋を後にした。意識すると確かに空腹を感じる。何か冷たい飲み物も欲しかつた。

通された部屋は広い座敷だった。欄間には円形の飾り窓が設えてあり、床の間には大小の山々が描かれた水墨画が掛けられ、その前には一輪の彼岸花が生けられていた。静寂な風景に彼岸花の赤はやけに鮮やかに映え、青磁の透明感を持つた色合いとも対照的でそれぞれの特質を増長し合っている。義文は慣れない景色ながら、何処かに懐かしさの様な安らぎの様な空気を感じ取った。

勧められるまま座布団に腰を下ろすとまもなくして膳が運ばれてきた。若い女性が一人、如何にも優雅な仕草で義文に向かつて挨拶を済ませると膳を整え始める。義文は膳で食事をする機会などは早々あるはずも無く、挨拶をされても頭を下げて姓名を告げる事くらいしか出来なかつたし、準備されている間、どうして良いのか分からず一人戸惑い乍俯いていた。

それでも好奇心から上目遣いで様子を伺う。政伸は威風堂々といった感じで座つているし、那葵はすっかり寛いだ様子で遠くを見ていた。どんな時でもこの人物には如何という事は無いらしい。寛いでいるにも拘らずだらしない感じも受けない。義文は恐縮するばかりだが一人にとつては日常的な事なのだろう。

膳を用意してくれている一人は永松という姓の姉妹との事だつた。姉は小枝子、妹は結衣香と言うらしい。小枝子は二十歳を越えた位だろうか、妹は二三歳下だろう。一人とも雰囲気は違うが顔の造作が似ていた。どちらにしても相当な美人には変わりなく、姉は少し氣の強そうな顔の造りで、妹はあどけなさを残した柔らかい印象だつた。

準備は物の五分と掛からなかつたが、その間殆ど必要な物音以外は立つことも無く、義文には随分長い時間に感じられた。姉妹は支度を終えると一礼して部屋を出て行つたので幾分気が楽にはなつたが、慣れない作法に義文の神経は休まる事が無かつた。その様子を見て取つた政伸が樂にして食べて下さい、と声を掛けてきたが、そう簡単にリラックス出来るものではなかつた。

那葵は気紛れに箸を動かし特に作法も何も関係ない様子で食べて

いる。そんな那葵を少々羨ましく感じながら、曖昧に返事を返すと、極力上品に食べる事を心掛けながら全てを平らげた。美味しかったが恐らく半分程しか味わえなかつたのではないだろうかと思つ。

昼食の後のお茶も済ませ、片付けの続きの為に座敷を後にしようとしたところ、丁度また一人の人物が現れる。那葵の背中越しに見たその姿に義文は暫く惚けたようになつた。

その男は理想的な八頭身でモデルのように手足が長く、狐を思わせる顔をしていた。薄茶の髪が顔を包み優男風の雰囲気ではあるが、背は高く骨格もしつかりしているから細身でもひ弱な印象は無い。そしてやたらと金属を身につけていた。両耳にはずらりとピアスが並び、左眉にも一つ並びで金属が埋め込まれている。どれも十四ゲージを超える大きさで大きい物だと小指くらいは入つてしまふではないかと思われた。首筋には精緻なうろこ模様のタトウも入つてゐる。

義文には普段中々見ないようなタイプの人間であり、全くこの男の容貌に馴染まない純和風な屋敷という場所柄も手伝つて、義文を驚かせるに十分な効果を發揮した。

「那葵さんお久しぶりです。片付けをしていると伺つたので私も手伝おうと思いましてね」

微笑むと一層眦が上がり狐顔の印象が強くなる。外見とは裏腹に話し方には品があり、所作も洗練されていた。よくよく見ると服装もラフではあるが趣味が良く上品に纏められており、義文はそのギヤップにも面食らつてしまつ。

「おお、久しぶりだね要。最近店に顔出さないけどバンドが忙しいのかい？」

那葵は変わらぬ様子で親しげに答えている。バンドをやつているとの事だったが、確かにそう言われればバンドマンといった風貌かもしれない。装飾品の数々を差し引いても雰囲気も華やか、というか人目を惹く感じではある。最もこの屋敷で出会う人物は皆、人目を惹かずにはいれない魅力があつたが、なんと言うか大勢に見られ

ていることに慣れているような雰囲気があつた。

「まあそうですね。忙しいと言えば忙しいですが、そろそろ本業も再開しますよ」

那葵にそう答えると、そちらは と言つて義文の方に視線を転じる。また目を細められた。

「長坂義文さんですね。成る程 。私は河上要と申します。バンド と言つても然程有名ではないのでご存じないかも知れませんが G a l l e y と言つバントでベースを担当させて頂いております。卵巣庵にはよく伺うので今後もお会いする機会があるかと思いますので宜しくお願ひします」

言葉遣いも声の調子も慇懃なそれで、腰を折る姿や微笑みを湛える様子も見る者に好感を与える。何が成る程なのか義文に意味を推し量る事は出来なかつたが、G a l l e y と言つバントは知つていた。

確かに頻繁にメディアに露出する事も無いから知らない人も多いかもしだれないが、学生時代の友人に熱狂的なファンが何人かいたので曲をまともに聴いたことがない義文でもそれなりに情報を持つてゐる。確か海外でも活躍しており、有名と言えば有名なバントである。

そんな人物に名前を覚えられているといふのは些か面白い心地だつた。如何やら義文の名前は那葵の周囲には割りと広まつてゐるらしい。何故だらう、とは思つたが差した意味が思い当たるはずも無く深く考えるのを止めた。

義文は政伸に挨拶した時の様にどもりながら挨拶を返す。今日は挨拶してばかりだが、一向に慣れることは無い。

那葵の周囲には変わつた人物が多いと思う。先日会つた臣広という画家の青年にしても、この屋敷内で会つた人々にしても何処か浮世離れしている。那葵自身が浮世離れしているような存在で、類は友を呼ぶとも言つし、タイプは違えど自然とそういう人達が集まつてしまふのもかもしれない。義文は至つて平凡だと自覚しているだけ

に戸惑う事も多いが、知らない世界に触れる事は楽しくもあつた。ついこの間までぎすぎすとした空間で事務的な毎日を送っていた事を考へると、まるで天と地程の差がある。

政伸とはそこで別れ、今度は要を伴つてがらくた部屋へと移つた。一人加わつただけでも相當に仕事は早くなる。何より要の動きには無駄が無く、何でもできぱきとこなしてしまつたから尚更だ。感心しながらその様子を眺め、義文も倣つて手を動かす。自然と会話もなくなつたが、那葵は相変らずだし、初対面の要と話すような話題が特にある訳でもなく、忙しくしている事は義文にとつて楽だつた。

日暮れ前に部屋は片付き、倉庫にも全ての物を運び終えていた。その倉庫といふのは所謂蔵のよつた物で、開け放つた瞬間にかび臭いような古臭い匂いが鼻をついた。中は広く、手前方には恐らく那葵が集めたと思われる品々が入つたダンボールだとかもあつたが、大層な桐の箱だと値打ちを感じられるような品々が暇なく並べられていた。

倉庫であれ蔵であれ、物を仕舞つておく場所なのだから雑然とした感じは否めないが、それでもそこは一個の趣が感じられる。中に居るとそのまま蔵のもつと奥深い所まで引き擦り込まれそうな錯覚を起こさせた。

がらくたがあつた部屋は畳の色が多少変色している部分があつたけれども、すっかり綺麗になり、見ているだけで仕事を達成した充足感が沸いてくる。少しだけ、今まで在つた物が無くなつて寒々とした印象も受けた。だが、如何やら那葵の収集癖のお陰でまたこの部屋は物で一杯になるとの話を要より聞き、何だか安心したような脱力したような気持ちになる。折角片付けてもきりがない、そう一人溜息をつくと、その意味を察知したのか要は笑つていた。

仕事を終えて一息吐いていると毎に膳を運んできた小枝子がお茶を運んでくる。何となく一日過ごしてこの屋敷にも慣れたような気分になつていたが、このような持て成しに慣れていらない義文は又も

や戸惑つてしまつた。

お疲れ様ですと労いの言葉を掛けてくれる小枝子になんと答えたものが困惑して、いや、慣れました、と苦笑して見せると小枝子も笑みを漏らした。ずっと無表情に給仕をしてくれるだけだったからその表情の変化に義文は些か驚いた。笑うと眇められた瞳が琥珀色の光を帯び、なんだか妖艶である。

「おや、珍しいですね、小枝子さんが男性に微笑みかけるなんて」要は面白がつていてる様に茶々を入れた。長い足を持て余した様に置に投げ出し今しがた注がれた熱いコーヒーを飲んでいる。

「それではまるで私が冷血漢の様じゃない?私は貴方程冷たくはない

隨分碎けた調子の物言いである。この屋敷に来てからずつと敬語ばかり聞いてきたせいか義文はなんだか不思議に感じた。とは言え不自然という訳ではなく、その会話は何時もの事なのだろうと思われる気安さがある。

皆何かしらこの屋敷、引いては那葵に関わりがあり、付き合いも深いのだろうと思われた。

「ふふふ、確かにそうかもしませんね。小枝子さんは余程慈悲深いお方です」

含みを持たせた笑いは要の雰囲気に良く似合つている。その後思い出したかのように元の表情に戻ると世貴はまだ寝ているのかと尋ねた。義文は初めて聞く名だつた。那葵の名前も変わつているがこのヨキという響きも聞き慣れない。

「もう起きた　ああ世貴」

答え終わる前にふとその名前の主が現れたらしく、小枝子は廊下の方を見やる。そこには義文から見れば外人にしか見えない風貌の青年が一人。無表情ではあるがかなりの美青年で、甘い面構えから発せられる雰囲気は柔らかく無機質である。

「そういえばどこかで　と義文は何となくその顔を見たことがある気がした。

「那葵が来ていると聞いてきた」

発せられた言葉は外見を裏切つて流暢な日本語だった。表情を変えずそっけなく言うと無造作に座り込む。

「世貴、久しぶりだね。寝る子は育つなあ」「

那葵はそう言って漸く桟から降りると世貴の前までつかつかと歩み寄り頭を乱暴な仕草で撫で、少し離れた位置に腰を落ち着けた。義文はその仕草に驚いたが、本人や他の者は至つて変わらずにそれを受け入れている。どういう関係なのだろうと疑問を持つと同時にそこで唐突に世貴が誰だったのかに思い至った。

「ああ！G a l l e yのウォーカルか！」

思わず声に出してしまつとあつさり要が、そつだよと答える。

「でも確かに外国の方じゃなかつたですか？ヨキつて名前つて余り聞きませんけど　日本の方なんですよね？」

素つ頓狂な声を上げてしまつた事に後悔の念が押し寄せ、それを紛らわすかの様に言葉を繋ぐ。だが、実際すぐ念頭に上がつた疑問だつたから、意外にも自然な調子になつた。

「世界の世に貴族の貴つて書くのですよ。この家の跡取りという事になつていますから勿論国籍は日本ですね」

無口らしい世貴に代わつてこれにも要が説明をくれた。跡取りとの事だつたが、当主の政伸とは全く似ていないし、親子程の歳の差もない。ハーフとも考えたが、瞳が青いという事から如何やらそれも無さそうである。

何か事情があるのかもしない。それ以上突つ込んで聞くのも憚られて、そなんですか、と義文は曖昧に返事を返した。

改めて世貴を見る。やはり華があると思った。バンドのフロントマンであるからそれなりの存在感と言つものが必要だとは思うが、無口にも拘らずこれだけの存在感を出せるというのは凄いと思つ。否、無口だと言つ所もそのオーラを保つために一役買つているのかもしけれない。

苦心して世貴が饒舌な姿を思い描いてみたが、それではなんだが

興醒めしてしまうような気がした。

義文は改めて自分の周りに座っている四人を控えめに眺めてみた。皆タイプこそ違うが何か一貫した迫力のようなものを備えている。また、皆が皆浮世離れしている。それこそこの日に焼けた畳の上という妙に現実感のある景色とは違和感を覚える程だが、その違和感でさえも四人の圧倒的な雰囲気に飲み込まれ有耶無耶になっている気もした。

一番親しみを覚えるのは今も饒舌に小枝子と離している要だつたが、その親しみ易さも表面上だけのような気がしてきていた。

那葵や世貴に比べれば小枝子も余程親しみやすかつたが、それでも異性という壁がある為か如何も義文は馴染めない。先程見た妖艶な表情にも一因があるのかもしれないが、義文にとつて女性とは不可侵な生き物であった。

全く異なる生物、一種神聖なものという氣さえしていた。

その先入観があるから、ただ単に異性だからというだけではなく、自分等では決して推し量る事が出来ない、という諦めにも似た気持ちが大きな隔たりとなってしまっているのかもしれない。

少し冷めたコーヒーを深みのある湯飲みのようなカップで啜る。とても会話に入つていくこと等出来そうもなかつたし、眺めていた方が良いとも思つた。最も話しているのは要と小枝子が殆どで、たまに思いついた様に那葵が噛み合わない合の手を入れるだけだ。しかし、それも別段可笑しいと言つ事はなく、当たり前のように要と小枝子もそれに答えていた。

世貴は入ってきて以来一言も発せずに那葵の方を注視しているようだつた。始め義文は那葵と世貴は何となく似ていると思ったのだが、思つた程似ていないのかも知れないとも思う。何処かしら共通点はあるのに違う 亂暴な言い方をすれば那葵は躁病の氣があり、世貴は鬱病と言つ感じである。

実際その様子からそのような感情の起伏は全く読み取れないし、二人に共通して無感動、無頓着、無機質という印象があるので、

敢えて分類するとその様な差なのかと思つたのだ。

また、皆の様子を眺めていると今まで検討をつけてきた年齢が違うような気がしてきた。整った顔というのは得てして一種の迫力が出てくるものであるし、それが年齢不詳の印象にも繋がる。世貴に關して言えばまるきり白色人種にしか見えなかつたし、日本人である義文には始めから実年齢の判断が付け難かつたところもあるが、それでも那葵と同じ位、若しくは少し下くらいだと思つていた。しかし、那葵の年齢すら田算でしかなかつた訳だし、その田算にすら自信が持てなくなつてくると全てが混沌としてくる。

果たして目の前のこの人物たちは本当に存在するのだろうか、若しかしたら自分はずつと眠つていて全てが夢の中で作り出された虚像でしかないのではないだろうか、そんな考えがふと頭の中を支配する。

その不安の影は自覺した途端益々大きくなり、目に見える景色を浸食しゆらゆらと大きな影絵のように襖や畳、障子の上を旋回した。眩暈がする。意識が遠のく感覺。だけど何故か心地良くもあつた。外見上はなんら変化もない自分自身の姿がやけに白々しく見えた。実際の光景である訳もないのだが、それが頭の中で作り出された映像なのか、自分自身の目で見た視覚情報から寄るものなのか義文には判断がつかない。

ぐるぐると回る陰の中に、はつきりした輪郭を持った人の姿が四つ浮かび上がる。まるでオブジェのようだ。冷たい大理石で作られた美しく硬質なオブジェである。義文は芸術に造詣が深い訳でもなかつたが、この四つのオブジェは傑作であると確信した。

そしてそれを思う存分に鑑賞出来ていて自分自身を酷く幸福だと思つた。

大量の血液が胸に流れてきて、そこが信じられない程熱く膨れていく気がした。そして得体の知れない熱風のような物が暴れ回つている。自分の内部からずたずたにされている様な感覺だった。しきその痛みは何故か心地良い。酷く感覺が冴え渡つていてるのに何処

か鈍感になつてしまつていいよつた不思議な感覚だ。

現実が齎す白昼夢。

既に日は暮れようとしている。

辺りは赤紫色から青紫色に移り変わり、何時からか薰つていた桃の匂いが一層熟したものに変わっていく。じゅくじゅくと思考も熟れていく。

小枝子が夕食の準備の為に立ち上がるまで義文はそんな具合だった。万事元に戻る時、ちっぽけな器に全てが収まつていく様な感覺を味わう。なんだか物足りなく、酷くがっかりした。

だが、それも一瞬の事。義文は直ぐに現実世界の人間的常識を取り戻し、夕食を丁重に辞退する。とてもそこまで手数をかける訳にはいかないと判断しての行動だったのだが、そのまま屋敷に留まつていてはもう日常生活に戻れなくなるのではないかという無意識の懸念もあつたのかもしれない。

屋敷の中の空気は清浄だし、何ら変わつた性質の物ではない。それでもそこは何か独特の魔力のような物が渦巻いている様な気がした。魔力とは言つても毒々しい物でもなければ怪しげな物でもない。それでも上手い言葉がなく、義文の貧困なボキャブラリーの中では魔力と言つ他ないような気がした。

玄関まで見送りに出てくれた要に改めて挨拶をすると、意識して呼吸をゆっくりとしながら門まで歩く。石の庭は昼間見た時よりもずっと生き生きしているような気がする。知らず鳥肌が立つた。

けれど門を出れば意外な程にあつさりと慣れ親しんだ夜が広がっているだけだった。内側に込められていた空気は門の外側に漏れ出すと言う事はないらしい。

空を見上げると綺麗な朧月夜だつた。輪郭を空に溶け込ませた雲がゆつくりと風に流されている。然程寒くもないのに吐き出す息は微かに白かった。

最後に見た要の瞳も琥珀色の光を湛えて笑んでいたのを一瞬思いだす。だが、もう桃の香りも消えうせ、焦げた木の匂いが脳をちく

ちくと刺激した。

景色が急激に青白んできている。黒だつたものが藍色、青に、そして徐々に水で薄めたようになつていくが、代わりに埋もれていた色達は徐々に本来の色を濃くしていた。

「冷えますね。特にこいついう時間帯は視覚的にも寒い気持ちになります」

冷えると言いながら全く寒そつた気配も見せずに男は悠然と微笑んでいる。

一体何処を見ているのか。

視線の先に確かに自分が居るのだと分かつていたが、自分であって自分でないもの、否、自分も知らない自分の本質的な部分を見ている様な気がしている。

「私はこいついう雰囲気好きです」

百合絵はぽつりとそれだけ漏らす。朝日が出る前の一寸した時間はまるで時が止まってしまったような錯覚を起こさせる。特に人通りもない塀に囲まれた路地を歩いているから尚更そう思った。

「私も嫌いではないですよ」

一層笑んだ顔で男 要は笑った。細くなつた目元は猫のようだ。元々百合絵はこの要に対してもう一つ印象を持つていたからかもしれない。要はG a l l e yのベーシストである。細身の身体を揺らせたプレイスタイル等から猫の様だと勝手に思つていた。

「あの、やつぱりこんな時間にお邪魔してしまうのは迷惑にはならないですか？」

百合絵は急にその想いが強くなり立ち止まつた。

朝日は完全に顔を出したらしい。辺りはすっかり黄ばんでいる。

「いえ、問題ないですよ。それにこんな時間の方が良いのでしょうか。でももし嫌になつたと言つのなら止めておきましょうか？」

嫌になつた訳ではない。寧ろ切実に『卵蔓庵』という店に行きた

いと願つてゐる。だが、百合絵の常識がそれに理性の歯止めを効かせている。始めは勢いが勝つていてそれ程気にならなかつた事が気になり始めた。要はそれを見越してゐるのだろう。百合絵を気遣う素振りを見せても実際一度決めた予定を覆すつもりは無さそうだつた。そして百合絵は要の言葉に妙な安心感を得てしまふ。何故か説得力があるのだ。外見とは裏腹の優雅な物腰に懲懃な口調がそう思わせるのかもしれない。

わかりました、とだけ答えて止まつていた足を前に踏み出す。先程と全く変わらぬ様子で。

百合絵が何故 G a l l e y のメンバーである要と連れ立つているのかと言うと、殆ど偶然の成り行きに過ぎなかつた。とはいえ、憧れのバンドのメンバーとこうして連れ立つて歩いている事は百合絵にとって正に奇跡的な出来事に違いない。

大学の友人に誘われて行つたクラブのことだ。雰囲気が余り百合絵の肌とは合わず、一人仲間から外れてカクテルを舐めていたら、丁度隣に寄り掛かつた人物が要だつた。

だが、その時は嬉しいハプニング、位の心地でいた。自分の好きな有名人だったとはいえ、偶然有名人と街中で出くわす、なんて話は良く聞くからだ。

百合絵はぼんやり遠くを見ていたのだが、要の存在は人目を惹く。自然と隣の人物の顔を伺つてしまつていた。

要はピアスやタトゥ等でも実際本人だと分かりやすいし、人間違いということもないだろう。その割に G a l l e y のベーシストと氣付く人は居なかつたようだが、メディアには滅多に露出しないし、写真でさえ暗くて分かり難い物が多い。フロントマンであれば気付かれたのかもしれないが、余程ファンでもなければ他のメンバーまで見てはいないのかもしれない。

確信した百合絵はつい衝動的に声を掛けてしまつていた。考えるより先に口が動くという事は百合絵にとっては珍しい事ではあつたが、深く考えたところで良い言葉が出る訳が無い。寧ろ変に意識し

ていたら碌に言葉として発音されなかつたのではないかと思つ。声を掛けたから要が答えてくれる一瞬の間が酷く居た堪れなくなつたが、結果的には良かつたという事なのだろう。

要は突然声を掛けた百合絵を訝しげることもなく、にっこり微笑んで丁寧な仕草で受答えをしてくれる。百合絵はそんな仕草に安心しつつもどぎまぎしながら会話を続けた。クラブの中で流れる爆音の渦はライブに比べれば静かなもので会話がままならない程ではない。多少大きな声で話さなければ成らなかつたが、多少の酔いも手伝つて直ぐに慣れてしまつ。

話しているうちにぎこちなさも徐々になくなつていき、様々な話をすることが出来た。主にG a l l e y に関する事だつたが、途中からは百合絵自身の考えも交えながら語られていたし、そういう意味ではファンとアーティストという関係だけには留まらなかつたのかもしない。

レオンの話になつた時、彼の一番尊敬している人物を本當か「冗談」か分からぬ口調で教えてもらつた。それが卵蔓庵の店主だつた。

その店については話を聞くだけでは良く分からなかつた。

店主の名前は那葵といい、薄暗い店内に彼の収集物が壁一面飾られてある 分かったのはその程度である。

だが、要曰くきっと百合絵は気に入るだろうとの事だつた。百合絵も何故かそんな気がしていた。無性にその店へ行きたくなつてしまつ。

そしてその心情は素直に言葉として漏れ出ていたらしく。要は一層深い笑みを浮かべてその意を汲んでくれたのだつた。

クラブを辞したのはそれからすぐ後の事で、百合絵は友達に先に帰る顔だけ伝えると要と一緒に深夜の街を歩いた。要にも当然連れが居るのだろうと思つたのだが、そんなそぶりもなく、気にしなくて良いと言われた。百合絵にはヨージ・ジョンソンの付き合い等分からなかつたからそういうのも常なのかも知れないと思い直す。

暫くはぶらぶらと深夜の街を徘徊した。勿論卵蔓庵に向かつてい

たのだが、それなりの距離であるにも関わらず車を拾つことはなかった。どちらも何も言わなかつたが、二人ともそういう気分であつたらしい。もしくは百合絵の氣分を要は察して合わせて貰ただけなのがもしかれない。

どれくらいそうして歩いていただろつか 空が白み始めるまで二人はほんと無言だった。それでもその無言は心地良いものだつた。

「さあ、ここですよ」

如何やら田的の場所に着いたらしい。目の前の建物には確かに『卵蔓庵』の看板が掲げられていた。随分古めかしい建物である。黄ばんだ景色に、全体的に焦げ茶色の建物だけが浮いて見えた。

「もう開店されているんですか？」

百合絵はドアに掛けられている開店の札を見て不思議に思つ。まさかこんな時間から営業しているとは思えなかつたからだ。二十四時間営業でもあるまいし

「ああ、この店は何時も開店中です。主不在でも開店中なんですね」

成る程 この店の主人、那葵という人物は相当に大雑把な性格なのだろう。店が始終開店中になつていても一向に困る事がないらしい。確かにこういった店であれば常識を持つて尋ねても無駄かもしれない。

入りましよう、と促がされ、要が開けたドアはすんなりと開いた。当然の様に鍵も掛かっていないらしい。

後に続いて店内に踏み入れると当たりは薄暗かつた。まるで夜に逆戻りしてしまつたかのような具合で、橙色の間接照明だけが仄かに辺りを照らしている。

店内の様子は確かに不思議なものだつたが、事前に聞いていたから驚くというよりは納得した。

ただ、日が昇つていて地下でないにも関わらずここまで暗いものだとは思わなかつた。こういう薄暗さや古臭い調度品に囲まれた雰囲気というのは、昨今流行のバーなどを思い浮かべればそれ程物珍

しくもないのかもしねないが、ここは故意にやつた演出といつより、自然に出来上がった産物のような感じである。

また、店であるのに店足らしめる機能が欠如していた。その点では多少驚きにも似た感情があつたのは確かである。ただ店として見なければ何處にも違和感がないように思えた。全てが一つになつてその空間を構成している、そんな感じだ。

要は少し待つていて下さい、と言つといきなり部屋の床の一部分を持ち上げて中に入つて行つてしまつ。そんな場所に地下室があるとは思わなかつたからかなり驚いた。

一人残された百合絵は店の中を改めて見回す。本当にぎっしりといつた感じで品物が並べてあり、雑多ではあるものの、これだけあると寧ろ壯觀、といった感じでもある。更に壁際に寄つてよく見ると、並ぶ様々な品は百合絵にとつて興味をそそられる類の物であることが分かり、益々面白くなつた。

薄暗い照明と相まつてそれらは不思議な魅力を発しているようだつた。もしこの店から持ち出して白日の下に晒したのならば、途端にそれらは不思議な魔力を失つてしまつのではないだろうか。百合絵は何となくそう確信した。

暫くするといきなり下の方から声が聞こえた。夢中になつていたのか床の扉が開いたのには気付かなかつたらしい。否、若しかしたら要が入つた時に開けつ放しになつていたのか

「お客と言うのは君か！成る程　　ようこそ卵蔓庵へ」

声に驚いて振り返るとそこには恐ろしく綺麗な人物が一人顔を出していた。薄暗くとも良く分かる。正にそこだけ光が点つているかのような美しさだった。

百合絵は目を見張る。一瞬心臓が止まつてしまつたよつになつた。

「初めまして」

何ともそつけない声音になつてしまつたと言つてから思つ。

百合絵は他に挨拶らしい言葉を全く考えられなかつた。その一言でさえも単なる反射で出たようなものだつたし、その後に言葉は続

かない。元々口数が多い方ではないから思考力が奪われた今、口が動かないのも当然の事だ。

「こちらが那葵さんです。そして、こちらが今お話した百合絵さんです」

地下から出てきた二人は百合絵の前に立ち、要がそれぞれの間で丁寧な紹介をする。何時見ても動作に品があると思っていたが、今は尚更懇懃に見えた。

百合絵は幾らか思考能力を回復させて、紹介と共に軽く会釈をする。少し上目遣いになつてしまつたのは自分でもみつともないと思ったが、どうしても那葵が気になつてしまつたのだ。

那葵は綺麗に微笑んでいる。

百合絵は暫くまじまじと那葵の微笑を見入つてしまつた。きつとこの人物はきっと何時もこんな顔をしているのだろうと思った。怒りもしなければ悲しみもしない。無表情でもきっとその表情は柔らかいのだろう。

百合絵は数時間卯蔓庵に滞在したが、那葵に対する印象は変わらなかつた。全てを包み込むような雰囲気。だが、よく考えてみると要も似たようなところがある。確かに外見も違えば口調も違うが、何処か共通したところがある。那葵と一緒に居るからそう見えるのかとも思つた。

「百合絵はここを氣に入つてくれたかな？」

ふと那葵がそんな事を尋ねてくる。店の中に簡易でお茶の席を設け、三人はゆつたりと寛ぎながらコーヒーを飲んでいた。

百合絵は最初こそ戸惑つた部分もあつたが、不思議とすぐ雰囲気に馴染む事が出来てしまつた。

「ええ、とても不思議な感じですけど何処か懐かしいと言つか安らげる感じがします」

前の会話との脈絡はなかつたが、これが那葵のリズムなのだと百合絵も分かるようになつてきており、特に変にも思わず答えた。

「大体皆さんこのがらくたの山に面食らつていかれるんですよ。那

葵さんの収集癖には感心してしまいます。これ以外にもまだまだありますからね」

要は笑いながら言う。確かに百合絵も少し面食らった部分もあるからその気持ちは分からぬでない。しかもこれ以上、とはどの程度の量なのか分からなかつたが、恐らく少なくともこここの倍以上はあるものと思われた。確かにそれは感心するしかないだろう。

「僕は自分の気に入つた物は身近に置いておきたいんだ」

那葵は嵩張るとかそんな事情は如何でも良いらしい。

「なんだか羨ましいです。そんな風に好きな物をとことん追い求められるのって」

百合絵はつい思つたままの事を口にしてしまう。それだけ那葵の顔が素晴らしい充実感を持つていて見えたからだ。

「でも百合絵さんはG a l l e y に関してあんなに熱心にお話して下さつたじやないですか。私はあの時の貴方はとても生き生きとしていて素晴らしいと思ったと思っていますけど」

それを聞いて百合絵は顔を赤らめた。確かに熱く語ってしまった自覚はあるし、全部本当に思つていたことだ。だが、それを本人から改めて口に出されると羞恥が込み上げる。

「確かに私はG a l l e y を素晴らしいと思いますし、本当に好きなバンドだと言えますが、所詮私は一リスナーに過ぎないし、それを作り出させてるのは要さん達な訳ですし」

言い訳がましく口にした言葉はなんだか自分でも良く分からなくなつてきて最後は尻窄みになつてしまつた。照れ隠しの様に温くなつた「ヒー」を啜る。

「僕達はただあるがままを分かりやすく表現しているに過ぎません。ですが、それを受け取る側がその表現を如何取るかは分からないのです。凡その共通認識を与えたとしても、やはり個体差がありますからね。全く湾曲しない、という事は不可能でしょう。百合絵さんはそれでも私達の認識と大分近いように感じました。それは別に良い事でも悪い事でもないのですが私はそれで貴方に興味を持つ

た。そして、貴方も同じように感じられたから Gaiety に興味を持ったのでしょうか。那葵さんも同じ理由で『好きな物をとことん追い求めている』んですよ。だからそういう意味では貴方が羨ましいと思うものは既に手に入っているんです』

要の説明は確かにそう言わればそののもかもしだいという説得力を持っていた。だが、何故だろうか。百合絵は那葵に対してなんともそれだけでは説明出来ないような羨望の感情を抱いていた。

「上手く言葉に出来ませんが、私は何物にも縛られないような那葵さんが羨ましいのかもしれません。私は自分の本質と言うのが何時の間にか分からなくなってしまって 那葵さんは凄く自分といふものを持つていらっしゃる様な感じがします。性別とか年齢とかそういう根本的な原則の枠からも解き放たれている様な そんな感じです。私はそういう常識から解き放たれたいと思っている。まるで空想家の夢だと笑われてしまうかも知れませんが、そんな事を考えては幸福な気持ちに浸り、現実とのギャップに落胆するんです」

百合絵は考えている時の癖で自分の指先をじっと見つめながら言葉にする。言い終わつた後も自分の言葉が足りないような、他にも言いたい事がある様な気がしてそのまま指先を見ていた。

「何物にも縛られたくない それは気持ち一つで何とでもなる様でいて中々難しいものです。若し完全に縛られない状態というのがあるとすれば他の動物と同じに生きるしかない。この国ではまず、戸籍が無い人間なんて存在しませんからね。居てもやはり戸籍を求めてしまう。それはその方が都合がいい社会のシステムになつているからだし、実際無数の人間が暮らしていく以上規則というものも必要になつてきますから。普段、そんな事は当たり前で気にもならないでしうが、一度その息苦しさに気付いてしまえばそれは時折酷くわずらわしい物になります。如何しようも無い現実があり、その中で生きて行く為には我慢して上手く折り合いをつけるしかないんです。命を絶てば或いは救いには成るかもしれない。それでも

生まれてきたのには何らかの意味もあるんです。例え一生を極平凡に過ごしたとしても、その人の知らない所で確実に意味が存在している。その意味を見つけられればきっと貴方はそんな迷いを抱かなくなるでしょう。例えそれが仮初だとしても良いんです。眞実である必要は無い。しかしその人個人にとつての眞実と言つものは存在する。他人にとつて眞実だからと言ってもその人には眞実とならない場合の方が遙かに多い

「百合絵はもし君が望んでいる世界を手に入れたのなら如何する？本当に何物にも縛られない世界だ」

百合絵は那葵を見返す。那葵は変わらずに微笑んでいる。百合絵は静かに視線を落とすとその世界をもう一度考えてみた。

「私は若し今の世界が一変してしまったとしたら素晴らしい事だと思います。だけど それは本当に叶う事がないと思つていいからそう感じるのかも知れません。結局は空想の世界から抜け出せないんです。理想論ばかり追い求めてデメリットには頭が回らない。夢を叶えた人間が抜け殻のようになつてしまふ、なんて話を聞きますし、私もそうなつてしまふのかもしれません」

「そうだね。そうなつてしまふ人間も居るだろう。だけど、自分の眞実を見つけていればそんな風にはならないよ。人間と言うのはね、隸属する生き物なんだ。隸属するものが無ければ途端に不安になる。ただ、隸属するものがあるにも関わらず不安に陥つてしまふのは隸属する相手もまた人間だからだ。若しくは人間が作り出したもの、だね。勿論それが人間であつたとしても盲目的に、例えは神だと信じればそれはそれで本人は救われるんだ。本人が神足りると思える程の確証があればそこに不安は無くなる。宗教、秘密結社等もそれ当るだろう。よく過激な新興宗教なんかは信者をマインドコントホールしていると非難されたりもするが、それはそれで良いのかもしれない。僕はそういう好みではないけれども、本人がその状態に満足しているのなら口を挟みたくはない。それから科学者等もうと言えるかな。一つの事を信じ探求していく様は一種神を信じる

行為と同じだからね。これもよく論理的觀点から非難を受ける場合もあるが、それは価値觀の相違であるだけだ。だが先人は公に数え切れない殺し合いをしていてる訳であるし、それは現在にだってある。カニバリズムでさえ今は野蛮で文明人的でないと意味嫌われているが、近世代極身近に存在していたんだ。現在それを闇雲に非難している人々も辿つていけば過去に人肉嗜好をしていた祖先にもぶつかるだろうという程にね。現在も菓子等で人型を模した物や顔が描かれている物もあるだろう？それらは潜在的なカニバリズムの欲求を表しているのではないかとも考えられなくは無いんじゃないかな。言葉でも『食べててしまいたい程可愛い』なんて言うでしょ？言葉が生まれるのには何かしらの意味があるものだから、文字通りそういうことがあつたのかもしれない。最も、死者を弔うと言う意味で、その死者と親しかつた者がその肉を食らうと言つ風習がある地域は存在したんだけどね』

そこで那葵は、ああ、話が少しづれてしまった、と笑った。

「まあ兎に角そういうた根源的な欲求には目を背けたくなる醜悪と考えられるものも多分に含まれていて、人間を隸属する生き物とすることもこれに含まれるだろうってことだね。必ず何かに隸属している。そうしなければ生きていけないんだ。さつき、隸属するものがあるにも関わらず不安に陥つてしまつ場合を話したけど、これは隸属しているとまず気がついていない場合、忘れている場合が多い。気が付いて、それを重要な因子だと見極めれば世の中はもつとシンプルになる筈だよ。それこそ百合絵の理想とする世界に近づくだろう。だが、この意識を広めるのは容易ではないはずだし、可能だとしても数十年、数百年の単位で見なければならないだろう。それこそ劇的な事が無ければ無理なのかもしれない」

躍起になつて変えなければならぬ理由もないし、そうするつもりなんて毛頭ないんだけどね、と又もや那葵は笑つた。

確かにこんな意識改革を行つた所でメリットは無さそuddi、一部そういう思想を持つた者だけが喜ぶだけだと思う。それにそうす

る事は価値観の押し付けでしかないように気がするし、そんな事は那葵も望むところではないのだろう。また、百合絵の望む所からもずれてしまう。理想を目指し、過程でそれを覆すような事をしていっては元も子も無いのだ。

ただ、誰もが認める絶対的な存在があつたら如何なのだろう。否、そんなものは存在しない。宇宙は膨張し続けているし、自然も形を変える。絶対的な存在は不变でなければならない。それは存在し得ない存在なのだ。

形而上学的觀念に突き当たつて終わりだ。

百合絵はそう思い至ると酷く疲れてしまった。きっと、那葵もそのことに関してはきっと全て承知の上なのだろう。

だが、百合絵とは違つて全く変わらぬ素振りでいる。きっと那葵は落胆等しないのだろう。要もきっとそうだ。全てが在るがまま、流されるように彼らは存在しているのだと思った。自分もそうなれたらどんなに良いだろうか そう考えては見たものの、彼らの境地等理解する事は出来ず、ただただ、深淵へ落ちて行く様な気持ちを味わっていた。

そんな百合絵の心内とは裏腹に、また一人の人物が床下から上つてきた。

「那葵さん来客中失礼します。私はそろそろ帰らせて頂こうと思いまして」

明朗快活とした声だった。真っ黒な髪の毛はアシンメトリになつており、左は短く刈り込まれ、右は前下がりに長くなつていて。だが、それが良く似合つており、一重瞼の涼しげな面持ちの青年だった。要同様タトゥやピアスで装飾している。百合絵には何というのか分からなかつたが、手の甲に円形に浮き出た異物と分かる物も恐らくアート的な意味合いを持つているのだろう。

良く見ると綺麗に残つた傷跡もいくつか見受けられた。ただ肌を露出しているのは鎖骨から上と手だけであるからはつきりとは分からぬ。

この人物の登場の為か、百合絵の果てしなく下向していた気持ち
は一旦リセットされた。

「では一緒に帰りましょつか宗之さん。百合絵さんは如何なさいま
す？」

要がそれを引き取ると宗之と呼ばれる人物は軽く頷いた。百合絵
も夜は眠つていないし、確かにそろそろ辞した方が良いだろうと思
う。私も帰ります、とそれに同意した。

「じゃあ、また何時でも着たら良いよ。僕は大抵居るし、歓迎する
よ」

那葵は最後に百合絵にそう言つと店内に客人を残したまま地下に
潜つて行つた。こことん自由な氣質の人だと思う。三人でそれを見
送ると後は無言で卵蔓庵を出た。もう日は大分昇つっていて随分と眩
しく感じられた。

「お早う御座います」

薄暗い場所でのこの挨拶に初めのうちは違和感を覚えていたものの、半月近く同じ行為を繰り返せばいい加減それも無くなってしまった。

「お早う御座います」

那葵は大抵地下室に居るので、店先で挨拶をする事は稀だつたが、今日は人影が見えたからすぐに声を掛けた。

だが、答えた主は那葵ではない。まず那葵ならば気の抜けた生返事が返ってくるのが常である。

明るい場所から暗い場所へ入つてくるからすぐには目も慣れないし、大体のシルエットしか分からない。まさか那葵以外の人物が居るとは思つて居なかつたが、その声が臣広であることに気付き納得した。

「嘉山さん ですよね。暗いから一瞬分からなかつたです。那葵さんは居ないんですか？」

那葵とは随分親密な付き合いがある様だし、まだ大分早い時間帯ではあつたが別段居て不思議という訳でもないだろう。一度だけではあるが義文とも面識があるから事情は何となく飲み込めた。

「那葵は下で片付けだそうです。すぐ終わると言われて待つているんですけどかれこれ一時間位経ちましたから忘れられているのかもしけませんね」

臣広は笑つているが、一時間はすぐ終わる、の範疇を越えているだろうと思う。一人が旧知の間柄であるのを知つていいから良いようなものの、知らなかつたのなら、如何対処して良いのか分からず狼狽していたはずである。

だが幾ら旧知とは言え、笑つて済ませる臣広も待たせる那葵も一般的な常識では推し量る事は出来ない。那葵やその周囲にも大分慣

れたつもりだつたが、こういう場合はつくづく感心し、呆れる。最も、義文自身、このペースに巻き込まれて現在に至っているのだ。

そう思うと微妙に苦笑が漏れてくる。

義文は下に行くついでに声を掛けてくる旨を伝えると、床下へ降りていく。床下へは急な階段を下りなければならない。これも最初は暗いのも手伝つて足元が覚束無かつたが、今は慣れたものである。床下の空間は中々に広く、地下室と言つた方がしつくり来るのかかもしれない。長身の部類に入る義文が立つても十分にゆとりがある。だが店に比べれば天井が低いのに代わりは無く、穴倉のような印象を抱かせる。また、床下には幾つか部屋もあり、蟻の巣の様でもあつた。

義文は何時ものように丁度店の下にある部屋で荷物を置くと、トンネルのような廊下に出た。

廊下の両端には広めの部屋があり、左右対になるよう六つの小ぶりの部屋が配置されているという造りである。そしてこの小ぶりの部屋は四つが倉庫の役割を果たしており、一つが給湯室、もう一つがユニットバスになつていて、風呂もトイレも裏の余り住居らしくない住居部分にもきちんと備え付けられているが、大抵ここの中物を使つている様だつた。

そして那葵は大抵一番奥の部屋に居る。ここは他よりも多少天井が高く造られており、那葵の寝室にもなつていた。

大きな天蓋付きのベッドが中央奥に据えられ、長椅子、それに重厚なロー・テーブルを挟んで来客用のソファが対になつて置かれている。だが、ここに来客を通したのは見た事がない。臣広はここに来たことがあるらしいが、未だ地下に降りてくるのも見た事がなかつた。

壁際には棚があり、店の中にあるようながらくたを同じように並べてある。室内は天井や壁、床も含め様々な赤で統一されており、照明も橙色だつたから、一步この部屋に踏み込むと全てが赤く染まつてしまつた様な錯覚に陥る。

義文はこの部屋に入ると脳が麻痺した様に感じる事が間々あり、嫌いな訳ではなかつたが、とても生活は出来ないだろうと思つ。

「お早う御座います。臣広さんが随分と長くお待ちの様ですけどまだ用は終わらないんですか?」

「ああ・・・」

生返事を返す那葵は長椅子の上に悠々と横になり読書をしていた。随分と装飾が凝つた古い本である。普段の気分屋的な気質からあまり想像できないが、意外にも中々の読書家で日長一日読書に明け暮れているという事も多々あつた。余り披露されることも無いが、その知識も豊富なのである。

那葵がよく読んでいる分厚いそれ等は義文にとつて辞書の様にしか見えないし、見るだけで辟易してしまつ種類のものだ。第一ラテン語やフランス語等で書かれた物が一体何の本であるのかすら義文には全く分からないのである。

床下にも同じような本が無造作に散らばつてゐる事から推察するに、大方片付けをしている最中に気になり始め、それに没頭して仕舞つた、といったところだらう。那葵にはこいついうことがよくあるのだ。

「那葵さん、聴いてますか? もう一時間以上お持ち下さつてるみたいですよ」

床に散らばる本を拾い集めながら長椅子の傍まで寄ると幾分声を張り上げて言つた。

「ん・・・? ああ、すっかり忘れていた」

どうやら今度は声が届いたようだ。案の定忘れていたらしいが、それでも本を閉じて起き上がつた所を見るとすぐに行動してくれるらしい。那葵は一つの事に没頭するとどんな状況でもそれを優先させてしまうような所があるからそれだけでもましと言える。

それにしてもこんな照明の少ない場所でよく字が読めるものだと何時もながら義文は呆れてしまつた。その癖視力は良いらしく裸眼で全く問題ないというのだから不思議なものである。

「今お茶を持つて行きますから上に上がつていて下さい。それに片付けがあるのでしたら私がやつておきますが」

「あー、いいよ、いいよ」

言い掛けたが途中で遮られた。特にする必要は無いらしいがこの店での仕事と言えば片付けくらいなのである。やむことは結局変わらない。

那葵は持つていた本を長椅子に放ると独特の軽やかな足取りで部屋を出て行く。

気だるげにしている時でさえこの歩き方は変わらない。足音が無い訳ではないのに、地に足が着いていないのではないかと言う程に重力を感じさせない歩き方をするのだ。それは独特だが綺麗な歩き方だと義文は思う。

那葵の後姿を見送ると、拾った本をテーブルに乗せ、義文も部屋を後にした。

「丁度良かった。義文すぐに出るよ」

お茶を準備をして店に上がるとき唐突にそう言われた。まだ床下から顔しか出していない。お茶を入れてきたのも無駄になってしまったようだ。

言い終わるや否や那葵は立ち上がり、すぐにでも出掛ける姿勢である。臣広もそれに続くが、こちらは苦笑交じりで肩を竦めている。一応義文を気遣ってくれていてるといふ事なのだろうが、状況がよく飲み込めない。

「あの何処に行かれるんですか？店もあるし、私は残つても構いませんが」

「いや、義文にも居てもらわなくつちゃ困るんだ」

那葵の声や表情は何時もと変わらぬ穏やかなものだつたが、義文は何處か含みがあるような気がした。ただ単に錯覚かも知れぬし、自分が必要とされていると言う事は今までの経験上、つまり力仕事があると言う事だとすぐに判つたから、そのせいでもう感じてしまつただけのかも知れない。

兎にも角にも義文は付いて行くしかないらしい。既にドアに手を掛けている那葵を追つて、先程着いたばかりの店を出る事になった。臣広の運転で向かつた先は先日訪れた西方邸であった。道中殆ど無言で目的地さえ教えられなかつたのだが、途中から大体の方向でここへ向かうだらう事は検討がついた。

「那葵さん、意外にお早かつたですね。私はもうとのんびりしてらっしゃるのではと思っていたんですけどね」

玄関先で出迎えてくれたのは要である。今日見ても狐の様な顔だという印象は変わらなかつた。

「義文がもう一寸来るのが遅ければ遅くなつてたかも知れないけどね」

擦れ違ひ様にそう声を掛けると那葵は一人でどんどん中に入つて行つてしまつた。臣広と義文は一応玄関先で儀礼的な挨拶を済ませると、那葵の後を早足で追う。

真つ直ぐに向かつた先は先日も訪れた那葵のコレクション部屋だつた。片付けてそれ程経つていないはずだつたが、既に新たな品物がぽつぽつと溜まり始めている。

その中には臣広が描いたあの奇妙な絵も混じつていた。白と黒の油彩画である。なんだかそれは卵蔓庵で見た時とは微妙に異なつているようにも感じた。照明の効果というのは意外に大きいものだしそのせいなのかもしね。だが

「確かにこれは私の描いた物ですが　あの頃とは違つています」

臣広はそれを瞬きすら忘れたように見入つてゐる。握り締めた拳が微かに震えている様な氣さえした。義文は再度その絵を見てみるが臣広が感じているだらう程の変化は見極められなかつた。臣広が確かに、と言つていいという事は、那葵からこの絵の変化を知らされて見に来たのだろう。つまりそれが目的だったようだが、義文をわざわざ連れてきた意味が無い。それとも何か他に用があつたのだろうか　義文は疑問を抱きつつも恐らくそれが妥当な線だらうと

思った。

相変わらず臣広は絵に見入っているし、那葵や要もその様子を伺っている。だが、元より美術的センスが皆無の義文は、絵の変化に関して考える事はすぐに放棄していた。作者である臣広は微細な変化にも聴くなるのかも知れないと思つたが、何故皆がそこまで関心を持つのかがいまいち理解出来ない状況で、ただ今は傍観者でいる事しか出来ない。

「まるでドリアングレイの肖像のようだね。勿論あれはフィクションだけれども、これは現実だ。しかも目に見える速度でこれは変化を続けているんだよ」

那葵は何時もの顔で絵を眺めながら楽しげに言つた。

「現実　これが夢で無い事は私も承知している。夢の様な気もあるが、私はこれをどこかで予感してもらいた。ただそれはただの錯覚であるべきだつたし、その錯覚こそこの絵の価値だった。それが錯覚でなくなつた今、これはその価値を失つている」

臣広の声から動搖は消えていた。握り締められた指も開かれ、徐々に赤みを取り戻していた。

「僕も分かつていていたんだよ。正直に話すと初めて見た瞬間からこの絵は動き始めていた。ただそれはきっと僕にしか分からなかつたのだろうね。だつて、これは余りにも僕に近いから」

那葵は最初に小さく笑い、その微笑を貼り付けたまま、最後には微かに目を細めたような気がした。

義文は幾ら目を凝らしても絵の変化等は分からなかつたし、那葵の言つている意味が理解出来なかつた。那葵の言葉は何時も何か含みがある様でいて、空っぽの様な感じがする。それに真つ直ぐな言葉の様でいて実は複雑に入れ組んでいるから、義文には真意や意味が分からぬ事は珍しくない。

臣広も今回はその点で義文と同じ意見を持ったのか、微かに眉を顰めると那葵に向かつて口を開きかけたが、言葉になる前に遮られてしまう。

「始め、臣広がこれにタイトルが無いと言つただろう？臣広は大抵タイトルをつけないが、この場合それが一番正しいと思つたよ。『裏』と言つたのはね、これが僕の裏だったから。否、ある意味では表だけね。他にも色々呼び方はあるけど、まあ適当に選んだ訳さ」

その視線は絵を見る訳でも、他の何かを見ている訳でも無く、既に三次元の世界にはない様な気がした。人間は三次元までしか認識出来ないと言うが、きっと那葵にはそれ以上のものが見えているのではないだろうか。那葵の言葉は相変らず理解出来なかつたが、それで良いのだと妙に納得してしまつ。人の気持ちを感じる事が出来ないのと同样是同じなのだ。人の好みがそれぞれ違う事と同じような事だ。

実際、赤だと思って認識している色を、他人も赤だと言つたからといって、それが自分とその人に見えている赤が全く同じである保証にはならないのだ。また、そういう可能性が絶対に在り得ないと言つ事も出来ないだろう。

だから那葵が見ている世界が分からるのは当然である。だが、胸に広がる何とも言えぬ落ち着かなさは何なのだろうか 少なくとも那葵に対しての悪感情ではないが説明することは難しい。

「それはどういう意味だ」

「臣広の声は抑えられてはいたが、内心の戸惑いを如実に表している。この状況では無理もない」

「意味つて言つてもそのままなんだけどな」

そう言つて笑う那葵は相変らず見る物を惹き付ける魅力を持つている。安心感さえ与えてくれる。

だが、この状況には不自然だろう。幾ら那葵の平素を知つてゐるとはいへ、こんな風にはつきり感じるのは初めてだった。

「分かつた。君がそう言つのならそうなのだろう」

一瞬何かを言いかけて止め、結局はそれだけ言つと臣広は肩からふつと力を抜く。それは努めてそうしたのかもしれないが、義文には納得出来なかつた。

しかし、義文が口を挟めることでもない。無意識に上げた手を空中に僅か彷徨わせ、そして下ろした。

「彼は？」

那葵は既にこの話は終わつたとばかりに話題を変えている。彼とは誰なのだろう いつもならそう思つところだが、今は臣広の様子の方が気になつてしまつた。如何思つてあれで納得したのか無性に聞いてみたくなつた。

「いえ、まだ戻られていません。昼までには戻ると思いますが」要がそう答えると一人は部屋を出でていつてしまつ。喉が渴いた、と那葵が言つたからである。勿論義文と臣広にも声を掛けられたが臣広がもう少しここに居ると言つたので義文も残つたのだ。

「あの 一つお聞きしてもいいですか？ 嘉山さんは那葵さんのあの言葉にどんな意味を見出して納得されたのです？」

無言でじつと絵を見つめている臣広におずおずと声を掛ける。今こんな質問をするのは酷く無遠慮ではないかとも思ったが、聞ける機会はそうそう無いだらうとも思ったのだ。

「意味は分からぬですよ。納得もまだ出来ていないのでもしかねい」

それは一言一言を噛み締めるような話し方だつた。

「では何故？」

「私はこれでも絵描きの端くれだ。正直絵に関してはそれ程詳しい訳でもないが、それでも何故絵を描くのか、その気持ちは理解しているつもりです。少なくとも自分が絵を描いている理由は分かつています。 何故描いていると思います？」

臣広は少し考え込むようにしてから唐突に、義文を見てそう問い合わせてきた。その表情に先程までの困惑などは感じられない。

「自分の見た世界を伝えたいからでしょうか？」

僅かに考えてからそう答えた。

「そうです。恐らく全ての画家の思いにそれは共通していると思いまます。私も変わらない。でもその手段が必ずしも絵である必要は

ないと思いませんか？美しい文章でその世界を表現する事も音楽で人々に一つの世界を見せる事が出来ます。才能云々はまた別の問題としてもやううと思えばどんな手段も用いる事が出来るでしょう。だけど私は絵でしか表現出来ないんです。そしてそれを説明しようと言われても出来る物ではない」

義文はそこでああ、と納得した。つまり言葉では表現出来ないものがあると言いたいのだろう。出来たとしてもそれは何処か変容してしまう。だから感じるしかないかも知れない。

臣広と並んでその絵をじっと見つめてみる。やはり何処が変わっているのかは分からなかつた。

「既に意味は集約されているということですね」

全く意味など掴めそうにもなかつたが、眺めて気分の変化があつたのならそれが意味という事にもなるのだろう。

「どうなのでしょうね。なんだか分からなくなつてしましました。私が描いた絵だけれど、今はそう言つていいのかも良く分からぬ。最初に込められた意味も変容してしまつた　いや、元々意味を込めて描いた訳じゃない、そんな気さえします」

そう言つて笑う臣広の顔は困つてゐるようでもあり、清清しさも含んでゐるようであり、受けた義文は少々戸惑つてしまつ。

「ああ、えつと・・・私にはやはり絵を描く方の感覚は分からぬですし、絵を見てその意味を感じ取る、ということもよく分かりません。それでも初めてこの絵を見た時分からないながらも惹きつけられる様な魅力は感じました。強い想い　というのでしょうか、そういうものがあつたからこそその魅力ではないか、私はそう思います」

自分でも何を言つてゐるのかよく分からなくなる。励ますつもりがあつた訳でもないが、何か言わなければいけないと感じたのだ。

ただ言つたことは嘘ではないとも思つ。

「そう、ですか。そう言わると確かに強い想いは持つていたような気がします。ずっと私の中にあつたビジョンだつたのですから。

ただ完成した、と思つてもそれはそのビジョンとは異なつてゐるようにも感じたんです。そして、那葵のようだと思つた。頭の中にあつた時はそれが那葵のようだと感じたことなどなかつたんですけどね」

臣広は何処か遠くを見ているようであった。若しかしたらこの短時間のうちにすっかり意味を見出してしまつたのかもしれない。義文がなんと答えたものかと逡巡していると更に臣広が言葉を繋ぐ。「ドリアングレイの肖像は悪行を重ねる毎にその姿を醜くしていつたらしいですが、この絵の場合はまるで　万華鏡のようだと思いませんか？」

そう言つて微笑む姿はまるで新しい価値をその絵に見出したかのようだった。

義文は再度絵を眺めてみる。やはり変化は分からなかつた。ただ、この絵の渦がぐるぐると回る様子を想像してみると確かに万華鏡のようだと思う。どこか禍々しくも見えるのにその渦の微細なタッチが美しいとも思つ。

「きっと本質は何も変わつていらないからなのでしょう」

これは那葵に対し、また絵に対して自然に出た言葉であった。何時の間にか意識の奥底で一つは離れがたく結びついてしまつたのかもしれない。

「そろそろ私たちも行きますか。店ではお茶を飲みそびれましたので少々喉が渴きました」

最後にもう一度絵を見つめると、臣広がそう言つて踵を返す。義文もそれに続き、無造作にがらくたに紛れた那葵の『裏』を残し障子を閉めた。

重く軋んだ音を立てる廊下を歩きながら、次見た時は変化が分かるだろうか、そう思つて今見た絵の様子を再度思い浮かべてみたが、既に細部は朧氣である。結局義文はその変化に気付くことは出来ないのかもしない。

臣広の背中を見る。ぴんと伸びた背中は凜としている。迷う様

子もなく廊下を歩いていくところから察するに、この家には何度も訪れているのだろうと思われた。

「嘉山さんはこちらにいらっしゃる事も多いんですか？」

何となく黙つているのが嫌になつてそう声を掛ける。広い屋敷内では部屋から部屋への移動もそれなりに時間が掛かるのだと、義文は先日西方邸を訪れた際には初めて実感として知つた。

「いえ、それ程多くはないですよ。大体は店に赴きますかね。那葵は大抵そちらにいますから。こちらに来るとしたら那葵に連れられて来るくらいのものですよ。それでも那葵はある通りですから自然と屋敷内の間取りにも詳しくなります」

恐らく義文が考えていたことを察したのだろう。聞かなくともそういう説明をくれた。

「はあ、そんなものでしようか。私は先日一度來たきりですが、とても慣れそうにはありませんよ。いつもこの屋敷自体馴染みがないので」

自分が慣れる日は来るのだろうか、と思うが今迄の経緯を考えればさして時間も掛けられないものなのかもしれない。

「ああ、丁度良かった。今宗之さんがいらした所です」

臣広が襖に手を掛けたところで丁度中から開かれる。十中八九義文ならぶつかつていただろうと思つたが、要は全く慌てた様子もなくそれを避けた。

「彼つて宗之さんの事だったんですね。今迄名前は何度も聴いていたけれどお会いするのは初めて」

不自然に言葉を切つた臣広の視線を辿ると、理由を理解する前に義文も同じように息を呑んだ。

「初めてまして。宗之です」

すつゝと立つて目の前に立たれると更にその驚きは大きくなる。何故ならそれは義文と瓜二つだったからだ。

それは義文自身がそっくりだと感じる程に似ていた。髪形や服装、体への装飾は義文とは全く異なつているが、それでも鏡でも見てい

るよつた錯覚に囚われる。

「いや、余りにも長坂さんに似ていたものだから吃驚してしまつて。世の中には他人の空似つてあるけれども、こんなに似ている事もあるんだねえ」

心底吃驚したといった様子ではあつたが、臣広は早々に状況を受け入れてしまつたらしい。興味深そうに一人の顔を見比べた。

「ええ、私も吃驚しました。こんなに似ている方つているんですね」義文は少し遅れてそう言つた。吃驚はしたが、自分に似ている人物と巡り合える機会など稀有なものだろ。僅かな戸惑いと照れ、嬉しさが絹い交ぜになつた気持ちである。

二人とも僅かに遅れて自らも名乗ると、裸前で立つたままになつていたことに気付き、室内に腰を下ろした。要もそつであるが、宗之も和室には余り馴染まない人物のようである。

「義文に会わせたかつたんだよね。吃驚するだろうと思つて」

那葵はそう言つて笑つた。如何やら義文はこの為だけに連れて来られたらしい。

「那葵さんは本当に人が悪いですよね。いやあ、それにしてもそつくりだ。声まで非常に似てゐるし、まるで双子のよつですね」要もそつ言つて笑つてゐる。

部屋の中にはお茶を運んでいたらしい結衣香もあり、義文と宗之を見遣つて無邪気な顔で笑つてゐた。こちらも事情は承知していたようである。

「本当ですよ。一瞬ドッペルゲンガーという奴を見たのかと思いました。でもなんと言つか新鮮でもありますね。私は宗之さんのような格好もした事がないですし、自分の変身した姿を見ていると言つか

「ああ、こんな風に言つてしまつては失礼ですかね」

確かに自他ともに認める程似てはいるが、今日会つたばかりの相手である。そう明け透けに自分と比較してしまつては失礼だろうと思つ至る。こんなにも似てゐる人物に奇妙な縁を感じてゐたのかもしない。悪印象は持たれなかつた。

「いえ、私もそんな風に思いましたから。少々懐かしい感じもした
くらいです。体を色々弄り始めてから久しいですからね」

宗之は姿、声こそ義文にそっくりであったが、話し方や表情はま
るで違つた。まだ僅かな時間しか共有していないが、その間一貫し
て無表情であり、声に抑揚すら乏しいのである。

一卵性双生児は育つた環境が違つてもある程度趣味や性格は似る
と言つが、他人の空似では当てはまらないのも当然だ。そんな些細
な発見を面白いと思いつつも少々寂しくも感じる。

「あの……それはスカフイリケーション、インプラントですか？」
その臣広の視線は腕から覗く傷跡と妙に盛り上がった箇所を見て
いた。タトゥやピアスは分かるがそれ以外は義文の知識にはなく、
なんと呼ぶのかは分からなかつたが、よく見ると首筋にも明らかに
故意に付けられたような模様の傷がある。

「よく知っていますね。若しかして嘉山さんも興味があありますか
？」

答えたのは要だつた。狐顔が楽しそうに笑つてゐるよう見える。
「興味はあります、自分でやろうとは思いませんね。私は痛いの
が苦手ですから」

臣広はそう言つて苦笑した。確かに見るからに痛そうではある。
「これは要さんに施術して頂いたんですよ」

「えつ、要さんがですか？」

宗之の言葉に驚きの声を上げたのは臣広である。義文も驚いたと
言えば驚いたのだがいまいち仕組みが理解出来ていない。

「私の本業、ですかね。那葵さんを介してこういった仕事を受け持
つてるんです」

それに驚きの声を上げたのは今度は義文だった。

「那葵さん！ そんな仕事なさつてたんですか？」

「あれ？ 言つてなかつた？ 仲介屋みたいなことしてゐるつて言つたで
しょ」

座卓の上にだらりと伏せていた那葵が幾分顔を上げてそっけなく

答えた。その様子は何を今更、といった感じであるが詳細な事等何一つ聞いていないし、そんな素振りすら見た事がない。

ただ那葵に聴くだけ無駄な氣もして溜息を一つ吐くと要に向き直つて尋ねる。

「あの、具体的にどんなお仕事なんでしょうか？私には馴染みが無くて皆さんのお話もよく飲み込んでいません」

正直にそう吐露する。

「無理もないですよ。興味がなければ一生関わる事もないような世界ですからね。まあ、ピアス、タトゥなんかは今時珍しくもないのを見れば分かると思いますが、インプラントやスカフィリケーションとなると実践している方も少ないのでし、目に見る機会は中々ないでしょ。インプラントは歯科の治療でもその名は聞くことがあります。治療目的ではなく異物を体内に埋めるという事ですね。スカルフィリケーションも同じで傷で描くアート、といったところですか。メスを使って傷を作ります。こういったものは身体改造として一括りに出来ますが、他にも様々なものがあります。例えば火傷で模様を描くとか　まあ私は主にピアッシング、タトゥ、インプラントとスカフィリケーションといった施術を行っているのですが要の話は確かに興味がなければ一生関わらない世界の話だと思った。怖い物見たさ、というのはあるが、何故そんな事をしたがるのか義文には理解できないし、聞いているだけで体が痒くなる気がする。

「大体分かりました。でもバンドも忙しいでしおうに大変そうですね」

これ以上詳しい説明は余り聞きたくなくてその話題を逸らす。そんな義文の真意を汲み取ったのか要は微かに苦笑したようだつた。「ええ、ですから本業とは言いましたけど、ごく限られた人達にしか行つていません。那葵さんを介してやつてきた人のみを相手にしているんですよ。最近は忙しかつたのであまり力を入れられなかつ

たんですけど　「どうやらそろそろお客もありそうですから暫くは本業に掛かりきりになるかもしないんですけどね」

細められた田は綺麗な三日月型だと思つ。そんな感想を抱いた位で既に要の仕事には余り興味を覚えなくなつていた。

「はあ、では那葵さんの仕事のパートナーといったところなんですようかね。でもそう考えると余計に私は、本当に片付け要因として雇われただけって感じがします」

勤め始めてからは片付けしかしていなかつたし、他に仕事らしい仕事もあるようには見えなかつたのだから今更ではあるのだが些か虚しいような気持ちになつた。

「ふふ、そんなこと無いですよ。那葵さんの立派なお世話係をして下さつているとお聞きしています。那葵さんはこちらには気が向いたときにふらりと戻られるくらいですかね。長坂さんのような方がいて下さると安心だと姉と一人で話しておりましたのよ」

それまで成り行きをただ楽しそうに眺めていただけだつた結衣香がそのまま声を掛けてくる。澄んだ明るい声は一気に場を華やかにした。

「そう言って頂けると励みになります」

義文より年下の女性だが、結衣香の方が余程成熟していると思つた。姿や声仕草等はまるで少女のそれだが世間知らずなお嬢様、といつた印象は受けない。

「男性嫌いの姉が男性の方を褒める事なんて滅多に御座いませんのよ。もつと自信を持つてもいいくらいですわ。ねえ那葵さん？」

「ああ、あの小枝子が男を褒めるところなんて今まで見た事がないからな。僕もお墨付きをあげるよ。実際義文を雇つて良かつたつて思つているしね。僕の宝物を眺めていられる時間が増えた」

最後は心底嬉しそうな顔で付け加えられる。恐らく最後の一言に那葵の本音が全て詰まっている物と思われた。

「そうですか、それは良かつたです・・・」

人の役に立てるというのは嬉しい事だ。だが、那葵が喜ぶのと比照して義文の仕事も増えるという事なのである。心中複雑な気持ち

になつた。

何故涙が出ないのだろう。百合絵は白く昇つていく煙を眺めて不思議に思つた。

悲しくない訳がない。遣り切れないような想いもある。だが、自分の感情なのに何処か他人事のようにしか感じられなかつた。

真美が死んだ。

正確に言えば殺された。相手は百合絵の知らない人物だつた。バイト先の客だつたらしい。

真美はバイトでホステスをやつていた。忙しく、何かと金も掛かる服飾の専門学生には都合の良いものだつたようである。

百合絵は水商売に偏見はないし、寧ろ相手を楽しませ満足させる仕事だと、それが出来る人を尊敬してもらつた。だから真美にこのバイトの話を聞いた時はいろいろな体験談も聴いたのだ。

ただ、この客の話題が出てくることは無かつた。もし何かあつたのなら愚痴を溢す位はあつたのではないだろうか。それとも、百合絵に言う事でも無いと思われたのか　今となつては分からない。

百合絵にとつてこの訃報は日常という直線上に余りにも唐突に突き刺さつてきた事件と言つて良いだろう。

報道された加害者の男の顔は正直百合絵の嫌悪感を刺激するには充分だつた。それは殺人を犯した者であるという先入観が余計助長させたのだろうが、所謂生理的に受け付けないと感じるタイプの人間だつた。

清潔感が無くべつたりと額に張り付いた脂ぎつた髪の毛、着用しているのはステッツだつたが、それもサイズが合つておらずよれよれというのが見て取れる。

よく真美は愛想良く相手を出来たものだと思う。百合絵なら笑顔を向けようとしてもそれは引きつったものにしかならなかつただろう。

真美は暫く前からその男に気に入られていたらしく、シフトを入れている時はほぼ来店していた程だという。店のオーナーも余り良い印象は持つていなかつたらしいが、これといって大きな問題があつた訳でもなく、寧ろ普段は静かなもので、特に注意しなければいけない人物とも思つていなかつたらしい。

それがこんな事になるなんて そう言つて取材に応じていたオーナーの様子を白々しいと思つてしまつたのは百合絵の見方が斜めだからなのだろうか。違うと否定出来ないし、実際こういう事件とは予測出来ないような所からひょっこり起きてしまうものなのかもしけぬが、そう思つたところで気持ちは変わらなかつた。

火葬場というのはなんだか工場みたいだと思う。

犯行発覚が殺人が行われた翌日。身元が判明したのはそのまた翌日。犯人逮捕がまたまた翌日。結局漸く落ち着いて葬儀を執り行えたの真美が死んでから一週間以上経つてからだつた。

そして今正に真美は灰になつてゐるのだろう。アプリコット色の髪の毛も綺麗にネイルされていた爪も一緒に灰になつてしまふのだろう。

なんだか不思議な気持ちがした。

工場と思つたのはただ煙突があるといつ理由だけではない。内部の様子も随分機械的な流れ作業で、人間だつたものを灰に加工している、そんな風にすら思えたからである。

こう思うのは不謹慎なのかもしれない。ただ、それを言つならそう思わせてしまうそのシステムも問題があるのでないだろうか、そんな風に聊かずれたところで思考を働かせた。

死んだら何処に行くんだろう。ほんやりとそんな事も考えた。

生前の姿をよく知る人がある日突然に死んでしまうと死というものがぐつと近くに感じられる。しかもそれが正に思いも寄らぬ方向から齎されたのなら尚更だ。

一緒に時間を共有して、お互いの言葉で意思を通わせあつたのはついこの間の事だ。一緒にGaleeのライブに行ってその世界

を一緒に堪能したのも記憶に新しい。それを思うと不思議な感覚は益々強くなる。

あのライブで感じたあの世界が、若しかしたら肉体から開放された世界にあるのではないか そんな風に考えた。

若しかしたら真美はその世界の住人になれたのかもしれない。

少し羨ましいと思つた。

この世界の様々な柵から開放されて真美はきっと無になれたのではないだろうか。意思を持たず、個という觀念も無く、ただただあの世界を形作る構成物質の一つになれたのではないだろうか
酷く心が逸つた。自分もそこに行きたいと思つたが、死にたい訛じやない。否、ある意味死にたかつたのかもしけなかつたが、酷く前向きな気持ちでそう思つのだ。そこに求めている世界があるのだ
と。そう思った時の感動はとても言葉で言い表すことは出来ない。
そして己の肉体が酷く邪魔に思えた。

不意に宗之と呼ばれた青年の姿を思い出す。

本の僅かに会つただけであつたが、彼には好感を持つた。恐らく外見だけなら近寄りがたい部類に入るだろう。世間一般では、その外見が特徴的な場合、自分とは感覺が違うと身構えてしまふ部分が少なからずあるからだ。百合絵も勿論例外ではなく、だが、彼の持つていてる感覺に興味を持つた。

ただ、その時はそれだけで、特に今迄深く考へえることもしなかつたのである。それが何故か今になつて彼のことが少し分かつたような気になつた。

肉体を消滅出来ないのなら少しでも理想に近い形にする。つまりはそういうことなのではないだろうか。結局この世界では実体が全てである。だとしたらその中で最大限理想を表現しようとするのは至極当然な流れのように思える。

それで例え生き難くなつても きっとそれは些細な問題でしかないのだ。引き換えに理想世界へ近づけるのだから。
羨ましい。

真美も宗之も羨ましい。

百合絵もいつか死ぬ。そしたら真美と同じになれるのかも知れない。だが、そんな何時だか分からぬ先の事を考えて誤魔化せる欲求ではなかつた。かと言つて百合絵は宗之のように一步を踏み出すことも出来ない気がした。

覚悟が足りない。所詮甘えなのだ。そう言われてしまうかもしない。或いは本当にそのかもしれない。だがきっと百合絵が宗之のようにしたところできつと満足は出来ないのだとも思うのだ。答えが出ない。欲求ばかりが募つて出口が見えない。苦しかつた。何かしないと発狂してしまひそうだ。

だがそんな内側とは裏腹に、表情は固まつたように変わらないし、動きも酷く緩慢だつた。内側で暴れる濁流をなんとか押さえ込もうとしているのかもしれない。

G a11e yのライブに行きたい。

ぼつとそんな考えが浮かぶ。一度そう思つと、募つた欲求は一気にこの明確な形の欲求に取つて代わつた。

「那葵さんは嫌になつたりなさいませんの？」

西方の屋敷、珍しく那葵が一人で屋敷に戻つて来ていた。

「何がだい？」

縁側に腰を掛け、庭と丸い満月を眺めている。気温は随分と低かつたが、良くなじれた空に満月はくつきりと姿を見せていた。

「はあ・・・これだもの。私が伺いたい事くらいお見通しでしょうに」

小枝子はそう言つて傍らに座つた。辺りは真つ暗であるのに月の明かりの為なのか、二人の姿は淡く発光しているようだつた。

「そんなこと無いよ。うーん、まあ聞きたいのつて僕の趣味のことかな？」

小枝子はそれに白々しい、といったように眉を顰めた。

「そう嫌な顔しないでよ。別にわざと聞き返したわけじゃないよ」

那葵は小さく笑った。小枝子は益々眉を顰めた。

「全く、貴方という人と一緒にいると飽きませんわね」

「気の休まる暇が無い　って言いたいんじゃないの？」

「まあ良くお分かりになりましたね」

小枝子はそこで少し表情から力を抜いた。

「僕はのコレクションと一緒にだよ。あれは皆から見たらがらくた、なんて思われていろけどね、僕にとつては宝物なんだよ。もつと言えばがらくたのように見えるからこそ宝物に成り得るってところかな」

「あら、私にも分かりやすいように仰ってくれているのかしり」

小枝子は目をゆっくり細める。那葵は横目でその様子を見やつた。
「別に他意はないんだけどなあ。がらくたに見えるってことはさあ、完全じやないって事だと思うの。それが全く機能的ではない、役立たないって物かな。どつか壊れてたり、全く無意味な品だったりさあ、それ無くともいいんじゃない？的な、ね」

「まあそのでしようね。だからがらくただと思つたら私は見向きもしませんわ。那葵さんが集めていなかつたらがらくたといふ言葉を与えることすらしなかつたかも知れませんね」

縁側から下ろした那葵の片足がゆらゆらと揺れている。白いその軌跡が残つた。

何かをかき回したのかもしれない。辺りの空気が変わる。

「ふふ、そうだねえ君ならそうだろう。寧ろ近くに僕が居て、君にがらくたと意識させてしまつた事は僕のお気に入りのがらくた達にとって災難だったかもしれないねえ」

「否定はしませんわ。それに名前が『えられた』ことで私の中で少し意識して部分はやはりありますもの。でもそれを言うなら私にしても災難ですわ。きっとお互に閑わらなければ一番良かつたでしょうに」

「うん、でもそれじゃあつまらないとも思わない？平和過ぎるのは

ねえつまらないんだよ。少しくらい起伏が無くちゃあ。だから争いは消えないんだと思うよ。だつてなくなつちゃつたら生きている意味がないつてくらいにつまらなくなるだろからね。これは感情の表れでもあるし、皆が感情を失わない限り争いはなくならないんだよねえ、きっと。そして多分それって本末転倒だと思わない？」

首がかくつと傾げられた。

「確かに分からなくてははないですわ。だけど、私はそれでも関わりたくないかったわね。つまらなくて平温で怠情な世界で私は充分に満足出来る。元々そういう存在なのですから」

小枝子はじつと虚空を見つめた。月を眺めているようでいて、実は光りの粒子の一粒一粒を観察しているような、そんな目付きである。

「それでも君も独りは嫌なのだろう？君の大事な子供達を手放すつもりはないだろうに」

「独りが嫌なわけではないですわ。だけどあの子達は私を必要としている。そして私にとても似ている存在ですからね。一緒に過ごす事はとても自然な事なのですわ。彼女達は私という本体があつて始めて生きているとも言えるのです。私と一緒にいる事は魚が水の中でしか生きられないのと同じくらい当たり前のことなの」

「本当にそうなのかなあ。僕にはよく分からなければどもね、慈しむという気持ちが。恐らく君のそれはそうなのだろう？」

那葵は再び足で闇を搔き回した。白い軌跡が残る。

「さあ、どうなのかしらね。私にも分からないですけれど、自然に溢れ出でてくるものですから特に名称等必要ない気がします。貴方と同じよ」

小枝子はそこで那葵を見て笑った。暗い赤を乗せた唇が薄く引き延ばされた。

「そうだったねえ。ただ、そんな事すら普段の僕は忘れがちだね。言われて、ああ、そうだと気付く。其れだけ僕は本質を表せているつことかな？いや、そもそも表すというのも僕にはおかしな表現

だね」

那葵はそう言つて笑つた。言葉は何處か台詞めいていた。

「楽しそうですね。でも私は貴方のそんな遊び心が理解できないの。要の前でやられた方がよろしいんではなくて」

「要はどんな話をしても同じ様な態度で　僕としては退屈なんだ。しかも彼は意外にも真面目だからね。下手をすれば僕の仕事を増やされてしまいかねない。僕は遣りたくない事は遣らないけれども、彼の持つてくる仕事は遣らざるを得ないものばかりだ・・・」

那葵は後ろに手を突いて、天を仰ぐと大きな溜め息を吐く。

「要是本当に貴方が遣りたくない事などさせませんわ。いつも貴方が第一ですもの。全て貴方の一番の望みの為にやっているんでしょう。それくらい分かつてらつしゃるくせにわざとらしいですわね」

小枝子はそう言つて呆れる様な仕草で少し笑つた。

「え～でも、たまに嫌がらせなんじゃないかって思う時あるのは嘘じゃないんだけどなあ。世貴の事もあるし、まあ仕方ないんだろうけどねえ」

「ああ、そうよ、貴方には世貴もいるじゃないですか。あの子は貴方にとつての私の子供達と同じ様なものではなくて?でも　たつた一人という点では分身といった感じかしら?」

「世貴は別格だよ。分身・・・というよりも一つの僕と言つた方がしつくり来るかな。まあある意味子供のようだとも言えるけど」

そう言つて肩に顔を埋める様にして目を伏せる。

「ふふ、那葵さんにそういう方がいらっしゃって本当に良かつたわ。私、まだ世貴が居なかつた時には貴方とは永遠に分かり合えないような気がしていたけど　今はそれが少しだけ共有出来る部分があるかもしれない、そう思つておりますのよ」

「おや、嬉しいねえ。君にそんな風に言われたのは初めてだつたんじゃないかな」

「あら、そうでしたか?では少しそい過ぎたかもせんわね」

目を細めて笑う姿は闇夜に青白く、何故か益々くつきりと浮かん

だ。

「あ～ああ、やつぱり君はそういう性質だよね。まあだからこそ僕は面白いと思つていいんだけどさ」

そこで那葵はそのまま「いろいろ」と横になつた。ひんやりした床と那葵はまるで同じ物質のように同じ温度で馴染んでしまう。

「ねえ、君の子供達に一人加えてあげたい子が居るんだ。多分ね、僕なんかより君の方がその子の求めている物を持っていると思うのね」

「まあ、貴方がお勧めするなんて珍しいわね。だけどその田は信用していますから、大歓迎ですわ」

小枝子はそう言いながら軽くその細い顎を手の甲でなぞつた。滑る様な動作である。

「そう、良かった。　ねえ、もしさあ、義文だったら君は受け入れるかい？」

那葵は一瞬考え込むようなふりをして、何とも面白い事を思ついたというような表情をした。

「長坂さんは無理だと分かつておいででしちゃう？確かに私も彼の事は珍しく気に入つておりますが、かといって私と同一化出来る方は御座いませんわ。ただ少しまとも、というだけの男性なのですから」

小枝子の瞳は硝子玉のような輝きで持つてその記憶の姿を見ているようだった。

「だよねえ。まあもしも、を想像してみたら面白いなあつて思つてゐる」

「もしも彼が加わつたらですか？それでは均衡は崩れてしまいますわ。待つのは分離と壊滅でしじうね」

「本当にそうなるかな？あとで、もしそうなつたとしてもさ、それつてそんなに駄目な事だと思つ？」

那葵はごろりと体を転がすと上田遣いで小枝子を覗き込んだ。

「また可笑しな事を考えていらして？お願いですから私の事は

そつとしておいて下さいな。先程おっしゃっていた方はお預かりしますが・・・それ以上は関わりをお断わりさせて頂きますわ」
聊か呆れたような、うんざりしたという表情と聲音だったが、僅かに困惑も含まれているようだつた。

「そう。わかつたよ。あ～ああつまらないなあ」

そう言いながらも何処か楽しそうな那葵の様子はやはり月夜に、それ自体が発光しているように、ほつきりと姿を浮かび上がらせていた。

「那葵さん、そろそろ戻りましょう」

そこに音もなく、まるで闇から生まれた様にして要がやって来る。気配すら感じさせない動きだが、那葵と小枝子に驚く様子もなかつた。

「今日はこっちにいたいんだけど」

「いいえ、駄目です。本日はお戻り頂かなければ。ほり今日は田立ち過ぎます」

要是闇を撫でるようにして、離れた場所から那葵の輪郭をぼかした。微かに歪んだ様な景色に、それでも相変わらず那葵はくっきりとそこには在つた。

「要、今日は、ではなく、今日も、の間違いだひつ。君はいつもそういう言つ世貴は如何したの？」

那葵億劫そうに体を起こすと、仕方がないと立つて立ち上がつた。酷く氣だるげであるのに妙に軽い動作でもあつた。

「世貴も戻つておりますよ。那葵さんを随分お待ちです」

「そうなの?じゃあ早く行つてあげないと可哀想だね」

那葵の足取りはあるで重力を感じていなかのよつに軽やかである。実際地面からそれは僅かに浮いているようにさえ見えるほどだつた。

「要是那葵の世界が明確に見えているのよね?それはどんな世界なのかしら」

小枝子は那葵の姿を見送りながら何気なく聞いてみた。

「さあ、もしお知りになりたければG a11e yのライブにでもお越し下さい」

要は慄懾な仕草で大きく腰を折る。

「嫌よ。私にはあの音は耐えられませんわ」

小枝子の白い眉間に皺が寄る。

「つまりそれが答えですよ。小枝子さんにとっては耐え難く嫌悪する世界。それだけ分かれば充分でしょう」

細い瞳が更に細まり、それは微かに黄色く光った。

「確かにそうね。愚問でしたわ」

「では私もこれで失礼致しますね。小枝子さんも今日は早めに戻られた方が宜しいのではないか?」

「貴方に言われるまでもないわ」

一度大きく息を吐いた小枝子は、そのままその場から立ち去った。彼女の動いた残像が細かい粒子となつて当たりに散らばっていった頃、要は自らも元来た闇へと引き返した。

闇は深く、月は雲に隠れ、発光する物もなく、ただただタールのような重苦しい黒が深く深く辺りを覆う。

「数年前の事です」

宗之は確かそう切り出したのだ。

「もつと昔ではないのですか?」

そう問われると、確かにそうで、何故自分が数年前等と言つてしまつたのか不思議に思った。

「そうですね 二十年以上前になるようです。私は老夫婦の家に引き取られました

「貴方はその時お幾つでした?」

「まだ物心付く前です。まだ一歳にもなつていなかつたかもしません。私の本当の両親の事は一切知りません。顔も勿論覚えておりません」

はつきり言つてしまふと、宗之は本の数ヶ月前迄毎日のように顔を合わせていたにも拘らず育ってくれた老夫婦の顔すらはつきりと思い出せなかつた。

「ええ、それは仕方がないでしよう。人の記憶等そんなものです。ですが思い出せない所に確りと記憶されたりもするのですよ」「そこで相手はにんまりと微笑んだ。

「では、私の持つてゐるビジョンは若しかしたら何処かで実際に見た光景なのでしょうか」

「さあ、どうなのでしょうね。でもそういう事ですよ。その可能性も十分に有り得る。貴方が単に忘れているだけで、確り何処かに刻まれてゐるからこそ貴方にはそのビジョンがとてもリアルに見えているのかもしねい」

「やはりそれが私の求めていたものだから見えるのでしょうか。私は両親の顔を思い出そうと思ったこともないし、特に気にした事も無い。だから分からぬといつのは理解できます。だけれども私は持つてゐるビジョンを求めるような想い等今までに持つたことが無いと思うのです」

「もしそれが記憶する時の想いに関係しているとしたら如何ですか？それで十分説明はつくでしきう」

宗之はそこで、そうか、と妙にすつきりした気持ちになつたのを覚えている。

「では私はこのビジョンに突き動かされるままに進んでもいいのですね？」

「さあ、それもどうなのでしょう。私は何も貴方に強制は出来ない。ただアドバイスするのみです。貴方が明確に望めば手は貸しますがね」

爬虫類のような瞳だつた。宗之はそれを確りと見据え決意したのだった。

「私は真実を知りたいのです。宜しくお願ひします」

ぐつしょり汗をかいている。もう随分肌寒い季節になつていると
いつのにこの汗の量は異常である。

唐突に目を覚まし、暗闇の中で大きく息を吐いた。心臓が脈打つ
音が耳にまで響いた。

義文は最近こうやつて目を覚ます機会が多くなつた。前にも全く
無かつた訳ではないが、ここにこのところやけに多い。かと言つて何か
特別原因となるような出来事があつた訳でもなく、夢の内容も目を
覚ました途端急速に彼方へと遠ざかっていってしまう。

なんなのだらう 夢から覚めたばかりの感覚は酷く過敏で、内
容は忘れているといふのにそれは長く尾を引いた。普段気になりも
しない暗闇が酷く恐ろしいものに感じたり、肌に触れている布団の
感触が氣色の悪いものもあるかのように感じる。

金縛りにあつてゐる訳でもなく、手足は動かそうと思えば動かす
事も出来るのに、動かすのが酷く恐ろしい事に思えて明かりを付け
る事も出来ない。辺りの気配を無意味に探つて、普段気にも留めな
い家鳴りにびくりと体を強張らせる。神経が鋭敏になつていると在
りもしない怪異を感じてしまいそうになる。

暗闇の中では時間の経過が早く進む気がする。だから早送りされ
る周囲と自分との差異が一層そう感じさせているのかもしれない。
どれ位そうしていただろうか。時計を確認した訳ではなかつたか
ら分からぬが、汗を冷たいと感じられるまでになると、神経の高
ぶりも大分静まつたようだつた。暗闇も普段の景色として馴染んで
いく。

馬鹿らしい、口に出して言つてみた。そう思ひたかつたから出た
言葉だつたのかもしだれない。だが、掠れた響きを持つそれを聞くと、
本当に滑稽な事に思えてきて、少々愉快な気持ちにさせなつた。一
種のアトラクションを経験したようなものかもしだれないと思つたの

である。こんなに手軽に、しかもたっぷりとリアルに体験出来るのはなんだか皮肉だなとも思った。どんなに金を掛けて工夫を凝らしたアトラクションでもここまで感覚を与えてくれた事は無いからだ。ただ、あれは一時の虚構だと最初から分かつてあるからこそ樂しめるのかも知れない。

上だけでも着替えようとベッドから降りたが灯りを点ける気にはなれず、手探りで適当な着替えを選び、着ていたシャツは床に放つた。朝になつたら洗濯機に放ればいい。そこまで行くのは億劫だった。

夢で何を見たのか、思い出すため記憶の断片を手繰れないだろうかと試みた。だが、必至に思い出そうとして出来るものではなく、ただ、蛇か何か爬虫類らしきものが出てきた事くらいしか分からなかつた。義文は特別爬虫類が嫌いな訳ではないが、気持ちが悪いと感じてしまう部分は少なからずあるようだ。例えば夢の中で大量に蠢くそれ等に囲まれただとか、そういう夢だつたのなら或いは冷や汗が大量に噴出してしまった事もあるだろう。だが、多分そんな夢ではないような気がした。かと言つて他にどんなシチュエーションがあるだろうか、と思つても早々思い浮かぶものではないから、ただ気がする、というだけで実はそのかも知れない。

再び横たえた体で一度だけ寝返りを打つた。左を向く。こちらは窓際となつてあり、今は分厚い遮光カーテンで外界の様子は全く伺えない。それでも僅かに上部から月明かりだろうか　ほんの僅かな灯りが漏れてきている。

そこでふと白夜という言葉が浮かんだ。まず日本人には馴染みがないし、実際に見た事がある人もほんの一握りではないだろうか。だが、知識としてどんな現象かは知つてゐる。夜でも昼間の様に明るい現象を言うのだ。しかし、義文は今、この白夜という言葉を思い出しながら違う情景を思い浮かべた。その言葉通り白い夜を思い浮かべた。一面に雪が積もつた光景に近いかもしれない。月明かりを反射して辺りがきらきらと輝き、青白く全体が発光するような

なんだか白夜という言葉はそれを表したほうが相応しい様に感じる。一面の雪景色というのも義文にはあまり馴染みはなかつたが、それでも日が沈まない夜よりは余程馴染み深いからそう思うのかもしれない。

思えばもう直ぐ暦の上では冬である。今年は雪国へ行くのも良いかもしないと思った。滅多に旅行などしないのだが、雪景色が恋しくなつた。学生時代に友人達とスキーに行つたきり、一面に積もつた雪というのは見ていない。

誰か一緒に行つてくれるだらうか、そう思ったが心当たりはなかつた。一人で行くのは苦ではないのだが、どうもそれでは結局行きそびれてしまう気がした。予め人と予定を立てておけば、気が付いたら春だつた、という事態にはならないだらう。

日帰りでは少々辛いだらうから一泊はしたい、と思つたところで、ふと仕事の事を思い出した。卵巣庵での休みはあつてないようなものなのである。連休を果たして取れるものなのか疑問に思つた。急に呼び出される事もあるし、よっぽどの予定が無い限りは出勤しているのである。行つても片付けをするか、それも無い時はお茶を飲みながらのんびりするのが常なのだが、連休の許可を得られたとしても忘れられて、直ぐに呼び出しをくらうそうな気がした。それでも気が気ではない。

それに 事情を話したら那葵も一緒についてきそうだ。

僅かに苦笑が零れる。多分この予想は十中八九間違いないと思われたからだ。それでは旅先でまで仕事をしていふのと変わらない状態になりそつだが、那葵なら雪景色を見てどう思うのだろう、そんな事を想像すると一緒に行くのも悪くないと思える。

那葵の集めているがらくたには民芸品も多い。海外の物が大半だったが、日本の物もあり、義文は片付けをしながら見覚えのある品に出会う事も何度かあつた。それ等をどうやって入手しているのかは分からぬが、若しかしたら那葵は自ら出向いて入手している場合も少なくないのではないかと思つた。ふらつと出掛けてしまいそ

うなイメージがある。だとしたら相當に旅行慣れしていそうだし、案外良いスポット等も知っているかもしねえ。

そう思い至ると、たつた今思い立つた旅行案に俄然期待が募つた。先程とは全く違つた意味で鼓動が逸る。

恐らく那葵が来るとなれば要も一緒に来ないだらうかと思つた。だが、バンドも忙しいだらうし、そんな暇は無いのかもしねえ。先日知つた本業というのも詳しくは分からぬが、兼業しているとなれば益々忙しいだらう。

そして 宗之という自分そつくりの人物を思い出した。要に施術してもらつたのだというその体には無数の印が刻まれていた。あの時はそれ程意識して見なかつたが、今思うと一つ一つがやけに印象深く記憶に刻まれている気がする。見えない部分の方が遙かに多かつただろうが、それでもそれ等に明確な意味があつたのではないとあれから少し考へるようになつていた。

自分とあんなにも似ていける人間は滅多に居ないだらう。自分で聴くとよく分からぬが、声もよく似ているといつ。だから気になつてしまふというのは極当たり前の事であつて、別段可笑しくは無い。ただ、特徴的過ぎる身体的特徴故にこの興味は増徴されていふと言つて良いとも思つ。今迄全く縁の無かつた世界。そんな世界に自分がいる。そんな倒錯的なパラレルワールドが交差する瞬間をこの目で見ているような気分になる。また、これは直接本人に会つている時より、義文一人になつてじっくり考へる時間が出来た時に強く感じてしまふ事だつた。

とは言え、あれから宗之とは一度卵蔓庵ですれ違つたきりであり、連絡先は勿論宗之がどうやって生活しているのかも分からぬ。あの身体的装飾ではやはり出来る仕事も限られてくるだらう。卵蔓庵にも義文が知らないだけで頻繁に出入りをしているようだし、若しかしたら那葵や要の仕事を手伝つてゐるのかもしねえ。

義文は一応那葵や要の本業というものを凡そ理解したつもりだが、具体的な部分はさっぱり分からぬ。また、理解したつもりになつ

ているだけで実は全く理解できていないのでないかと思うような事もあった。やはり馴染みのない仕事には変わりないのだからそれも仕方ないのかもしだれなが、利用する客はちゃんと理解した上で利用しているのだろうかと、疑問を抱かないでもなかつた。また客はどうやつてあの店の正体を知るのだろうとも思つ。何かしら宣伝をしなければ客は来ないとと思うのだが、やはり事情を知つた今もそんな素振りを見た事はない。

人づてに広がるという事も考えられるが、だとしたらもう少し繁盛していくても可笑しくないのでないだろうか。また、義文が居ない深夜や朝方に集まつてゐるのか、とも考えたがあの店に大勢が集まつてゐるのは想像が出来ないし、相應しくも無いだろう。直接聴いてみれば早いのかも知れぬが、何となく遠慮があつた。義文は踏み込んではいけないような　否踏み込みたくないどこかで思つてゐるのかもしだれない。

とうとうと思考を赴くままに這わせていると空が大分白んできたようだつた。部屋の中も薄ぼんやりとした明るさが充満してゐる。鶉が何か喉に詰まつたような特有の鳴き声を響かせてゐる。鶉が好きと言う人は少ないだろうが、義文は苦手である。それでもこの鳴き声だけは何となく好きだつた。昔歌つた童謡でこの鳴き声に鶉の愛情が詰まつていると感じた印象がそのまま残つてゐるらしい。

もう直ぐ起床の時間だ。聊か眠氣はあつたものの起きてしまつた方が楽だと思い上体を起こす。

それに何か音が聽きたいとも思つた。何でも良かつたが、先日気紛れに買ったG a l l e y のCDを手に取る。一度流し聞きしただけでこんなものか、と思つた程度の感想しか持つて居ない。別に悪かつた訳でもないし、嫌いだつた訳でもないのだが、その時の気分なのだらう。

一番新しいというアルバムを買つてみたのだが、ジャケットには変形した白い人体が曲線のフォルムも美しく控えめに描いてあり、ベースは深い青にも見える黒だつた。色の対比がとても綺麗だと義

文は始めにそんな印象を抱いたのだが、よくよく見ると少々グロテスクである。

パソコンを起動させ、既に取り込んである楽曲を再生する。始めは静かな調子のSEから始まり、途中からひび割れたような低音と高音が入り混じった音が押し寄せる。民族楽器と電子音を掛け合わせたような音が厚みを持つて膨れ上がり唐突に終わると、次のトラックへとタイミング良く切り替わった。それは間違いなくハードな曲だろう。音も重く、テンポも速く、無数の叫び声で彩られている。ヘッドホンで聴くと右から左と抜けるように縦横無尽に駆け回る音が形を持つているかのようにリアルだった。

思考が塗り潰されていく感じがした。蜘蛛の糸のように張り巡らされた思考回路が全てこの音のかたちで装飾されていく。

義文は暫しその感覚に身を任せた。瞬きの回数が減り、呼吸さえゆっくり静かなものになる。この状態は無心と言うのかもしぬが、音に神経を支配されている、と言つた方がしっくりくるかもしれない。だが悪い気はしなかつた。寧ろ心地良いとすら感じた。何かに抱き込まれているような安心感があつた。強張っている様にも見える体はこの上なくリラックスした状態もあるような気がした。ああ、何故自分は知らなかつたのだろう、そう思つた。Gale eyの名前は随分前から知つていたし、楽曲も少しは知つていたのだ。だけど、Gale eyの楽曲が与えてくれる世界というものが全く見えていなかつたんだと氣付く。ただ集中して聴いたからといって見えるものではないだろう。恐らく、義文がそれを見るだけ、知るだけの準備を整えたからこそ分かつたのではないかと思うのだ。

鳥肌が立つ。ざわざわと肌が蠢く感覚があり、静電気のような細かな刺激が皮膚の内側から起き上がつてくるのを感じる。薄暗い室内で己の腕に浮き出した小さな凹凸眺めてみた。まじまじと鳥肌が立つた様子等今までに無かつたのかもしれない。純粹な驚きが湧き上がつてくる。小さな粒が体の中に無数にある。

知らない。そう思った。確かに自分であるはずなのに見覚えが無

い。黒子の位置も昔からある痣の位置もそのままなのに全く見覚えがない腕だった。宗之の腕なのではないか。一瞬そんな馬鹿げた考えが頭を過ぎつた。だが、そう分かつてもなかなかその発想は消えてくれず、濶のように義文の奥底に沈殿していくような気がした。

『そういえば何時だらう、そう思い時計を見やる。既に八時になろうとしていた。そろそろ出勤の準備をしなければいけないだらう。まだこのままの状態でいたい、そんな気持ちがないでもなかつたが、思いの他体は軽やかに動き、体が覚えてしまつているらしい朝の準備を機械的に始める。

さて家を出ようか、となつたといひで携帯電話の着信音が鳴り響く。

「はい、長坂ですが」

電話は卵蔓庵からである。最初あの店に電話があると知った時は吃驚したものだが、電話の無い方が確かに可笑しい。

『おはよう御座います。河上です。すみませんが、今日は急用が出来まして店の方は空けさせて頂きますのでお休みといつ事にさせて頂いても宜しいですか?』

電話の相手は那葵ではなかつた。最も要であれば予想の範囲内ではあるのだが、先程まで彼のバンドの曲の世界にどっぷりと浸かっていたこともあり、なんだか妙な感動と驚きを感じてしまった。

『えつと、おはよう御座います。お休みといつのは構いませんが何かあつたんでしょうか?』

何か悪い事でもあつたのだろうかとそんな考えが過ぎり、一応尋ねてみる。

『いえ、特に長坂さんが心配なさるような事は御座いませんよ。明日は通常通りお越し下さい。突然申し訳ありませんが宜しくお願ひしますね』

丁寧な口調は懇懃過ぎるほど懇懃でまさにこいつもの要と言つた感じである。声からは何も察せられなかつたが、明日は通常通り出勤しますね

と言つ事ならば不慮の事故だと急病とかそういう事ではなさそうである。分かりました、とだけ伝えて電話を切る。

さて如何しよう、そう思つた。既に玄関先で靴まで履いている。行きたい場所は特になかつたがこのまま当てもなく出掛けるのも良いかも知れない。そんな風に考えて玄関のドアを開けるとなんだか妙に体が軽い気になつた。頭の中にあつた無意味な考えも雲散霧消していく気がする。

空は晴れのような曇りのような微妙な空模様だつたが、雨は降らないだろ。少々肌寒いが快適な温度である。自然と足は駅の方向に向いた。

行きたい場所を考えてみる。人が多い場所は避けたいし、かといって都心からあまり離れたくもない。手頃な公園にでも行こうか、と思いついたのは卵蔓庵の近くにある公園だつた。今迄一度も足を向けた事はないものの、駅からも割りと近く、かなり広かつたはずだ。沢山的人が利用するような場所ではあるが、広い分それ程気にならないだろ。と当たりをつけ、いつもの電車でいつもの乗換えをしつつの駅で降りた。改札は反対方向となり、毎日のように利用している場所なのに少しだけ違つた印象を受ける。そんな小さな事にもいちいち感心してしまつ自分がとても充実しているように感じられて気分も晴れやかになつてくる。

駅から少し歩くと木々が並ぶ並木道になつていて。辺りに緑の香りと若干の土の香りが混じり一層新鮮な氣分に拍車を掛ける。広葉樹は既に葉を散らしているものも多くみすぼらしい様相になつてゐるものあつたが、それも風情があると思う。綺麗に整つている必要はないのだ。

何か鮮やかな色も少し見たいと思つた。この時期に旬の花というのもあるのだろうが、公園にはそれらしいものは見当たらなかつた。ただ、申し訳程度に雑草に混じつて咲いている青い花があり、それを近くで眺めてみるとする。恐らく似たような花は道端でも咲いているのだろうし、別段変わつたところも、特に眼を惹く様な特

徵もない花である。それでも注意深く眺めれば中々面白い。花弁に這つた細かい筋も僅かにグラデーションになつてゐる様子も小さいからこそ益々緻密に見え、それが単純に凄いと思った。更に見ていると何故こんな発色をするのだろうとか何故こんな感触がするのだろうとか些細な部分が無性に気になつてきて、その疑問はその花を離れ世界、宇宙にまで拡大していく。全てが不思議に満ちている。全て分からぬことだらけだ。宇宙は何もない空間から誕生したのだと、前に聞いたことがある。それを考えると益々不思議だと思う気持ちは強くなつた。

若しかしたらこの世界は幻覚なのではないか。若しかたらこの世界は仮の理の中で作られた実験世界でしかないのではないか。本当の世界とは何も無い状態が正しいのではないか。素粒子レベルまで全でが分解できるのだと考えるとその状態が一番フラットな状態とも言えるのではないだろうか。はて、しかしそうだとすれば我々が意思と考えているものも素粒子の結合によって生まれた物質なのだろうか。ならば、これ等に一定の法則性がある事も頷ける。この解析が出来るようになれば全ての考え方行動の予測も可能なのではないか。

考えはどんどん飛躍し、花を見ながらにして別のものを見ている状態である。周りに人通りもあるが、自分で切り取られた空間にいるような錯覚さえ覚えた。だが、瞬き一つで急速に元の世界への接続を取り戻す事が出来た。そしてこの世界の様々な問題がいかに些細なものであるのかを実感し、如何でも良くなつてしまつ。また、早急に解決しなければいけないような問題も直ぐに解決出来てしまふのではないかと酷く前向きな気持ちも湧き上がってきた。実際には様々な柵もあり、そもそも行かないのだろうが、こいついう気持ちになるというのは良い傾向と言えるだろう。

しゃがみ込んでいた足を伸ばし再び歩き始める。公園に来たといつてもやはりやる「ことが無いのは同じである。一周してみようと思つた。

だが、あつとこう間に一周してしまい、再び思案に暮れることになる。足を止めて近くのベンチに腰掛ける。何故か卵蔓庵しか思い浮かばなかった。勿論今日は行つても閉まつているのだろう。

そこまで考えてはた、と思い至る。あの店が閉まつてゐるところなどあつただろうか、と。要は店を空けるといつてはいた。つまり今日は無人と言う事である。例えば西方の屋敷に向かう時であつても店は開店中で戸締りすら碌にされていなかつたのであるが、その際には義文も同行しており、正に無人となつた様子を今迄に見たことが無い。同じ様に開店中の札が掛かつてゐるのだろう、と思ったが、要が店に居た事を考へるときちゃんと戸締りされているのではないかとも思った。だとしたらどんな様子なのか少し見てみたいと思つた。丁度あの通りには物珍しい商店も多い。こんな時にでも覗いてみるのも良いかもしれない。

立ち上がるとまっすぐに駅の向こう側へ向かつた。

9 (後書き)

少々加筆修正が加えられる可能性があります。

雨が降っている。黒いタールのような雨水が溜まっている。

ゆらゆらと揺れる水面は何か無数の生き物を内包しているようだ。きっとその生き物達はタールよりも濃厚で深い深い闇色なのだろう。一階のアトリエからこの水溜りが目に留まり、臣広はふらふらと軒先まで出てしまがみ込んでいる。昼の気温は雨でもそれ程下がら事はなく、別段寒くもなかった。風は殆ど吹いておらず、軒下には雨が入つて来る訳でもない。だからただ無心で水溜りを眺めているのだ。

本日妙子は朝から友人と旅行に行っている。一泊三日の旅行である。

それ程遠方に行くでもないし、短い留守はあるのだが、妙子はそれでも家を空けることを散々心配していた。何せ妙子が数日空けるような事など数年に一度なのである。余程自分が頼りなく見えるのだろうかと思うと、臣広は些か複雑な心境になつたが、実際臣広の生活が妙子によつて支えられている事も十分理解している。

散々旅行に行くか否かを迷つていたようだったが、だから尚更、たまには息抜きをして欲しいと思い、強く旅行に行く事を勧めたのだ。

結果的に妙子は旅行に出かけた訳であるが、それまでもまた大変だった。恐らく自分の荷造りよりも残していく臣広の為の準備の方に余程手間を掛けたのではないだろうか。

食事は勿論のこと、考えられる限りの不足の事態に備え、様々な生活用品を準備していつてくれた。出掛ける際にはまるで何かの講習会のように事細かな確認もあつたほどだ。

そして、つい先程も電話があつたばかりである。日に数度はきつと掛かってくるだろう。これでは旅行に行つても満喫できないのではないかと思うが、妙子曰く、電話で声を聴いて適度に確認を取り

なければ気が氣ではなく、旅行などしていられない、といつのだつた。

「今まで言われてしまえばもつ臣広は苦笑いを浮かべて頷くしかない。

臣広は特に意味も無く一つ大きく息を吐いた。

体がその分軽くなつたような感覚になる。

そして、一度目を閉じゆつくり開く。視界が広くなつた気がした。雨の粒は小さく、遠くの方は少し白んで見える。水溜りの波紋が休む暇なく生まれては消え、重なつては打ち消されていく。虫にでもなつて横から見たら津波のように見えるんだろうか、等と考えた。虫の目線など考える機会は滅多にないから、想像すると少し新鮮な気持ちになる。

遠くを見たり、足元を見たり、毎日のように生活している場所であるのに改めてじっくり周囲を眺めるとなんだか知らない場所を見ているような、新しい発見が様々あることに気が付く。雨だから景色が変わって見えるというのもあるかもしれない、気分の問題なのかもしけれない。

それに左目だけで見る景色は実際のそれよりも酷く狭く閉鎖的なのだろう。焦点を合わせるのにも時間が掛かるし、コツを掴んで自然にそれが出来るようになるまでには少々時間も掛かつたものである。

ただ、片目だけというのは時に便利なものもある。目を開けたまま、外界の景色を眺めたまま、自己の内側へと簡単に沈んでいく事も出来るからだ。多分白日夢というものに似ているのではないだろうか。深く深く潜った場所から間接的に外を眺めているような奇妙な感覚だ。

その時の景色はやけに白っぽく所々反射するように光つて見えた。とても美しく、そして真新しい紙のような鋭利さを持つていると思う。気付かない内に何処かを傷つけてしまいそうな、そんな危うさを孕んでいる気がするのだ。

「のままずっとこじつけていたい、臣広はそんな風に思つた。一時の感情であるのは明白だが、そう思つことによつて聊か己の世界の構成をまた一つ明確にイメージできる気がした。そして、少し違つた形で絵に描くのだろう。無心に筆を走らせてその世界は出来ていくのだ。頭の中のイメージを転写するのだから何も考へないに越した事はない。余計な考えは元の世界を歪ませてしまつ要素でしかない。

とり止めもなく思考を遊ばせながら、ずっとと同じ景色を見ていると段々焦点がずれていき、丁度良いぬるま湯のような景色になつていぐ。鋭さは全て半透明の柔らかいもので被われている感じだ。

そして暫く空白の時間が流れる

一瞬のようでこの時間は実際数十分続いていたろう。気付いた時には雨は既に上がつていた。臣広は軒下から僅かに落ちる雫がなんだか少し寂しいと思つた。空はまだすつきりしない曇り空だが、暗い色が薄まつてゐる。きっと今日はずっとこんな空模様になるのだろう。

臣広は大きく伸びをしてずれた焦点を元の調子に合わせた。視界が一気にクリアになると、同時に酷くすつきりした気分になつた。そこにタイミングを図つたように電話が鳴る。

家中からであるが、周りが殆ど自然で囲まれてゐるような場所では外まで響き、気付かない方がおかしいだろう。作品に取り組んでいる時、妙子が不在の場合は大抵留守電にしてあり、出る事はないが、別に無視をしたいわけではない。

急いで家中に戻るとリビングにある子機を取つた。

「はい、嘉山ですが」

『ああ、臣広が出るなんて珍しいねえ』

電話口からは弾んだよつた軽やかな声が響いてきた。

「那葵が電話を掛けてくるのもめずらしいと思うが。今日ははどうしたのか？」

那葵から以前電話があつたのはいつだらう、と考えてみたが、思

い当たらなかつた。若しかしたら掛かつてきた事など今までになかつたのかもしれない。

『これから何か予定あるかい?』

「いや。私は大抵籠つているだけだからね」

『ではこっちに出てこないか? 海晴と英志が近くに居るみたいだから車で迎えに行かせるよ』

海晴と英志とは要と同じバンドのメンバーである。数回面識があつたが会話を交わした記憶は殆んど無い。

『私は構わないが、迷惑ではないか?』

『大丈夫だよ。車なんだし、ついでついで』

臣広は流石に気が引けたが、那葵のいつものペースである。使えるものは使つてしまつというその精神はある意味見習いたい部分だ。それに不思議と那葵の周りにいる人間は那葵に使われることを不満に感じていないうつなのである。寧ろそうすることが自然だと思つてゐる様に感じることすらある程だ。

これを不思議にも思うが、臣広もその感覚が何となく分かつてしまふし、説明しようとするとなつて難しい。出来なくは無いのだろうが如何にも抽象的で曖昧なものとなり、本質からは大きく外れたものになる氣がする。

半ば那葵に押し切られる形で電話は切れ、結局臣広は急遽出掛け支度をする羽目になつた。無意識に大きな溜息が漏れたもののこれは条件反射のようなものなのだろう。臣広のように極端に刺激の少ない日常を送る人種にとつては僅かな外出でも心が躍るものである。

迎えに来た二人は見掛けは聊か派手であるが要同様丁寧で、話し難いということもない。寧ろ要より親しみ易さがあるかもしれない。要は社交的ではあるが、なかなか心の奥底が見えないような性質だからだ。

『わざわざすみません』

『いえ、用事があつてこっちまで来ていましたし、帰り道なので気

にしないで下さい」

海晴は金髪に染めた短髪にたれ目が特徴的な青年である。笑うと笑窪が出来、少年のような印象だ。メンバー四人の中では一番小柄だが、これで激しいドラミングをする。臣広は初めてその様子を見た時普段とのギャップに驚いた程である。

もう一人の英志は無口で高身長ということもあり、聊か威圧感があるが、黒髪を軽くボブにした髪型と田元の柔和さで近寄り難いと印象は随分和らぐように思う。

英志の運転で出発した車は丁寧な運転だったが、随分早く卵蔓庵に到着した気がした。道が空いていたのもあるのだろうが、臣広の運転ではこうはいかない。実際それ程時間に差は無いのだろうが、運転中は気が張るからか無駄に長く感じるのだろう。車窓からの眺めも全く違つて見え、随分新鮮なものだと密かに驚いた。

「食べるかい？さつき小枝子さんが持つて来てくれたから」

店内には誰もおらず、導かれるまま穴倉へ深く潜つていくと、那葵は突き当りの真っ赤な部屋で真っ赤な寝椅子に寝そべり、落雁を食べていた。傍らにはくびれのある優美なアンティーケのカップが置かれており、紅茶のお茶請けとしては何ともしひばぐな組み合わせとなつてゐる。それでもこの部屋では何故かしつくりとくるような気もした。

「落雁なんて随分食べていないな」

そう言つて進められるままに一つを口に運んだ。独特の食感のそれは、細やかな粒子を残して口の中を溶けていく。臣広の心の奥底に沈殿した澱をも同様に消去してくれるような気がした。

タイミング良く要が運んできたお茶で残った粒を流し込むと条件反射のように力が抜ける。湯飲みに注がれた酷薄な色の液体は日本茶であった。やはり臣広にはこの組み合わせの方が良い。

「じゃあ、俺等は世貴んところ行つてるから」

のんびりとなんの用なのだろう、などと考えながら茶を啜る臣広とは裏腹に、海晴は急ぎ茶を飲み干すとそう要に声を投げて部屋を

出て行つた。英志に至つては一口口を受けた程度である。要に掛けた声は気軽なものであつたが、軽く那葵に頭を下げた仕草は丁寧そのものだ。やはり那葵は何か一種の抗いがたい雰囲気を持っているのかも知れないと思つた。

「それで何か用があるのか？」

落雁の包みを弄びながら那葵に問う。思えばこんなに気安く声を掛けているのは臣広くらいかもしない。

「特にないよ。まあ居たら面白いんじゃないかつて思つただけ」無意味に紅茶を銀製のスプーンで搔き回している那葵が間延びした声で答える。視線は渦を巻くカップの中身に注がれている。臣広の位置から見ると更にその色を濃くし、赤黒く鈍重な色を帯びていたそれは深く暗示めいたものを秘めているよつた気がした。

「何がだ？」

この問いに那葵はただ笑つただけだつた。

その那葵らしい回答に一気に力が抜ける。無意識に大きく息を吐くと漸く落着いた心地がした。この赤い空間は何度来ても始めは馴染めないらしい。部屋に入つた途端一瞬息を飲み、鼓動は幾らか早くなつてゐるはずだ。もし那葵がこれを見越して居たとすればなんという悪趣味だろう。ただ、本人は全く寛いだ様子であることは間違いない。

「なんですか、人間は動物とかさあ象るんだろうねえ」

臣広はいきなり何を言い出すのだろうと那葵を見やると、手に持つた落雁を指先で転がしながらそれをじっと凝視してくる。どうやら落雁に象られた兎を見ての言葉のようだ。

「親しみがあるからではないか？子供向けのビスケットなんかでもあつたし・・・楽しんで食べてもらえるように」という意図も考えられるが」

唐突な疑問だと思ったが、思い付いた理由を真面目に答える。

「そうかもしれないけどさあ、それをぱりぱり食べちゃうんだよ。なんか結構残酷だなあつて思うわけ。中には人間を象つたものとか

もあるじゃない？ああいつのつてさ、人肉嗜好の表れ何じゃないか
とさえ思つし」

「考えすぎだらう。そんな事を考えて作つていい訳ないじゃないか」「でもさあ食べちゃいたいほど可愛いとか言つじやない？ちょっとずれるけど目に入れても痛くないとかもさ。実際考えると凄く残酷じやない？流血ものだよ」

方眉を上げて話す仕草は那葵にしては珍しいものだつた。

「確かにそうだが、そこまで考えないだらう。寧ろ考えていたらこんなに普及していなはずだぞ」

「まあ意識はしてないのだとは思うけど、根底にあるんじやないかなあつて思うんだよねえ。可愛いものとかさあ自分の好きなものとか憧れるものとかさあそういうのと同化したいって思つのは。言われてみると多分思い当たる人も多いんじゃないかなあ」

確かに憧れの人を模倣するのはよくあることだし、気持ちは理解出来る。

「だが、飛躍し過ぎていなか？私はカニバリズムなど想像するだけで胸がむかつくぞ」

「同化がイコールでカニバリズムという考えにはなかなか到達出来るものではないだらう。

「それが普通の反応さ」

「ん？ それでは先程言つた事と矛盾していいか？」

「してないよ。同化したいって欲求があるつて事は行き過ぎれば確実にカニバリズムになる。だから嫌悪しなきやいけないのさ。もしくは神聖視するとかその行為が非日常的なものだと認識していなければならぬ。でなければ人間社会は成り立たなくなつてしまふだろ」

「カニバリズムという文化が極近年まであつたことは理解している。その社会でもそれに意味を持たせていた事を考えればまあ納得はできるがな 結局何を言つたいんだ？」

「いや、意味などないさ。ただなんでだらうなあつて思つただけ」

那葵は既にその話題には興味を失ったかのような様子で弄んでいた落雁を口の中に放つた。だが、臣広は納得がいかない。よく考えてみると無意識の中にカニバリズム的な欲求が潜在的にあるのではないか この予測を打ち消すことが出来なくなつた。

「ねえ、ピアスとかあけないの？」

那葵が上体を伸ばして臣広の髪を搔き上げた。普段は中途半端に髪の毛で隠れている耳が露にされる。

「あけないよ。手入れが大変そうだし、私はあまり装飾品が好きではない」

唐突な質問だとは思つたが、今に始まつたことではない。それに単純な問い合わせ反射的に答えが出てくるくらいにはこのやり取りに慣れてしまつていた。

「似合つと思うんだけどね」

「そう？」

那葵がこんな風に言つのは珍しいと思つた。自分に似合つかは考えたことはなかつたが、そう言われれば悪い気はしない。

「要にあけて貰えれば良いよ。似合つピアスも選んでくれるよ」

「いや、見ているのは面白いけど遠慮しておくよ。それにそう言つ那葵もあけていいじゃないか」

「僕は似合わないからねえ。それに要是僕にはあける気ないし、あけて欲しくもないみたい」

その回答はよく分からなかつたが、少なくとも那葵に限つて似合わないという理由はない気がした。いや、それ以前に那葵が他人の考え方で己の行動を変えるというのはなんとも可笑しい話ではないかと思う。

「あけたいとは思うのか？」

「いやあ、別にい」

氣だるげな返事だが、とても優しい表情をしているように見えた。光の加減なのかもしれない。ただ、この回答をそのまま信じるなら、那葵は特にピアスに対する関心がないということなのだろう。だが

らきつとどつちでも良いのだ。臣広は一人でそう納得し、先程感じた微かな違和感を忘れた。

「どうしてこの部屋を赤くしたんだ？前から気になっていたが・・・とても落ち着く色とは思えない」

臣広はふと気になつた疑問を唐突に思い出し、口にした。特に聞いてどうなるものでもない。だから今まで何となくタイミングを逸していた。

「ここには赤でしょ。青とかも好きだけど、ここには青じゃダメなんだよね」

「なんでだ？」

青がだめ　その感覚は何となく分かる気がした。ただそのイメージがし難かつただけのかもしけないが青では妙に白々しい気がする。それを那葵が望んでいない事が直感のようなもので理解されたのだ。

「ここには穴倉なのさ。ぬぐぬぐと心地良く生暖かく包んでくれる穴倉。ここで生まれていくんだ、全てが　まあそういうイメージだよね」

最後は大仰な程の仕草で小首を傾げ微笑んだ。からかわれているのだろうか、そう思つてしまつような仕草である。だが、多分本心だと臣広は思つた。那葵は基本的に嘘はつかない。本心を隠したような、はぐらかすような発言は多くするが、それが虚言だった事は一度も無い。意図的にそうしているのかもしれないし、実際の所臣広は何か思い違いをしているのかもしれないが、それでも臣広なりに現在までの那葵との付き合いで得たパターンより那葵の感情とでも言ひのだろうか、それを察する事が然程難しくはなくなつていた。

「成る程な。まあ感覚としては分かるような気がするよ。分かつても落ち着かないだろうという気持ちは変わらないがな」

「まあねえ、色相学で見たら興奮作用があるって色らしいから無理もないかもねえ」

どうやらそこまで分かつていてやっているらしい。那葵の考えを理解出来ても那葵のようにそれに適用出来るだけの能力を持つのは難しいようだつた。慣れなのか、それとも元来そういうた感覚が鈍いのか、臣広にはなんとも判別がつかなかつたし、本人も理由などよく分からぬものもある気がした。

「そういえばさあ、最近物騒なニュース多くない？通り魔とかさあ。あれさ、何人刺されちゃつたんだつけ？一十人くらい？」

「ああ、あつたな。大分そのニュースも落ち着いてきたが、模倣犯なんかも出てきているみたいだしな」

那葵は世事に疎い訳ではないが、このような話題を話すことは少なかつた。過去の出来事を引用する事は多いが、「ごく最近の出来事である。

「みたいだよねえ。たぶんその一人だと思うんだけど、この前世貴が遭遇してさあ」

「えつ、それは大丈夫だったのか？」

那葵はいつも落ち着いた様子でそう言つたが、勢い込んで聞き返してしまつたのは仕方がないだろう。何事もないからこそかも知れぬが大事には変わりない。自分自身がここまで他人に対して反応出来る事に少々驚くと共に、その発見が聊か胸をすつきりさせてくれた。

「大丈夫って聞かれるとなあ。まあいろいろあつたよ」

相変わらずマイペースな話し方である。きっと那葵には臣広の心の動きなど知る由もないだろうし、興味もないのかもしれない。いつも感じる事ではあるが、この時ばかりは二人の間にある温度差といつものが臣広には不満だつた。

「まさか怪我でもしたのか？大変じやないか！いや、私が慌てても仕方がないが・・・犯人はどうなつたんだ？」

落着き過ぎてゐる程の那葵に少々焦れたのもあつた。つい声を荒げてしまつたが、所詮臣広には他人事でしかなく、首を突つ込める問題ではないのだろう。ただ、世貴はバンド活動もしているし、謂

わば有名人もある。その辺りの報道がなかつたことから考へると余程大事だつたからではないかとも勘繰つてしまつ。

「怪我はしないよ。世貴が怪我なんてするわけないじゃないか」まるで有り得ないといつようによく笑う那葵であるが、何故そこまで言い切れるのかが分かるほど臣広は世貴との付き合いは深くない。それでもそう断言されてしまえばそなのかと納得するしかない。

「なら良いが・・・それでは何があつたんだ?」

「世貴が気に入らなかつたみたいだね、その犯人をさ。だからいろいろあつた訳」「いろあつた訳」

「気に入らない?」

「気に入らないとはなんだらう」若しかしたら世貴は空手の有段者か何かで撃退したというような話なのだらうか、そんな風に考えて見たがいまいちしつくり来なかつた。

「ああ見えて世貴は人の痛みとか分かるし無闇に人を攻撃することもない。それに全てを理解し包み込むような包容力も持つているんだ。だけどね、駄目だつたみたい、その犯人は。世貴に必要ないって判断されたの。だから消されちゃつた訳なんだな」

「ちょっと待て、消されたつてまさか勢い余つて逆に殺してしまつた、とか言つんじやないだろうな・・・?流石にそれは正当防衛にしても度を越すぞ」

正当防衛で誤つて殺してしまつた場合、罪は軽減されるのだろうがそれでも何かしら裁きは下される。身を守る為に本来被らなくてもよかつた筈の罪を被つてしまつたことになり、かなり損をしているように思つし、それが身近で起こつたとなるとますますやりきれないような気持ちになつた。

「違うよ。消しちゃつたんだつてば。殺すと消すつて違うよ

「殺すことを消すとも言つんじやないか。だが それだと『籍から抹消したとかそういうことなのか?』

果たしてそんな事が簡単に行えるのか否かということはさて置いて、浮かんだ可能性をあげてみる。社会的に抹殺するということも或

いは消す、という事に該当するだらう。

「まあそれはそうだね」

「それはそうとは?」

那葵の答えが分かり易かつた試しなどない気がするが、今回は更に分かり難い。人一人を消した、と言えばその方法はいくつ限られているだらうからだ。

何故にここまではつきりしないのか　臣広には疑問ばかりが募る。自分に直接的には関係ないかもしだれないが、身近な出来事である。ここまで話を聞いたからにははつきりさせた方が良いのではないだらうか。それはただの野次馬根性からとていうのではなく、証言を求められる機会もあるかもしだれないという事を想定したのである。知っていたからといって言える事は限られるのではないだらうが、中途半端に事情を知っているといつのは誤解を招く発言をしてしまった。怖い。

「そのままだよ。言葉のまま。綺麗さっぱり消しちゃったんだ。存在も記憶も」

「馬鹿を言つたな催眠術でも使えるのか?」

言葉をそのまま受け取れば、まるでデータを削除した時のようにその存在　姿形はまるで初めからなかつたかのように消失し、記憶、または記録といつものからもその存在が在つたという事実が抹消されてしまつてになる。そんな荒唐無稽の話があるのであるらうか。少なくとも臣広が理解している世界の話では有り得ないと断言して良い。

あるとしたらそれこそ見世物としてのイリュージョンと催眠術の場合は集団催眠というやつだらうか　それくらいであった。

「催眠術ねえ。或いはそう呼べるのかもしれない」

那葵はうつ伏せに体を返すと僅かに上目遣いで考え込むようにそう言った。

「私は催眠術を否定するつもりはない。今は医療にも採用されてゐるそうだし、それによつて治療技術がもつと進歩するなら喜ば

しいことだと思う。だが、そんなに易々と都合よく使えるようなものだとは思わないぞ。集団催眠なんかはそれこそ一種の舞台造りから入り、半ばトランス状態にまで持つていかなければ実現できないうだろ？まあその例としてはこの部屋なんかは最適かもしけないがな」

臣広は話しながらそう気付いたが、外部での部屋と同じような場所を作るのも大変であろうし、大人数を収容するとなればもっと困難だ。更に集団ということになれば余程綿密に計画をしなければ容易に催眠状態に持ち込めないだろう。それこそ芝居の舞台より巧妙にその世界を作り込まなければ実現することは不可能だと思う。

「舞台装置は案外簡単に作れてしまうものさ」

「じゃあ、今回も作ったと言う事なのか？」

「間違つてはいないだろうけど、そういうことじゃないんだ。多分ね、僕と臣広との間にはかなり大きな理解の齟齬がある。まあ大して問題ではないんだけどね、この齟齬つてやつは」

那葵の表情は相変わらず楽しそうなそれだ。からかわれている訳ではないと分かっていても、このはつきりとしない感覚はなんとも消化不良でもやもやしたものが腹の中溜まる感じがした。

一人の人間が数十年生きてきて、関わってきた人間全てを特定するのにはまず無理だろ？「ごく僅かな接触でも記憶に残る場合もあるし、残つていなくても本人の知らない部分には記録されているものだつたりもする。それを含めて考えれば例えどんな方法を用いても存在の抹消は出来ないだろ？」

それを前提とした上で臣広は話している訳だが、この前提からして那葵の指すそれと齟齬が生じているのではないかという可能性に思い当たつて軽く身震いをした。

「じゃあはつきり説明してくれよ。那葵はいつも回りくどい事を嫌う癖に自分の言つことは全く要領を得ていないのを自覚しているか？」

「僕は思ったことを感じたまま、一番近い形で話しているんだけど

なあ。臣広だつて、自分の絵の説明なんて出来ないだろ？出来てもそれは何か違うって分かっているはずだ。それと同じだよ」

確かにその通りではある。しかし、そうとしても今回の件はまた別のことのようにも思つ。ただ起こつたこと、事実を述べてくれればそれで良いのだし、例え臣広の理解を超える催眠術の詳細な内容を語つてくれたのだとしてもとりあえずは納得がいく。

「世貴はそういうことが出来ちゃうの。僕とともによく似ているでしょ？」

不満げな表情を見て取つたのだろう。那葵はそんな台詞を付け加えたが、結局何も進展はしていない。那葵と世貴の類似点をここで初めて気付き、確かにと納得出来たのが収穫くらいのものだ。

だが、この発見は案外臣広に大きな啓示を与えてくれた用に思う。改めて考えると何故気付かなかつたのか不思議で仕方がない程二人は似てゐるかもしれない。そして、何故か那葵と結びつけると、一人消すことも然程疑問にも感じられなくなつてしまふのである。那葵ならなんの痕跡も残さずにそれくらひ実行してしまうのではないか。盲目的にそう思つてしまえる部分が臣広の中にあつたのだ。結局何一つ進展はしていなかつたが、本の数秒前まであんなに知りたかった事が、今は知らないほうが良い、知らなくて当然なのだと思えるようになつっていた。

つまり那葵とはそういう存在なのだつた。

不思議なほど落ち着いた感情の変化に聊か驚き、『ナキ』という響きのせいなのかもしれない、ふとそう思った。

ちらりと那葵を見やるといつの間にか傍らにあつた分厚い本を開いている。ただ流し読みしているようにしか見えないのだが、それは見かけだけなのは既に承知している。この場合呼びかけて返事が返つてきても、本人の意識に寄るものでは無いと思つた方が良いだろ。

真つ赤なソファに改めて体重を預けると、体がずぶずぶと沈んでいく。それは実際以上に深くそこに馴染んでしまつたような、そん

な感覚を臣広に与えた。

ああ、ここは胎内なのだ　臣広はそう思つた。その発見は、静かな感動を与えてくれた。じんわりと広がる熱のよみに臣広の中を広がっていく。

背が丸まる。手足が丸まる。

気持ちの良い浮遊感と安心感がどんどん強くなつていつた。

「もうすぐだよ」

頭の中でそう響いた気がした。それは那葵の声だと思つたが、若しかしたら違うのかもしれない。とても深く優しく響いた声は酷く女性的でもあった。

何が直ぐなのか全く分からなかつたはずなのに、何故かその声に更なる安心感を得られた気がして、臣広の意識はふつつと途切れだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9390m/>

ナキモノ

2010年10月8日11時11分発行